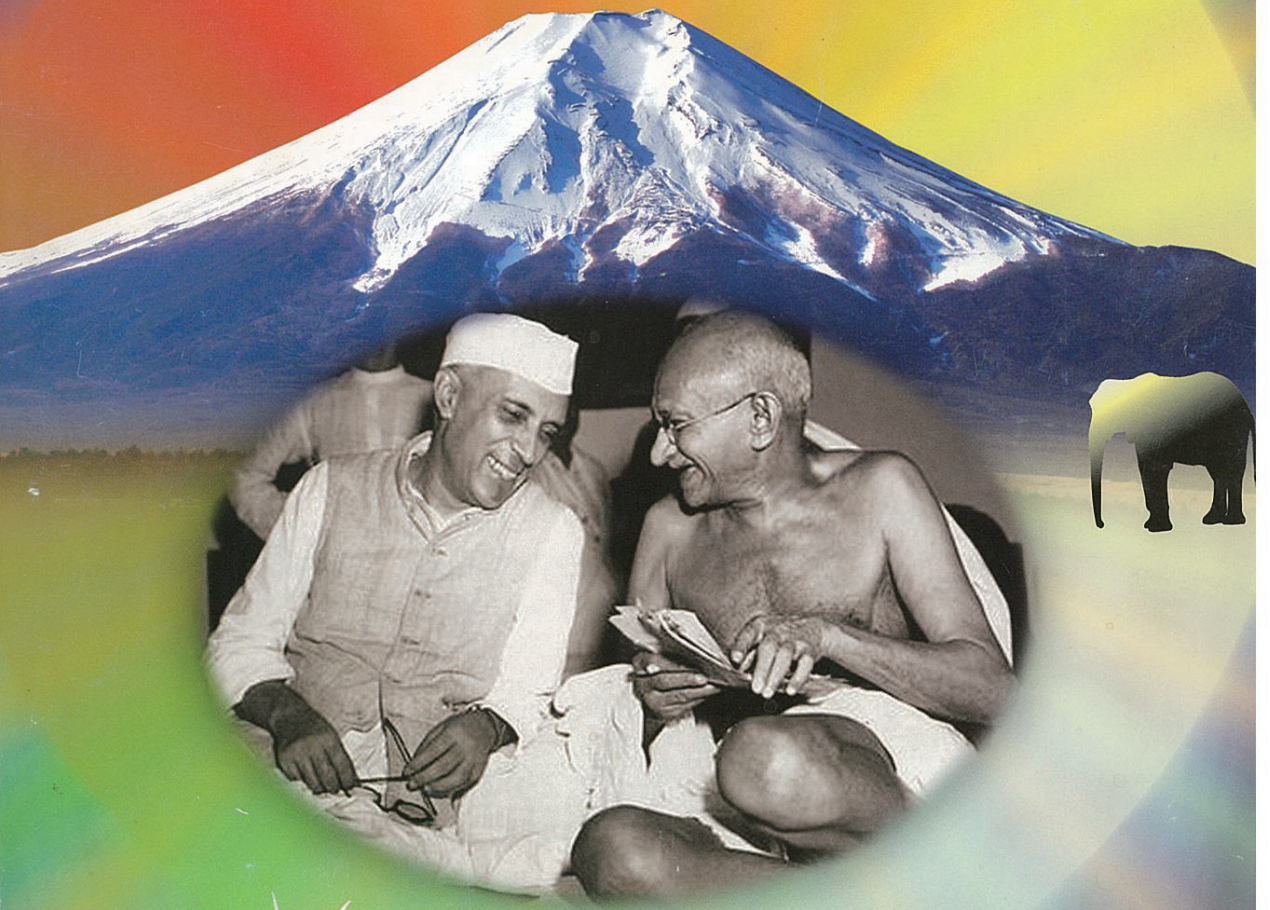
日印文化

インド共和国発足60周年記念特集号



KJICS

関西日印文化協会

KANSAI JAPAN-INDIA CULTURAL SOCIETY

कान्साई जापान-भारत सांस्कृतिक संघ

神戸・三宮 「さんちか」

季節で楽しむ
お洒落とグルメ。

四季折々のファッションを楽しみ、旬の食材を堪能したり、
ご家族や、お友達と楽しくショッピング。
「さんちか」は、そんなあなたの季節の栞。
訪れる人々をわくわくさせることでいっぱい、
あなただけのお気に入り、見つけてください。

さんちか 検索

santica
The New Heart of Kobe 神戸・三宮さんちか
www.santica.com

さんちか名店会 神戸市中央区三宮町1-10-1 ☎078(391)3965 ○営業時間／AM10:00～PM8:00(飲食店はPM9:00オーダーストップ)

目　次

2　ご挨拶　溝上富夫（関西日印文化協会会長）
4　祝　辞　Vikas Swarup（在大阪・神戸インド総領事）
5　井戸敏三（兵庫県知事）
6　矢田立郎（神戸市長）
7　平林 博（公益財団法人日印協会代表理事・理事長）
8　Paramjit Chadha（インドクラブ名誉会長）
9　Mukesh Punjabi（在日印度商議会議所名誉会頭）
10　A.D.Daswaney（インディアン・ソーシャル・ソサエティ名誉会長）
寄稿（論文・エッセー等）
11　頼富本宏（関西日印文化協会顧問・種智院大学名誉教授）
24　貝原俊民（公益財団法人兵庫県国際交流協会名誉会長・前兵庫県知事）
26　新野幸次郎（財団法人神戸都市問題研究所理事長・神戸大学名誉教授[元学長]）
28　黒澤一晃（関西日印文化協会前会長[顧問]）・神戸松蔭女子学院大学名誉教授）
34　三上敦史（大阪学院大学経済学部教授）
42　溝上富夫（関西日印文化協会会長・大阪外国語大学名誉教授）
50　塩谷マクスーダ（北陸ジャパン・インドクラブ会長）
52　イナムラ・ヒロエ・シャルマ（日本アーユルヴェーダ学会理事・大阪アーユルヴェーダ研究所所長）
54　モガリ　真奈美（関西日印文化協会理事・マルガユニティー主宰）
59　田中峰彦（シタール演奏家）
61　徳田一彦（関西日印文化協会副会長・地球市民の会日本センター理事）
75　高橋 至（エアインディア西日本地区旅客営業部部長）
78　南波亘子（前・インド総領事館通訳）
83　パルミンダル・ソーディー（ミラ・レストラン店主）
85　大木香奈（大阪大学国際公共政策研究科博士前期課程2年）
91　資　料　インド独立後の主な出来事（年表）／インドの歴代大統領／インドの歴代首相／関西日印文化協会 役員名簿／公的機関 役員・所在地等／関西日印文化協会 会則

ご　挨　拶

溝上 富夫
関西日印文化協会会長
大阪外国語大学名誉教授

このたび、インド共和国発足60周年を記念とする『日印文化』特集号が寄稿者の皆様方のご協力を得て発行されることになり、慶びにたえません。この記念誌は関西日印文化協会が神戸に統合後、第７号目の出版であり、前号から６年ぶりの出版となります。従来の特集号は、当協会の創立〇〇周年記念特集号と銘打ってきましたが（その意味では、本号は創立52年記念特集号ですが、そのような「内向きな」タイトルをやめて)、はるかに重要な「インド共和国発足60周年記念」とすることにしました。

このような時期に、桑原泰業初代会長、黒澤一晃２代会長の後を受けて、私が伝統ある当協会の３代目の会長を仰せつかることになりましたのは、名誉なことと存じます。

2010年11月13-14日に、神戸で初めて開催されたインディア・メーラー(大インド祭)には５万人以上の来場者を数え、未曾有の成功を博しました。このことは、インド文化への一般市民の関心が飛躍的に増大していることを示しています。当協会もささやかながら貢献しましたし、今後ますます本会の意義が高まるものと信じます。在大阪・神戸インド総領事としてヴィカース・スワループという文人総領事をお迎えしたのも、私たちにとって幸運だったと思います。若くて行動力のある同総領事の尽力で、京阪神地区における日印の文化交流はますます盛んになるものと信じます。

我々も、これまで以上に積極的に両国の文化交流事業を一層促進させたく思っています。

遅ればせながら、当協会もwebsiteを開設しましたので、催物等の情報を、ご覧頂きたいと思います。(http://kansainichiin.jimdo.com/)

最後になりましたが、本誌のために貴重なメッセージを頂戴した各界の著名人の皆さま方に、心からお礼を申し上げます。

President's Greetings

It gives me great pleasure to introduce this special issue of our official Bulletin, Nichiin Bunka, commemorating the 60th anniversary of India becoming a Republic. This special issue is the 7th one the integration of the Kansai Japan-India Cultural Society and has been published after 6 years. So far each issue was titled n^{th} anniversary of the Kansai Japan-India Cultural Society(in this sense this issue could have been the 52 nd anniversary, but we have abandoned this "introverted" name) ,but the 60th anniversary of India becoming a Republic is a far important event.

It is a great honor for me to be have been appointed in this period as the third president of this long- standing society, succeeding the second president Prof. Kazuaki Kurozawa after the first president Mr.Yasunari Kuwahara. I feel 'also responsible for it.

The India Mela which took place for the first time in the Meriken Park, Kobe on 13-14 November, 2010 recorded a total number of more than 50,000 visitors, showing the rapidly-increasing number of common citizens who are interested in Indian culture. I can say that our society has also made some contribution to this success. I am sure that in the future the importance of this society will grow more and more. It is also very lucky that we have a young and active man like Shri Vikas Swarup, a man of literature as our new Indian consul-general at Osaka-Kobe since 2009. His contribution to promote cultural exchange between the two countries is very remarkable.

We would also like to try to promote culturla programs more actively.

We have opened our website. Please search http://kansainichiin.jimdo.com/

Last but not in the least I would like to express my hearty thanks to all the luminaries who have contributed their messages and those who have written their articles to this Bulletin.

Tomio Mizokami,
President,
Kansai Japan-India
Cultural Society

सत्यमेव जयते

CONSUL GENERAL

भारत का प्रधान कॉंसलावास
ओसाका - कोबे
CONSULATE GENERAL OF INDIA
OSAKA - KOBE (JAPAN)

17 January 2011

Message

I am delighted to learn that the Kansai Japan-India Cultural Society is bringing out a special issue of 'Nichi-In-Bunka' to commemorate the 60th anniversary of India becoming a Republic.

There is tremendous interest in India in Japan based on the common spiritual heritage of Buddhism and spurred, now, by the growing Japanese business involvement with the vibrant Indian economy. India and Japan are natural partners as the largest and most developed democracies of Asia. The India-Japan Strategic and Global Partnership has emerged as a strong pillar of Asian regional architecture in the 21st Century, contributing to the progress and stability of our shared region.

The Kansai Japan-India Cultural Society has been in the vanguard of forging deeper ties between India and Japan for more than five decades. As the friendship between India and Japan has continued to flourish, so have the activities of the Society, particularly under the dynamic leadership of Prof. Tomio Mizokami.

On this happy occasion, I wish the Society all success and many more years of service to the cause of India-Japan friendship.

(Vikas Swarup)

ADDRESS SEMBA I.S. BLDG., 9-26, KYUTAROMACHI, 1-CHOME, CHUO-KU, OSAKA JAPAN TEL. 06-261-7299, 261-9299 FAX : 06-261-7799

新たな段階に入った兵庫・インド関係

兵庫県知事 井戸 敏三

記念誌「日印文化」の発刊を、心よりお喜びします。

ＩＴ産業の躍進や消費の高度化等を背景に、めざましい経済成長を続けるインド。世界第2位の12億人の人口を抱え、今後も持続的な成長が見込まれている世界経済の牽引役です。

日印関係は1952年の国交樹立以来順調に発展し、昨年10月には日印包括経済協定の交渉も完了しました。両国の関係はますます緊密になっています。

兵庫とインドの関係も、昨年、新たな一歩を踏み出しました。

昨年12月、私はデリー、グジャラート州、ムンバイを訪問し、政府や経済団体、民間企業など幅広い方々と経済交流の促進について意見を交わしました。とりわけ、兵庫には鉄鋼や鉄道、環境などの分野で技術力の高い企業が数多く存在していることから、デリー・ムンバイ産業大動脈構想等の大規模プロジェクトへの協力、貢献を申し出ました。

また、2001年インド西部大地震への支援をきっかけに絆を深めてきたグジャラート州とは、学術・教育、ビジネス、文化（ABC：Academc, Business, Culture）の分野でさらに交流を促進しようと話し合いました。

私はこれに防災、環境、食品・食材（DEF：Disaster-Prevention, Environment, Food）を加え、ＡＢＣＤＥＦといった幅広い分野で、インドとの人・企業・地域の交流を深めていきたいと考えています。

市民同士の草の根交流も大きく広がった1年でした。関西最多の約1,500人のインドの方々が生活されている兵庫にとって、料理や音楽などインド文化は最も身近な外国文化の一つです。この土壌を礎に、昨年11月、神戸メリケンパークで「インディア・メーラー 2010」が初開催されました。2日間で約5万人の来場者を数える大盛況でした。この成功を受け、既にメーラー 2011の神戸開催が決まったとのこと、ぜひともメーラーが神戸の毎年の恒例行事として定着し、市民同士の結びつきが一層深まることを期待しています。

21世紀は交流と共生の世紀。世界の国や地域が経済をはじめ様々な分野で連携、協力しながら発展をめざしていかなければなりません。とりわけ、発展を続けるインドとの交流は、兵庫の新たな活力の源です。引き続き、幅広い分野でインドとの交流の輪が広がるよう力を注いでいきますので、関西日印文化協会はじめ関係の皆様のご支援ご協力をお願いします。

祝　　辞

神戸市長 矢田 立郎

インド共和国発足60周年を祝う記念誌「日印文化」の発刊を心よりお喜び申し上げます。

貴協会は、1958年4月にインド政府の公認団体として設立されて以来、神戸を中心に日印両国の相互理解と友好親善のため積極的に活動されてこられました。設立から50数年の間、諸処の講演をはじめ、国際映画祭、国際交流フェア等の国際交流イベントへの参加など、インド文化に触れる機会を数多く提供されてきており、市民のインド文化への理解促進に貢献されてきました。皆様の熱意とご尽力に心より敬意を表します。

インドと神戸の交流の歴史は深く、1868年の神戸港開港以来、多くのインドの方々が神戸を訪れ、活躍されました。現在でも、市内には千人を超えるインドの方々がお住まいになり、インド料理の店やインドの食材店、国内唯一のジャイナ教やシーク教の寺院などが存在し、インドを身近に感じることができます。また、神戸市と国連人口基金との支援によって設立した国際協力NGOである神戸アジア都市情報センター(AUICK)は、2004年度にインドのチェンナイを始めとするアジアの9カ国9都市等に都市間ネットワークを構築し都市問題の解決に日々協力して取り組んでおります。

近年は、IT産業をはじめインドの経済発展は大変目覚しく、国際社会における存在感を著しく増してきております。同じアジアの国として、経済や文化など幅広い分野で、インドは日本にとってますます重要なパートナーとなっていくものと考えております。それにともない、政府・行政レベルはもとより、草の根レベルでの活発な交流が一層重要になってまいります。共和国発足60周年記念を契機に、日印民間交流を担う貴協会のご活躍に期待いたします。

今後とも、インドと神戸との交流を深め、両国市民の理解と友好の促進にご助力いただきますようお願い申し上げますとともに、貴協会の一層のご発展と会員の皆様方のご健勝、ご活躍をお祈り申し上げます。

「インド共和国発足60周年記念特集号」に当たって関西日印文化協会に対する祝辞

公益財団法人日印協会
代表理事・理事長　平林 博
（元駐印・駐仏大使）

関西日印文化協会が「インド共和国発足60周年記念特集号」を発行されるに際し、公益財団法人日印協会を代表して心からのお祝いを申し上げます。

関西日印文化協会は、ネルー首相が初めて来日された翌年1958年に設立されて以来、関西地区唯一のインド政府公認団体として、日印関係の増進のために多大の寄与をされてきました。弊協会は、1903年の設立以来日印間の懸け橋となって参りましたが、関西日印文化協会に対しましては、目的を共有した同士として親しみと期待を持って参りました。

日印関係は、仏教を通じた長い精神的なつながりや経済的相互依存関係にもかかわらず、長らく疎遠な関係にありました。冷戦の終了と1991年以来の経済政策路線の大改革以来、インドの急速な経済成長と世界における政治的発言権の増大により、日印関係も大きなパラダイムシフトを経験しました。

1998年の核実験により一旦は停滞を余儀なくされましたが、2000年には、両国政府間において「日印グローバル・パートナーシップ」が樹立され、さらに2006年には、「戦略的グローバル・パートナーシップ」に格上げされました。すなわち、両国は単に相互の利益を増進するのみならず、ともに責任ある大国として国際社会のために貢献するという大義を共有することになったのです。

この結果、両国政府首脳以下重層的な関係が推進されており、両国関係は急速に拡大深化しつつあります。しかし、まだ両国の持つ潜在的な可能性に比べると不十分です。日印関係の裾野を広げ国民レベルでの友好関係促進のためには、インドに関する豊かな知識や経験とボランティア精神で貢献しようという貴協会の役割は、まことに大なるものがあり、弊協会といたしましても、共に歩んで参りたいと存じます。

貴協会による「インド共和国発足60周年記念特集号」の発行は、貴協会の日印関係にかける強い意欲の現れであり、心から敬意を表しますとともに、貴協会の更なるご発展を祈念申し上げます。

THE INDIA CLUB
7-15, YAMAMOTO-DORI 1CHOME
CHUO-KU, KOBE, 650-0003 JAPAN
TEL : 078-221-8525
FAX : 078-241-3379
E-MAIL: indiaclubkobe@yahoo.com

MESSAGE

I am happy to learn that the Kansai Japan-India Cultural Society is coming out with a special issue of the Nichi-in Bunka to commemorate the 60th anniversary of India becoming a Republic.

Since its founding in 1958 as the only officially recognized institution by the Government of India, the Society has been active in deepening the ever important relationship between the two countries. The Society has been promoting cultural interchange under the past Presidents, the late Mr. Yasunari Kuwahara and the second President, Professor Kazuaki Kurosawa. Under the leadership of the third and current President Professor Tomio Mizokami the Society has vigorously continued its mission by arranging several events on India in Japan including traditional dances, music programs, plays, lectures and most recently in helping make the first India Mela in Kansai a spectacular success.

I wish the Society all the best in its future endeavors to enhance cultural understanding between India and Japan.

Paramjit Chadha
Hon. President
The India Club

THE INDIAN CHAMBER OF COMMERCE-JAPAN

P.O. BOX HIGASHI 433
OSAKA, 540-8694 (JAPAN)
TELEPHONE : (06)6261-1741 (2 LINES)
FAX : (06)6264-1605
E-MAIL : icci@vega.ocn.ne.jp

AUTHENTIC HIGASHI SEMBA BLDG.,
702, 2-1, KITAKYUHOUJI-MACHI
1-CHOME, CHUO-KU OSAKA
OSAKA – JAPAN 541-0057

Message

It gives us immense pleasure to learn that Kansai Japan-Indic Cultural Society is publishing a special issue of ***Nichi-in-Bunka*** to commemorate the 60th anniversary of India becoming a Republic. We congratulate Kansai Japar India Cultural Society for all the achievements since its establishment in 1958 ir general and for publishing this special issue of ***Nichi-in-Bunka*** in particular.

Japan and India has built up a friendly and co-operative relationship in respect of economic eco-operation, cultural exchanges and alsc political viewpoint. The Japan-India friendship is getting more and more concretized day by day.

In such a situation, organizations like Kansai Japan-India Cultura Society can play a great role for strengthening people-people relationship which in turn forms the base for a long term relationship. This organization has already done a great job under the able leadership of Mr. Yasunari Kuwahara, the first president and Prof. Kazuaki Kurosawa, the second President. Under the leadership of the present President, Mr. Tomio Mizokami, a scholar of extraordinary caliber, the organization has already been doing well. We wish that under the leadership of Prof. Mizokami, a person fluent in Hindi and some other Indian languages and also a popular person amongst both the Indian community and the Japanese community in Kansai region, the organization will earn many more laurels to its credit in furthering Japan -India friendship.

ESTD. 1954

THE INDIAN SOCIAL SOCIETY

1-3, KUMOCHI 5-CHOME, CHUO-KU,
KOBE 651-0056, (JAPAN)

TEL: (078) 242-4092 **FAX: (078) 242-0135**

email: iss.kobe@gmail.com

Omedeto Gozaimas – Namaskar

I am delighted to observe that Japan India Cultural Society has played amazing role in strengthening cultural relations between Japan and India for past over half a century since its inception of year 1958.

To generate practical interest, Professor Mizokami took bold step in training young Japanese students for last couple of years by way of performing Hindi Dramas focused on Indian Culture. Japanese students not only performed on stage in Japan but also acted in Hindi Dramas number of times in various parts of India. Their performances caught many Indians, media and Government Circles by pleasant surprise, bringing Japan and India more closer.

Recent launch of India Mela, grand cultural event in Kansai in November 2010, initiated by Honorable Consul General Mr. Vikas Swarup, has been another practical step in bringing further awareness of Indian culture and traditions amongst Japanese in coordination with KJICS.

I congratulate Kansai Japan-India Cultural Society President and organizers for maintaining strong foundation of healthy bilateral relations, contributing both on cultural and economic front between Japan and India, and also publishing special issue of "Nichi- in-Bunka to commemorate the 60th India Republic Anniversary.

The Indian Social Society

A. P. Daswaney
Hon. President

パーラ朝仏教寺院遺跡・遺品の研究
(1982～2010年)

関西日印文化協会顧問
種智院大学名誉教授
頼富　本宏

1.
継続発掘中の仏教・ヒンドゥー教融合遺跡

すでに本誌『日印文化』の創立45周年記念特集号において、現代のインド仏教運動の指導者である佐々井秀嶺師が、多くの重要な遺品・遺跡発見という成果を上げたことについて、短い報告を行った。師はインド国籍を得た後、資金を募ってインド人考古学者A・K・シャルマ氏を発掘指揮者として、マハーラーシュトラ州マンサル遺跡とチャッティシスガル州シルプル遺跡の2州2個所の遺跡を新たに発掘している。

詳細については各所で報告されているので、もはや繰り返さないが、前者のナグプール郊外・マンサル遺跡の発掘については、ヒンドゥー教の宗教施設の可能性を主張するシャルマ氏とスポンサーで仏教寺院説を固守する佐々井師の見解が衝突し、以後新たな発掘作業は進んでいない。数少ない遺品から見ると、時代的にはグプタ後期、あるいはポスト・グプタ期まで遡る作例も認められるが、「仏教」遺品と断定できるものは非常に少ない。

他方のシルプル遺跡は、1982年に私たちの調査団が初めて訪れた時には、すでに6～7世紀のものと考えられる仏教寺院趾が2棟報告されており、佐々井師の援助による新規発掘によって、さらに多くのヒンドゥー教寺院趾とともに、数棟の仏教寺院趾が発掘されている。文殊菩薩や釈迦如来の小金銅仏がこれまでに出土し、近年では新たな金銅仏群とともに密教法具である金剛杵も発見され、これらについては、南インド・ハイデラバードの研究所で洗浄処理されたのち、個別の検討が行われている。

残念ながら、佐々井師が最も期待する「南天の鉄塔」伝説に関わる仏塔遺構は見出されておらず、他にも遺構の可能性がある多くの未発掘個所があることから今後の発掘作業に期待が集まっていたが、州政府が自州の観光資源の目玉として積極的に乗り出したため、遺構の発掘の主導権を得ることができなくなった。

その後の師の活動としては、マンサル遺跡に近いナグプール市内に、改宗して増大する新仏教運動の新拠点として龍樹菩薩大寺を建立した。佐々井師自身の原点となるべき龍樹菩薩を顕彰した寺院は、日本在住の篤信者の一建立によって、

2010年10月に日印の仏教徒参集のもと、盛大な落慶法要が営まれたことは誠に喜びに耐えない。ただ、新仏教徒たちは「龍樹菩薩」の意義を十分に理解しているというよりも、象徴的に捉えている感がある。

2.
仏教を保護した最後の王朝・パーラ朝の歴史的意義

筆者だけでなく、世界中の多くのインド学者が関心を抱いているパーラ王朝下に繁栄した仏教寺院の遺構・遺品については、特有の歴史的背景と宗教事情が存在していた。まず、最初にそのうちの数点を列挙しておきたい。

(1)「保護する者」（パーラ）という氏姓を持つ王族によって、約500年間、東北インド地域（ベンガル・ビハールの両地方）を統治したパーラ朝歴代の王の一部（とくに草創期）は、王本人あるいは王妃が仏教を信仰していた。そのうち４名の王の時代に、ガンジス河中・下流域に巨大な仏教寺院を建立したと、王統記（『ラーマチャリタ』）やチベットの仏教史に記されている。

(2) インドでは、４～５世紀のグプタ朝以降、かつてのバラモン教が民族化・制度宗教化されて再興したヒンドゥー教が、大多数の人びとの支持する宗教となり、地方の諸王朝もヒンドゥー教文化の中に成り立っていた。この傾向は、10～11世紀頃にムスリム系王朝が興起するまでの基本的状況であった。

それに対し、紀元前５～４世紀頃、仏陀釈尊が世に出て、教えを説いて教化した結果として成立した仏教とその教団は、紀元前３世紀にマウリア朝のアショーカ王などによって保護され、インド全域に広がった。また、紀元前後には、新しい思想と文化を具えた大乗仏教が成立し、従前の部派仏教に加えて勢力を拡大していった。

もっとも仏教は、釈尊時代も大乗仏教成立以降も、個人のさとりや宗教的な救いを目指すものであって、民族・民俗宗教であるヒンドゥー教のように、冠婚葬祭などの日常の宗教儀礼を持っていなかった。むしろ、仏教徒は出家して僧院で自己修行に専念するか、在家信者の場合には仏塔を巡礼したり、僧侶の説法を聴聞したりする他に積極的な参加は難しかったようである。

(3) パーラ朝時代の仏教が置かれた状況を、ここで把握しておく必要がある。約1200年の歴史を持つインド仏教は、３度の興隆期を経験した。

最初は、仏陀釈尊の活躍した時代で、のちに仏跡とされるブッダガヤーやサールナート、クシナガラなどガンジス河中流域を中心として発展した。その後、釈尊の弟子や孫弟子たちがいくつかのセクトに分かれ、僧院での共同生活を送るいわゆる部派仏教が、約300年間、インドの西北部から中央部まで勢力を広げた。

第二の波である紀元前後に興った大乗仏教は、『般若経』、『法華経』、『無量寿経』などの特色ある経典とそこに説かれる阿弥陀如来や観音、文殊などの菩薩等の新たなほとけを生みだし

た。この時期、西北インド・ガンダーラ地方を通して仏像がインドに紹介されることとなった。大乗仏教は、「大きな乗り物」という言葉の示すように、出家して自らのさとりを目指してアビダルマといわれる仏教哲学の学修に専念した部派仏教とは異なり、あらゆる衆生は成仏できる可能性を持ち、そのためには自らのさとりに向かってまい進するとともに、他者を救う慈悲をも発動させるべきという菩薩行を重視する新しいタイプの仏教であった。それゆえ、仏跡中心地である現ビハール州だけでなく、インド全域に普及し、さらにはシルクロードを経由して中国を中心とする東アジアに伝わっていったのである。

大乗仏教は、出家者だけでなく、菩薩という自利利他の求道者を意味した在家信者の熱烈な信仰を得て、インド仏教の多数派を形成していった。一方で、シヴァ神やヴィシュヌ神などの有力神を中心に据え、日常の宗教儀礼を整備したヒンドゥー教が大成してくると、大乗仏教が当初から保持していた悉有仏性思想を徹底し、聖俗一致を体験的・儀礼的に追体験することを目指す密教が急激に発展することとなる。

信仰という面からは、大乗仏教では八相成道の釈迦如来や極楽浄土で説法する阿弥陀如来、さらには慈悲救済のほとけ観音菩薩などの像を刻んで供養礼拝するのに対し、密教は聖なる世界であるマンダラを中心的に象徴する大日如来や金剛薩埵などの仏像を本尊として祀り、儀礼の本尊にもする実践的仏教である。

このような宗教事情を背景に、インド仏教の最後を飾るパーラ朝時代の仏教の特徴は、３段階を経て発展したインド仏教の総決算、すなわち大乗仏教の教えと仏像、および少し遅れてインド仏教の到達点として登場した密教をともに車の両輪のように信仰し、礼拝することにあった。このことは、パーラ朝期に建立された巨大仏教寺院の遺跡と、そこから出土した多くの仏像や仏具などの遺品から十分に復元することができる。

次章以下に、その実例を紹介したい。

3.
パーラ朝期の代表的な仏教遺跡

先述のように、パーラ朝諸王は、それぞれ大規模な仏教寺院を建立したと伝えられている。

初代　ゴーパーラ王
　　オーダンタプリー寺院
２代　ダルマパーラ王
　　ヴィクラマシーラ寺院
３代　デーヴァパーラ王
　　ソーマプラ寺院
12代　マヒーパーラ２世王
　　ジャガッタラ寺院

この他、ビハール州中部のナーランダー寺院も、パーラ朝の版図に含まれていた時代に、かなりの数の祠堂や大塔の一部が整備されたことは疑いない。

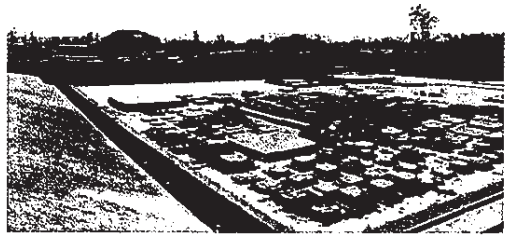
さて、上記のゴーパーラ王をはじめとするパーラ朝諸王が建立したとされる寺

院を「パーラ朝の四大寺院」と総称するが、各寺院についての発掘報告と比定作業はすべて完了しているわけではない。

まず、初代ゴーパーラ王は、ナーランダー寺院のすぐ近くにオーダンタプリー寺院を建立したとの記録がある。かなり壮大な寺院であったらしく、8世紀中頃、チベットに招聘されたナーランダーの学匠シャーンタラクシタが最初の僧院建立に携わったが、そのサムイェ寺はオーダンタプリー寺院を模したものという。また、チベット仏教の改革者として名高いアティシャも、同じくパーラ朝四大寺院のヴィクラマシーラ寺院に入る前に、ここでダルマラクシタという部派仏教の学匠に学んだと伝えられている。現在オーダンタプリー寺院の遺構は、その上に人家等が建っているために正式には発掘されていないが、インドの考古学者はナーランダー近郊のビハールシャリフ地域に比定している。

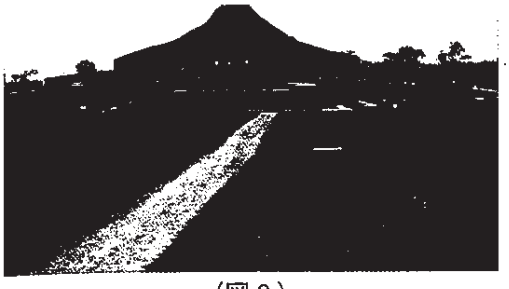
版図をより拡大させた第2代ダルマパーラ王は、熱心な仏教徒として、五十余の寺院を建立したと伝えられる。その中で最大のものが、我々が長年研究対象としているヴィクラマシーラ寺院である。770年頃に建立され、その後ムスリム勢力によって13世紀初頭に破壊されるまで、数多くのすぐれた仏教者、とくに密教の学匠を多く輩出した。彼らの学識を示す諸著作や霊験説話は、チベットやネパール、東南アジアの仏教諸国に多大な影響を与えた。

ヴィクラマシーラ寺院趾の比定については、13世紀にインドを旅行したチベット人チュジュペーの記録に、ムスリム軍が寺院を徹底的に破壊して、礎石すらもガンジス河に投げ込んだとすることから、ビハールのガンジス河沿いと推測され、これまでA・カニンガムやN・ディなどの幾人かによって数カ所が比定された。しかし、1960年代からビハール州バガルプル地方の小村落アンティチャック説がにわかに脚光を浴び、現在では発掘された巨大な遺構から、ヴィクラマシーラ寺院に相違ないとされている。(図1)とくに、1980年代に発掘プロジェクトのリーダーであったB・ヴァルマ氏は寺院名の入った印章を発見しており、ロンドンの国際会議で報告した。



(図1)

続く第3代のデーヴァパーラ王も有力であり、東はカーマルーパ、西はカナウジ、南はオリッサ北部までをも勢力下に置いたという。彼も先の二王にならって、東ベンガルにヴィクラマシーラ寺院と同規模のソーマプラ寺院を建立した。現在パハルプルと呼ばれ、すでに発掘されており(図2)、A・カニンガムやD・R・バンダルカル、R・D・バネルジーなどによる調査報告がある。わが国では、最初に村主恵快氏によってこの遺跡の存在が紹介され、その後に高野山大学、種智



（図２）

院大学の調査グループが現地に入った。

なお、パハルプル出土の碑文等にはデーヴァパーラ王の名はなく、父であるダルマパーラ王の名前が見られることから、一説にはダルマパーラ王がヴィクラマシーラ・ソーマプラ両寺院を作ったとするが、Ｓ・ダットは父王の徳を称えるために子のデーヴァパーラが父の名を残したと主張する。

その後、二百数十年を経た11世紀中葉のラーマパーラ王の時代には、上記の３寺院に加えて、ジャガッタラ寺院も栄えたことが知られる。マヒーパーラ２世王の建立になるとされるが、一説にはラーマパーラ王が建立したともいわれる。この寺院は、ナーランダー寺院やオーダンタプリー寺院をはじめとする三大寺院がムスリム勢力によって破壊された後も残り、仏教の孤塁を守ったとされる。最後期の仏教論理学者として名高いモークシャカラグプタは、この寺院に属していた。伝承では、東ベンガルのヴァレンドラ地域といわれていたが、近年同地域から寺院趾が発掘されており、バングラデシュの考古学者はジャガッタラ寺院に比定している。

4.
ヴィクラマシーラ寺院とソーマプラ寺院の共通構造

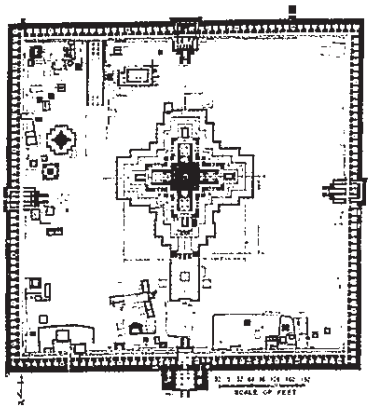
「パーラ朝の四大寺院」のうち、現在バングラデシュ西部ラジシャヒ管区のパハルプルに位置しているソーマプラ寺院趾は、大英連邦時代にすでに発掘され、Ａ・カニンガムの調査報告などが出版されている。現在は歴史的遺跡として保護されており、バングラデシュではバゲルハットのモスク都市とともに、世界遺産（文化遺産）に登録されている。

a. ソーマプラ寺院趾

寺院構造としては、次項で紹介するヴィクラマシーラ寺院と類似する特色を持つ。この構造形式は、その後、チベットや東南アジアの仏教寺院にも影響を与えているので、研究者によっては「パーラ朝式寺院構造」と呼んでいる。

ソーマプラ寺院趾の例に戻ると、全体は一辺約300メートルの正方形の外周構造を持ち、内庭に向けた入り口を持つ房室が、各辺に約50ずつ整然と配されている。房室（各僧侶の居室）は、同時代のナーランダー寺院の房室と同様に小祠堂を兼ねるようになっていたらしく、小仏像を安置したと推測される台座跡も確認されている。また、各辺の中央部には、ヴィクラマシーラ寺院のような明確な門部構造ではない簡易な門が作られており、北門のみが大規模なものとなっている。（図３）

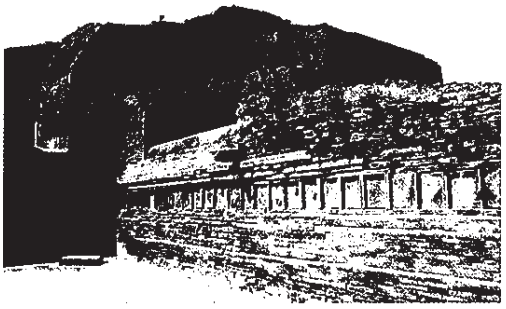
パーラ朝様式といわれる寺院構造のもう一つの特徴は、大僧院中央の内庭部分に十字型の構造をとる仏塔を持つ点にあ



（図３）

る。より厳密に言えば、四方形の仏塔を中心にして、四方の各方位に向いた巨大塑像を祀る祠堂を設けたために、上から見ると正に十字型となる構造であり、筆者は仮りに祠堂塔と呼んでいる。これは、本来は祠堂とは別に独立して建てられていた塔院（仏塔）を、大乗仏教の興起以降急速に発達した諸尊像（ほとんどは釈迦如来像）を祀る祠堂とともに一つの構造物に合体させたものである。ソーマプラ寺院の場合は、各方位の祠堂内に祀られていた尊像は、台座の跡を除いて確認されないが、後述のヴィクラマシーラ寺院の例では、北方と東方に巨大な塑像（日本で言う丈六仏）の脚部がわずかに残されている。そして、この十字型祠堂塔を支える３層の基壇と２層のテラスが、十字各方位に展開している。ソーマプラ寺院趾の祠堂塔最下段は、南北110メートル、東西93メートルの大規模なものである。

さらに、各層のテラス部分のレンガ積みの壁面には、テラコッタ（素焼き粘土板）レリーフがぐるりと一周はめ込まれている。（図４）ヴィクラマシーラ寺院趾の場合は、レリーフは第２層に一段のみで、現存数は決して多くないのに対し、ソーマプラ寺院趾は第１層と第２層それぞれ上下二段に配されており、その数は博物館に収蔵されているものを合わせると3000点にも及ぶといわれている。



（図４）

この十字型で多層構造をとる中央祠堂塔の他例として、多少規模は小さいものの、バングラデシュ東南部チッタゴン管区のマイナマティ遺跡にあるサルヴァン・ビハール遺跡も挙げられる。また、現在は軍用地のために立ち入れないが、アーナンダ・ビハール遺跡にも十字祠堂塔があり、博物館にはレリーフが収蔵されている。これらは、ソーマプラ寺院趾よりも数は相当少ないが、側面壁にはめ込まれているテラコッタ・レリーフの内容もほとんど共通している。

b. ヴィクラマシーラ寺院趾

８世紀後半、ベンガル地方で産声を上げたパーラ朝は、９世紀前半にはガンジス河中流域まで勢力を拡大し、パータリプトラ（現パトナ）からさらに上流のカナウジまで版図に収めた時期もあった。第２代の英王ダルマパーラが建立したのがヴィクラマシーラ寺院であり、ヴィクラマ「勝つことを」・シーラ「習慣としている」（常勝）という意味を持つが、

これは同王のエピテット（あだ名）であったという。

筆者を始めとする種智院大学のスタッフは、1982年以来、数次にわたってヴィクラマシーラ寺院趾を訪れている。その間30年間の概略を記したい。

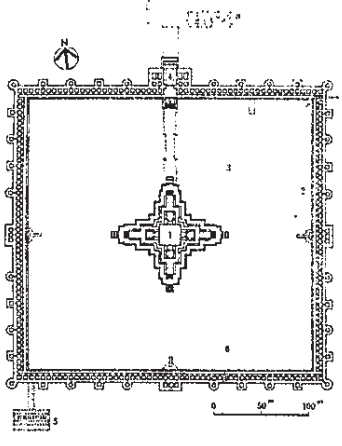
1982年12月、我々は午後８時の北インド急行Upper India Expressでコルカタのセルダー駅を発ち、ガンジス河を北上して、翌朝７時にヴィクラマシーラ寺院のある地域の中心地バガルプルに到着した。そこからチャーターした車で約１時間、ガンジス河南岸を下流に向かい、鉄道のコルゴングColgong駅を過ぎたところで左の脇道に折れ、曲がりくねった狭い道を２～30分進むと、右手前方に100メートルくらいの高さで連なる丘陵地が見え、この辺りがアンティチャックの村になる。交通の便は、現在でもあまり大きく変わっていない。

遺構は、1962年からＢ・Ｐ・シンハが指導するパトナ大学の手によって発掘が開始され、中央の大塔（高塔）の周囲が部分的に発掘された。その後、同遺跡の重要性を鑑み、発掘主体はインド政府考古局に移り、Ｂ・Ｓ・ヴァルマをヘッドとする「ヴィクラマシーラ発掘プロジェクト」が設けられて、発掘品の調査研究も進んだ。我々が訪れたときには、当地にはインド政府考古局の現地出張所があった。1990年代、ヴァルマ博士はイギリスでの国際会議で、遺品より同遺跡がヴィクラマシーラ寺院に相違ないことを明らかにした。しかし、博士が逝去したため、その後十数年にわたって同プロジェクトの事業は一頓挫をきたした。

2010年３月、幸い科学研究費補助金（海外調査）を得た我々は、約10年ぶりに同遺跡を訪れた。寺院趾は歴史保存遺跡として再整備され、また出土品の一部は、考古局現地出張所に隣接する２階建ての現地博物館で公開されている。しかし、新たな発掘作業は行われていなかった。

寺院構造は、ソーマプラ寺院趾を一回り大きくしたようなものと言える。内庭を囲む外周の回廊状構造物が僧院であり、一辺約330メートルに及び、各辺には通路である内部ベランダに向けて入り口を持った房室（4.2×4.1メートル）が50室以上設けられ、僧侶が居住したと思われる。各室の外部には、一定の間隔で円形（20室）、もしくは方形の部屋（16室）が突出して作られており、現地担当者の話では、学匠や阿闍梨など位の高い僧侶の部屋であったと考えられている。外部に張り出した僧室、とくに円形の部屋は、ソーマプラ寺院趾には見られない構造である。（図５）

四辺中央部分には門の跡が認められ、中央大塔に設けられた祠堂と正確に向かい合っている。門部は、房室数室分が外部へ、階段部分が内庭へ突出する規模の大



（図５）

きなものである。とくに北門の構造が大規模で、14.5メートルの幅で中央通路に面しており（図6）、出入り口には象の頭部をかたどった石段が残されている。伝承ではヴィクラマシーラ寺院には6つの門があったとされるが、四方位以外の「第一の中門」と「第二の中門」も、この北門の延長線上にあったことはほぼ間違いない。なお、北門を正式の門として大きく建造するのは、ソーマプラ寺院趾にも見られる特徴である。

（図6）

ヴィクラマシーラ寺院の最大の特色は、広大な内庭中央に建てられた十字型構造の巨大な高塔である、先にも触れたように、塔院（仏塔）の四方位に祠堂を付随した、塔院と祠堂の融合である祠堂塔と考えることができる。十字型祠堂塔は、2段のテラスを持つ三層構造で、1982年に共同調査した当時、嵯峨美術短期大学の中村和夫氏の測量によると、最上段の正方形平面が、一辺約23メートル。塔身の四方には4つの祠堂が規則的に突出しており、内部奥行は約4メートル弱、間口約5.5メートルである。内部には塑像の本尊像が安置されていたが破壊されており、跡をとどめているのは北と東の祠堂のみである。

第2テラスの四隅には、テラコッタ・レリーフが多数はめ込まれている。(図7）同様の形式はソーマプラ寺院趾にも認められ、図像内容もほとんど同軌である。このテラスは、2〜3メートル幅の通路が上部テラスの下部を折れ曲がって続いており、繞道の役割を果たしていたものと推測される。なお、ソーマプラ寺院趾の場合は、内庭には中央の祠堂塔の他に、小仏塔の基壇跡や方形の建物跡が多少認められるが、ヴィクラマシーラ寺院は内庭部分が未発掘ということもあり、現時点では建造物の遺構は報告されていない。

（図7）

大僧院の外に目を転じると、南西隅30メートルほど離れた場所に、現地では図書館と説明される長方形の別棟が通路で僧院と結ばれている。周囲は池になっており、涼風を取り入れるための人工池だという説がある。

このほかに注意を引く遺構としては、北門外部の奉献塔区といくつかの祠堂跡である。オリッサの奉献塔に関しては、中村凉應氏の報告があり、類型的に見て数種類のパターンがあることが知られているが、ヴィクラマシーラ寺院の奉献塔群など、ビハールの奉献塔はまったく異

なる構造を示している。北門外の数カ所の遺構は、ほとんどが特別の儀礼や用途のためのもので、僧侶の居住区域ではなかったようである。この辺りはとくに激しく破壊された形跡があり、はっきりと焼土の層を見ることができる。また、インド考古局の報告によると、人骨も出土したという。

5.
出土尊像など

ヴィクラマシーラ寺院やソーマプラ寺院をはじめとする、パーラ朝期に建立された仏教寺院から出土した各種の仏像・仏具などの遺品は、十字型祠堂塔壁面にはめ込まれたテラコッタ・レリーフを別にすれば、ほとんどが遺跡に隣接した考古博物館、国立・州立などの博物館などに展示されている。

これまでに調査した博物館等のうち、パーラ朝期の複数の遺品をある程度まとめて有している所蔵先は、以下のようである。

a. インド
(1)デリー国立博物館
(2)コルカタ・インド博物館
(3)ムンバイ・プリンスオブウェールズ博物館
(4)パトナ博物館
(5)ナーランダー考古博物館
(6)ヴィクラマシーラ考古博物館
(7)コルカタ大学・アストッシュ博物館

b. バングラデシュ
(1)ダッカ国立博物館
(2)パハルプル博物館
(3)ヴァレンドラ研究所博物館
(4)マハスタン博物館
(5)マイナマティ博物館

その他、インドの他地方の小規模博物館、あるいは海外でも日本の東京国立博物館などでは他館との交換によって、緑泥岩製の奉献塔やパーラ朝期特有の八相釈迦如来像などを所蔵している。

ヴィクラマシーラ寺院やソーマプラ寺院、同じくパーラ朝の版図にあった仏教寺院等の遺跡から出土した尊像は、大きく４つのグループに分けられる。

a. 塑造彫刻（ストゥッコ）
b. 石造彫刻
c. テラコッタ
d. 金銅仏

もっとも、イスラーム勢力による破壊のため当初の形を完全に把握しにくいこと、発掘作業が完了していない遺跡もあること、我々の調査もいわゆる悉皆調査ではないことを留意されたい。

a.塑造彫刻（ストゥッコ）

インドの塑造彫刻は、古くガンダーラ等に多くの作例が見られるが、一方ではナーランダー寺院の大塔側壁などのように、6〜7世紀頃にも相当数作られている。しかし、石像と比べると風化・破壊を受けやすいため、完全な形で遺存している例は少ない。

パーラ朝期に建立された寺院には、十字型祠堂塔が構築されることが多い。先述のように、ヴィクラマシーラ寺院の祠堂塔の４つの祠堂の内、北側はもっとも

（図８）

十分な形で保存され、東側も本尊脚部と台座部が残っている。(図８) 前者は、下半身が崩れた土砂の形で残されているが、明らかに塑造彫刻であることが分かる。しかも一度壊れた下半身の上に石座を置き、その上には新たな石像を安置していたという。特筆すべきは、壊れた塑像脚部と台座部に、わずかながら彩色の跡（ベンガラと思われる赤と緑青と考えられる緑）が認められることである。石像の方はパトナ大学に移されており、報告書の写真から判断すると宝冠をつけた触地印如来像であって、パーラ朝時代に最も多い形式である。

東側の祠堂塑像は、さらに原形を留めていないが、本尊の身体中央に花崗岩の一辺約30センチの大きな心柱が入っている。わが国の塑像に一般的な木心ではなく、石心を利用していたことは明らかである。同形式は、ナーランダー寺院やソーマプラ寺院の祠堂本尊にも認められ、パーラ朝期の大型塑造彫刻の一つのパターンであったと考えられる。

b. 石造彫刻

ヴィクラマシーラ寺院からの出土品は、1982年調査当時は原則として現地には保管せず、パトナ市内の発掘プロジェクト事務所に送られ、修復や復元を行っていた。近年には現地に考古博物館が建造され、プロジェクト事務所にあった出土品や、一時はパトナ博物館に収められていた出土品等も移され、収蔵・展示されている。

ヴィクラマシーラ寺院出土の石造彫刻のうち、最も注目すべきはインド・チベットに特有の坐勢をとる不動明王像（図９）である。不動明王は、日本では原語としてアチャラナータ（AcalanAtha）がよく知られているが、インドでは別名のチャンダマハーローシャナ（CaNDamahAroSaNa）の方が用いられ、後期密教系の不動は後者の名称で呼ばれることが多い。なお、2009年度実施のバングラデシュ調査でも、数体の不動明王像を確認したが（図10）、日本で一般的な右手に刀剣を持ち、左手に羂索を持つ点は同様なものの、坐像や立像ではなく、膝の一方を地面に着けるという特異な姿をしている。

（図９）

（図10）

パーラ朝時代の石造彫刻は、黒色玄武岩と緑泥岩のものが中心となる。インドの他地域に見られる砂岩や石灰岩などの作例は、非常に少ない。パーラ朝版図の

中でも東部は少しでも長く仏教寺院が存続したため、ガンジス河下流域のバングラデシュに多数の作例が遺存しており、ダッカ国立博物館やヴァレンドラ研究所博物館に多く収蔵されている。それら図版と研究の集成が、N・K・バッタサリの名著（Iconography of Buddhist and Brahmanical Sculpture in the Dacca Museum）である。

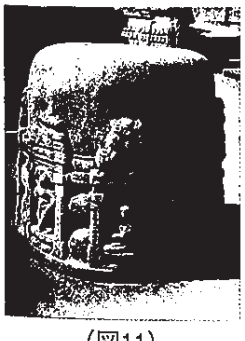
具体的な尊格内容を詳説するには、別稿を期さねばならないが、パーラ朝期の仏教美術の特徴をあと2点付け加えておきたい。

第一は、全長約50～80センチ程度の小型奉献塔を作り、その塔身部や基壇部四方（あるいは八方）に小龕を設け、そこに小仏像を陽刻する点である。インド、バングラデシュに現存するもの、さらに海外へ流出した作例数を合わせると数百点に及び、現在調査中であるが、概ね以下の3類型に細分することができよう。

① 顕教型　釈迦の生涯における四大事（仏伝四相）、もしくは八大事（仏伝八相）（図11）

② 密教型　金剛界四仏（阿閦・宝生・阿弥陀・不空成就）（図12）

③ 特殊型　触地印如来・観音などの組み合わせ



（図11）

（図12）

最初にも触れたように、パーラ朝期の仏教は、釈迦信仰を中心とする大乗仏教と、後期密教までをも含む密教が総合して行われていた時代であった。

石造彫刻の仏像群の第二の特徴は、多様な尊格分類の中でも、とくに女尊の作例が群を抜いて多いことにある。インド・チベット仏教の尊格分類については、以下のように筆者と立川武蔵氏が試みに提案したものが、現在主として用いられている。

①仏・如来

釈迦，阿弥陀，大日等の金剛界五仏など

②秘密仏（守護尊）

ヘールカ，ヘーヴァジュラ，サンヴァラ，グヒヤサマージャなど

③菩薩

観音，文殊，弥勒，金剛手，普賢など

④女尊

プラジュニャーパーラミター（般若波羅蜜），マーリーチー（摩利支），ウシュニーシャヴィジャヤー（仏頂尊勝），ターラー（多羅），プラティサラー（大随求），ハーリーティー（鬼子母神），パルナシャバリー（葉衣）など

⑤護法尊

ハーカーラ（大黒），ヤマ・ヤマーリ（閻魔），チャンダローシャナ（不動），トライローキヤヴィジャヤ（降三世）など

⑥財宝尊

ガネーシャ（聖天），ヴァイシュラヴァナ（毘沙門），ジャンバラ（宝蔵神）など

⑦ヒンドゥー尊

シヴァ（大自在天），ヴィシュヌ（那羅延天），サラスヴァティー（弁才天），シュリー（吉祥天）など

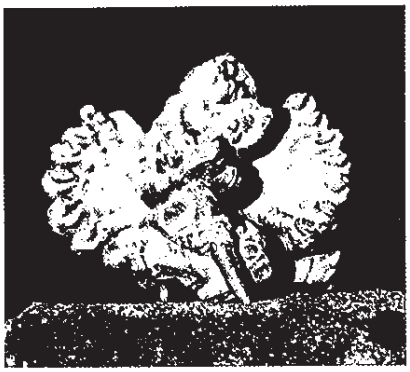
個別の説明は割愛するが、日本仏教における仏（如来）・菩薩・明王・天部の四分類法と比べて、女尊と財宝尊の種類と絶対数が多い。とくに、ダッカ国立博物館には、マーリーチー（図13）、プラティサラー（図14）、パルナシャバリー（図15）などの代表的な女尊像が網羅的に展示されているのが印象深い。

（図13）

なお、後期密教、すなわち無上瑜伽密教の本尊仏であるヘーヴァジュラやグヒヤサマージャなどの秘密仏（守護尊）の像は、インドではパーラ朝期しか流行しなかった。中でも明妃（シャクティ）を抱く姿の像（歓喜仏）は、ベンガル北部地方など、仏教寺院が最後まで堪え忍んだ地域に限られる。（図16）

（図14）

（図15）



（図16）

インド仏教の掉尾を飾るパーラ朝時代の仏教は、大乗仏教の精緻な仏教思想を学修しながら、実際の修行法としては護摩を焚いたり、マンダラを作って本尊瑜伽の実践を行う顕密融合仏教が主流であったと考えられる。したがって、密教系の仏像は多くは小規模のもので、大祠堂の本尊としてではなく、個人の念持仏として僧房に祀られていたものと思われる。

c.テラコッタ

テラコッタ（素焼き粘土）レリーフの尊像は、既述のように、ヴィクラマシーラ寺院等の十字型祠堂塔基壇部にはめ込まれている。設置される場所は、寺院規模によって多少の差違はあるが、繞道できるテラスの中央部あたりが多い。

塑造同様、テラコッタもあまり強固な材質ではないが、大塔下部に、それもレリーフとしてはめ込まれていたために、損壊の度合いは意外に軽微である。大きさは、ヴィクラマシーラ寺院の場合では

平均して縦約50センチ、幅約40センチの長方形である。

その内容は、表面が欠損しているものもあるので比定には困難が伴うが、概略を列挙するならば、

①触地印・禅定印等の如来
②八大菩薩を中心とする菩薩
③マハーカーラ・チャンダローシャナなどの忿怒尊
④踊り子、楽人、化粧する女性など
⑤シヴァ、ヴィシュヌ、ブラフマーなどのヒンドゥー神
⑥亀、鳥、鹿、獅子などの動物
⑦法輪、水瓶などの吉祥物

などがあり、多彩な内容となっている。現在、ソーマプラ寺院のレリーフ内容を中心に詳細な研究が準備されているが、最末期のインド仏教がいかに混淆した形態をとっていたかを如実に物語っている。なお、ヴィクラマシーラ寺院趾のあるアンティチャックとソーマプラ寺院趾のあるパハルプルは、現在は国が違い、ガンジス河を介在しているが、直線距離にすればさほど離れていない。

d. 金銅仏・仏具

1982年の第1回調査では、我々はパトナにあった発掘事務所で発掘責任者のB・ヴェルマ氏の厚意で、ヴィクラマシーラ寺院趾から出土した金銅仏や印章等を調査･撮影する機会に恵まれた。また、2010年には、科学研究費補助金研究「インド文化圏における仏塔の総合的研究」の現地調査の際にも、現地の考古博物館に移送されたもの、新たに公開されたものも含めて、多数の遺品資料のデータを記録・撮影した。

これに先立つ1981年には、インド・ビハール州のクルキハール（ガヤー地区）から多数出土したパーラ朝期の金銅仏を収集したパトナ博物館コレクションや、ナーランダー考古博物館、デリー国立博物館、インド博物館等が所蔵するパーラ朝期の金銅仏を集めて三期に細分した名著『インド・チベット金銅仏』（U.von Schroeder: Indo Tibetan Bronzes, Hong Kong, 1981）が刊行された。

そこでは、パーラ朝期の金銅仏を、次のような3期に分けている。

初期パーラ様式	750～900A.D.
中期パーラ様式	900～1100A.D.
後期パーラ様式	1100～1200A.D.

2009年度実施のバングラデシュ調査で、U・シュローダーの使用していないパハルプル博物館、マハスタン博物館所蔵の金銅仏・仏塔・仏具などの資料も収集できたため、故D・ミトラ女史の二部の好著（D.Mitra: Bronzes from Bangladesh, Delhi, 1982, ditto: Bronzes from Achutrajpur, Orissa, Delhi, 1978）の成果もあわせ､専著を期したく考えている。

以上、貴重な誌面をお借りして、精粗相い半ばする報告となったが、近い将来には概略をまとめて世に問いたいと念願している。

（本稿をまとめるにあたって、共同研究者・那須真裕美 種智院大学非常勤講師の多大な協力を得たことを記しておく）

アジア主義

公益財団法人兵庫県国際交流協会名誉会長
前兵庫県知事

貝原　俊民

20世紀初頭、日本が近代化に成功して、欧米との不平等条約を改定し、列強の一角との日露戦争で勝利したことは、欧米の侵略に悩むアジア民族の志気を鼓舞し、日本を中心とするアジア主義の思想を展開させるところとなった。

その強力な主唱者の一人が、ラス・ビハーリー・ボース（以下、R·B·ボースと略記する）である。彼はインドで独立運動に身を投じたが、追われて1915年に神戸に上陸、日本に亡命した。日本でも、国外退去の通告をうけたが、新宿中村屋の経営者相馬愛蔵・黒光夫妻の義侠心で匿われる。その後、国外退去命令は撤回され、1918年、相馬夫妻の娘俊子と結婚、1923年には日本に帰化している。

R·B·ボースは、この前後から日本でのインド独立運動を開始し、1923年には、神戸でも２度にわたってインドの現状を訴える講演会を開催している。その当時から神戸にはインディアン・コミュニティがあったが、そのなかにインド国民会議派の有力者と強いパイプをもつA·M·サハーイがいて、神戸を拠点にインド独立運動を展開していた。

R·B·ボースのアジア主義は、東洋人が白人勢力に勝ったとき初めて国際平和が達成されるとし、そのため日本、中国、インドの３カ国が中心となった東洋人連盟を結成することを強く提唱している。東洋人には、「精神的乃至思想的共通点」があるとする彼の主張は、人間存在の本質を宗教的「神性」の中にみようとする思想に依拠しており、そのアジア主義は、単なるアジアの政治的独立を獲得するためのプログラムなどではなく、物質主義に覆われた近代を超克し、宗教的「神聖」に基づく真の国際平和を構築するための存在論だったといわれている。

この頃、日本国民にアジア主義を訴えたもう一人の人物に、中国の孫文がいる。中国の皇帝専制政治に幕を引いた辛亥革命の指導者である孫文は、1925年「革命未だ成らず」という言葉を残して北京で逝去した。

孫文は日本を拠点として中国革命を指導しているが、亡くなる前年、神戸で有名な「大アジア主義」と題する講演を行

っている。そのなかで、日本がアジアの民族運動を鼓舞したことを高く評価するとともに、日本が今後、武力や技術に基づく物質的な西欧覇道の猟犬（手先）になるか、仁義道徳に基づく精神的な東方王道の干城（守り手）となるか、慎重に考慮して道を選んでほしいと訴えた。この孫文の講演は、満堂の聴衆に大きな感動を与えたといわれている。

孫文は、当時の日本の帝国主義的指向性に対して警鐘を鳴らしたのであるが、R·B·ボースも孫文の死去から１年後、日本の中国認識に対し痛烈な日本批判を展開している。R·B·ボースは、日本で孫文と何回か面談しており、この二人が主張するアジア主義には共通する点が多かったといえる。

もちろん日本にも、「アジア主義」運動や思想的潮流はあった。そのなかには、アジア諸国の革命・改革の主義を理解して革命を援助したグループもあったが、日本や個人の利害に基づく様々な考え方も含まれていた。

その後1930年代になると、満州事変、国際連盟脱退などの流れのなかで、日本のアジア主義は、反西欧帝国主義と南方進出という方向性をもつようになり、1941年、日本は大東亜戦争に突入する。

R·B·ボースは、イギリスと対立を強めていく日本政府や軍部と協力関係をもつようになり、インドの国外における独立運動の有力者の一人となった。1942年には、インド独立連盟の代表に就任したが体調を崩して、1943年、亡命先のドイツからシンガポールに来たスバス・チャンドラ・ボースに譲り、自らは最高顧問となった。同年、インド独立連盟は、イギリスを含む連合国に対してインド独立の宣戦布告を行っている。

しかし、体調が悪化したR·B·ボースは２年後のインド独立を目にすることなく、1945年１月、日本で客死した。

ところで、今のアジアの状況はどうであろうか。20世紀後半、日本は、高度経済成長によって先進国の一員となり、引き続いて21世紀には、中国やインドを先頭にアジア各国が経済成長期に入り、アジアの時代になろうとしている。

しかし、アジアの時代になれば、R·B·ボースや孫文がアジア主義で夢みたように、物質主義に覆われた近代を超克し、東方正道の文化に基づく精神性にみちた真の国際平和が実現するのであろうか。

いや、そうでなければ、食糧・資源エネルギーの確保をめぐる文明の衝突や地球環境の破壊によって、人類社会は確実に滅亡の危機に瀕するであろう。

だとすれば、いち早く先進国となった日本は、百年前に期待されたリーダーシップを今こそ発揮しなければならない。インドや中国と連携して個の自由と科学技術の進歩を過度に追い求める近代文明のもつ欠陥を除去し、人類社会の平和の安定のために貢献すべきであろう。

（この文章中のR·B·ボースについての記述は、多くを中島岳志『中村屋のボース』白水社、および久保田文次「孫文・梅屋庄吉とインド革命家の交流」『史艸』第46号、によっている。）

これからのインドを想う

財団法人神戸都市問題研究所理事長
神戸大学名誉教授（元学長）
新野　幸次郎

Ｇ８からＧ20への時代へと、世界の政治経済の主導国家群は完全に変化した。かつて、英国の歴史学会長だったＧ.バラクラフ博士は、第２次世界大戦後、過去400年間続いたヨーロッパ中心の世界は終わったと述べたが、その時以上にいま世界は変わったといってよい。そのＧ20の中でも、いわゆるBRICsは、際だった存在になった。

そのBRICsの中では、つい最近、中国がご承知のようにGDP総額では、日本を超えてアメリカに次ぐ世界第２の国となり、軍事力の点でも、アメリカが意識せざるをえない大国になった。中国の経済成長率は周知のように、1990年からの10年間、および、2000年からの10年間とともに9.9%という驚くべき高さになった。この20年間に優に４倍をこえるGDPをもつ国になったのであるから、中国が世界中の注目を集めるのは当然といってよい。

しかし、その中国はいま色々な課題を抱えてその対応に苦労している。すなわち、先般行われた第12次５カ年計画でも、国富ではなく民富を増大しなければならないとか、国民の中での貧富の格差を減らさねばならないとか、官吏や共産党幹部の汚職を絶滅しなければならないとか、さらには、不動産をはじめとする物価高騰対策を成功させねばならないとかいった難問解決の必要性を力説している。

殊に、中国の場合、周知の一人っ子政策から生まれる問題、すなわち、そのうち、両親とその双方の両親、計６人を１人が支えなければならないという社会福祉上の問題と人口増加のピーク後の人口減少問題にも直面せざるをえない。

その点インドの場合は違う。インドと中国の違いを見るために、最近注目されるようになった人口ボーナス論をとりあげてみよう。

人口ボーナスという言葉は、各国の過去100年位の人口とGDPの動きをみると、GDPの増加率を人口、とくに生産年齢人口（すなわち、15歳から64歳までの人口）の増加率この間には非常に高い相関関係があるということから、経済成長率にとって人口増加率というのは成長率を高める一つのボーナス効果をもっているのではないかという点に着目した議論である。

ある研究者の計算によると、日本の場

合、過去105年間にわたって人口が１％ふえると、GDPで測った経済成長率は１.8%ふえるというボーナス効果があったとされている。ところが､我が国では、人口ボーナスの期間は、1950年から1990年とされ、このあとバブル崩壊とともに失われた20年を迎えて今日に至っている。

この人口ボーナス期の終わりという点では、さきに述べた中国は2015年に人口ボーナス期を終えると計算されている。もし、この人口ボーナス論を適用するなら、いまをときめく経済成長を重ねている中国もその時期を境にして新しい段階に入ると考えられる。

ところが、インドは違う。インドは2008年には、まだ中国に次いで世界第２位の人口で、中国よりも１億５千万人ほど少ない。しかし、インドのさきほどの生産年齢人口で測った人口ボーナスの期間は1970年からはじまって、中国より20年さきの2035年まで続くと計算されている。そういう経過もあってインドの人口は、2050年には、中国のそれを２億人位上まわると予想されている。

2008年に、インドのGDPは、中国の26％レベルでまだかなり少ない。しかし、購買力平価で測ったインドのGDPは、物価が安いこともあって、日本に次ぐ世界第４位の地位にある。これは、そのうち、インドが中国に接近し、中国に並び、あるいはそれにとって代わって、アメリカとともに世界をリードする国になる可能性をもつことを期待させるものである。

もっとも、この推論は、人口ボーナス論をそのまま適用した単純な論理的帰結で、その通りになるためには、これまでインド経済の発展を制約していたいくつかの条件を克服できなければならない。

しかし、この人口ボーナス論と並んで最初にふれたバラクラフ博士の歴史論から言えば、政治経済発展の原動力になるのは、科学・技術の革新力と人口力とである。もし、この説が正しいとすればインドが世界最大の人口をもつ国になった時の世界推進力というのはやはり注目に値する。

インドは周知のようにゼロを発見した国であり、科学・技術の発展力ではかつて輝かしい歴史をもった国である。最近は、中国に次いで、多くの大学生・大学院生が海外留学をして研鑽に努めている。

インドが、いままで、その発展を制約をしていた政治的社会的諸条件を整備して、科学・技術の革新力を強化した世界最大の人口をもつ国になった時、バラクラフ博士のいう新しい歴史の転換期を迎えることになるであろう。

インド2010年 ―回顧と展望―

関西日印文化協会前会長（顧問）
神戸松蔭女子学院大学名誉教授
黒澤　一晃

〔社会主義型社会の建設〕

1947年８月に念願の独立を果たしたインドは、孜々として近代的国家の建設に努めて来たが、その基本理念は民主主義の確立と自立経済の達成であり、経済建設に関しては、社会主義型社会（Socialistic Patttern of Society）の建設であった。

今ここに、生産手段の社会化を行なわず私有財産制のもとで市場経済の働きに依拠する資本主義経済秩序に対して、生産手段の社会化を認めるものを社会主義経済秩序と定義するなら、この社会主義型社会というのはいかなる定義に照らしても社会主義社会ではない。

後に帝国主義的段階に突き進んで行ったイギリスによる実質200年にわたる植民地支配を受けたインドが、口が割れても、資本主義方式で国家の経済建設を行なおうなどと言えるはずはなく、重要な構成要素が地主・資本家であった独立運動の担い手国民会議派が社会主義方式で行こうと言えるはずがない。ここに出て来た妥協が、生産手段の社会化は行なわず、その分配面において社会主義の理想を追求しようとした社会主義型社会という中途半端な目標を掲げなければならない根拠の一つであった。ちなみに、インドの銀行国有化もやっと1969年に実施されたに過ぎない。

〔計画経済〕

計画経済こそは経済建設における科学の応用であるという信念から、インドではすでに1938年の国民会義派の全国大会において、計画経済の方針が定められており、第１次５カ年計画の始まる10数年も前に、タタ財閥など地元実業界の手によって、その３倍に及ぶいわゆる「ボンベイ計画」なるものが策定されていた。そもそも第１次計画なるもの自体が、それまでの諸計画の追認に他ならない。

独立直後のインド政府開発審議会は産業決議に基づき、全産業を３分類し、武器弾薬・鉄鋼・電力・鉄道etc.を国家の専管事項とする第１産業部門とし、それに次ぐ重要なものを第２部門として政府が責任を持つが民間の参入をも認めるとした。例えば、ホテルなどは観光事業を通じて外貨の獲得に役立つということで、運輸部門とともに第２部門に入っている。そして残余のものを第３部門とした。

この開発審議会によって設置された計画委員会は、数次の５ヵ年計画を策定し、

毎年それに歳入のおよそ1/4の資金を投入して経済建設を進めたのであるが、過度の重工業偏重政策の結果、幾度かの蹉跌を経験し、時には計画の中断すら経験するのであった。「サンダルから人工衛星まで」といったように、余りにも輸入を敵視した国産優遇政策、余りにも過度の規制介入・公共部門企業の余りにも手厚い保護・公企業の肥大化・腐敗の蔓延の結果、「ヒンドゥー的成長率」と揶揄されたように、1980年代末ごろのインドの経済は、二進も三進も行かない泥沼に嵌まり込んでいた。

後発の国々が先発の国々に追いつくためには尋常の手段では追いつかない。時間軸をも含み全体を見渡し、段階的にかつ計画的に物事を進める以外には手がない。例えば、国民に良質の医療を提供するためには、病院・診療所・保健所の増設といったハード面の整備と共に、医師の養成、そのための高度の医事研究者の育成・レントゲン技師・検査医・麻酔科医等のいわゆるパラメディカルの育成、薬学専門家・看護師etc.といったソフト面の充実・育成が必要である。また目先の病人の治療だけでなく、予防医学の充実発展も必要となる。まだコンピューターも充分に発達していなかった時代に、このような方式を選択したインド、曲がりなりにもそれを成し遂げたインドに喝采を送りたいと思うのである。このことは、ソ連邦末期に、ウクライナには腐ったジャガイモが山と放置され、他面、多くの工業中心地で工業製品が山積されていたことを考えると、その快挙の意義が理解できるであろう。

〔貯蓄と投資〕

経済建設の資金捻出のためには、消費を抑え資金を生産手段の増強のための投資に回すか、外国からの資金援助を求めるか、赤字財政という禁じ手に走るか、この3つ以外にはない。事実、インド政府は、この3つのすべてに頼った。政府がありとあらゆる手段を使って、国民大衆に対し少額貯蓄を呼びかけていたのを思い出す。また、当時のインド政府が、なりふりかまわず取れるところから援助を引き出すべく、鉄鋼生産に関してもイギリス（ドゥルガプール）・西ドイツ（ルールケラ）・ソ連邦（ビライ）・アメリカ（ボカロ）からの援助を受け、さながら援助競争オンパレードの感を呈していたのもまた事実であった。

イギリスがインドから撤退した時、インドには鉄道と商業作物用のある程度の灌漑設備以外には、見るべきインフラは殆どなかった。その鉄道も、港湾都市を扇の要と見立て、イギリスでの綿工業などのための原料をボンベイ・カルカッタ・マドラスの港湾都市に運び、反乱に際しては軍隊を急派するためというのが主眼で、決して有機体としてのインドの発展を目指したものではなかった。言うならば、独立当初のインドには、見るべきインフラの整備はなかったと言えよう。

〔農業vs.工業、軽工業vs.重工業〕

経済計画を進めるに際して、農業と工業のバランスをどのようにするか。工業

と言っても、差し迫った必要に迫られた消費財需要に応える軽工業から始めるべきか、それとも消費財生産のために必要な生産財の生産から始めるのか、いやそれよりも先に、インフラの整備を先に進めるべきかといった波及効果に関して多くの開発理論が生れたが、そのどれを採用するかは経済の問題というより政治の問題であった。

独立当時のインドは、革命後のロシアの経験を重視し社会主義的開発を進める隣国中国の経済発展を横目に見ながら、社会主義型経済社会の建設を目標に、社会効率的な経済発展を念じつつ、次第に重工業に重点をおいていった。インドが重工業重視政策を採ったことは必ずしも間違いではない。しかし、独立直後のインドにとって、懐胎期間の長い重工業の育成を待つことが難しかったというのが実情であった。

〔Is New India viable?〕

独立当初のインドは、食糧不足に悩んでおり、年間１,000万トンを超える食糧の輸入が必要であった。経済建設推進のために投入したいという願いにも拘わらず、独立当時のインドは、なけなしの外貨の多くを食糧輸入に向けなければならなかった。しかも、綿花・黄麻・紅茶・スパイスなどの外資を稼ぐべきインドの輸出品の多くは、仮にその価格を下げてもそれを相殺するだけの需要増が期待できない、いわゆる価格弾力性の低いものであった。

反面、鉄鋼・電力・灌漑の整備etc.は、新生インドにとって欠くことの出来ないものであった。そのため、インドの輸出入は非常なアンバランスを呈し、第３次５ヵ年計画の終了年次である1965年には、すでに相当の為替インフレが起こっていた。第４次計画の着手が３年も遅れたのも、そのためであった。1966年に断行されたルピーの平価切り下げ（＝自国輸出産品の価格引下げ、ただしこれは輸入品の価格引き上げに通ずる）も、当初は逆効果をもたらしたに過ぎなかった。

しかも、経済の実態を無視した印パ分割は、例えばベンガル地方の黄麻生産地の多くがパキスタン側に残り、それを加工する工場の殆どがインド側に残るといった矛盾も生み出していた。

独立の当初、経済・政治・国境問題・言語等々の問題を抱えるインドに関し、西欧のインド研究家のあいだで、“Is new India viable?”〔新生インドは生き延びることが可能だろうか（viable=新生児・胎児などが生存できるという意）〕といった言葉が交わされていたのを覚えている。私の滞印時にも、ネルー首相の死後、インド・パキスタンの国境で武力紛争が再発し、全国の８大都市において食糧の配給制が実施されるなど、人々のあいだに何とも言えない暗澹たる気分が漂っていたことが思い出される。

1991年の大転換

〔災いを転じて福となす〕

1980年代末期のインドは、実に困難な

状態にあり、外貨準備は底をつき（当時の外貨保有10億米ドル余。2010年度末、およそ3,000億米ドル）、あと6週間分の輸入にしか耐えることが出来ないような状態に陥っていた。そのとき、ナラシムハ・ラオ首相のもとで大蔵大臣を勤めたマンモーハン・シン氏（現首相）の大胆な経済政策が奏功し、インドは国際的な債務不履行を免れることが出来たのであった。まさに、災いを転じて福となす大手術に成功したと言えよう。当時、神戸インド・クラブで行なわれた本国からの特別使節団歓迎の場で、それまで、インドの経済発展に幾度となく失望させられていた私なども、「いつもとは違う。今度こそは、本気かもしれない」と、何となく緊迫感を覚えたのを憶えている。

〔インドの実態〕

今、このあたりで、インド経済の概況を呈示しておこう。インドは、北緯8.4度～37.6度、東経68.7度～97.25度、東西2,933キロメートル、南北3,214キロメートルの亜大陸であり、係争中のカシミール地方（約30万平方キロメートル）を含めてその公称面積は328.7万平方キロメートルとなっている。

その政治体制は、連邦制、議会制民主主義、言論の自由、文民統制、政教分離を目指すものであり、1975年6月にインディラ・ガンディー首相によって発布された「非常事態宣言」による言論の弾圧という汚点を除けば、上記の目標はなんとか堅持されていると言えよう。

ちなみに、上記の故インディラ・ガンディー女史は、インド独立の担い手の一人であり国民会議派の中心人物、故J.ネルーの愛娘であるが、1984年に、護衛のシーク族の兵士によって暗殺されており、そのあとを継いだ長男のラジーヴ・ガンディーもまた、1991年に選挙遊説中に暗殺されることとなる。

人口は2010度中に12億の大台を超えていると考えられる。インドの人口構成については、25歳以下が50%を占め、その人口の若さは誇るに足るが、2001年度の国勢調査によると、男女比は1,000対933となっており、インド社会の歪な性格を暗示している。またインドは、2150年に16億4,500万人をもって世界最大の人口国となり、静止人口に達するとした1980年の世界銀行の不気味な予測すら簡単に崩れそうである。また、世界の潮流と同じく近年の人口の都市集中は著しく、2001年度の数字では27.8%となっている。

その基幹産業である農業は、モンスーンの支配を受け年毎の変化を受けやすく、主食である米・小麦・とうもろこし・豆類に油用種子（oilseeds）を加えたものの生産は、今日では優に年間2億トンを超えるようになって来ている。ただ、年間降雨量が30インチ（約750ミリメートル）以下の土地での米作は難しいが、「緑の革命」といわれた品種の改良・農業技術の改善・灌漑設備の整備によって、生産性の改良も見られ、1,500万～2,000万トンと言われる食糧備蓄もあって、貧困による飢餓は別として、降雨さえ順調ならば、食糧自給は可能となっている〔一人1日につき1ポンド（約454グラム）×

365≒166キログラム。人口12億と考えて、年間約２億トン〕。ただ12.5%（計画委員会の認める数字）にも達する漏損問題を考慮する必要もある。

統計によると、インドの国内総生産は、米ドル表示で、対前年度比約９%増の約１兆4,300億ドルとなっているが、それに近いインフレのあったことを考慮しなければならない。また、今年度についても7.6%の成長が予想されているが、その間それを超えそうなインフレを考慮しなければならない。なお、一人当たりの国内総生産は1,176米ドル、貧困線（世界銀行の現行基準では一日1.25ドル）以下の人口は37%となっている。

＊ただここで、国際比較における米ドル表示が、しばしば実態を見誤らせる危険性のあることを強調しておきたい。特に経済発展度の違う国々の比較においては余程の注意が必要である。

上記の国内総生産のうち農業の占める割合は約２割となっているが、貨幣経済の浸透率を考えると、実態はそのようなものではなかろう。

なお、数年前から喧伝されているゴールドマン・サックス社のブリックス・レポートによると、インドについては、ブラジル・中国・ロシアと並んで飛躍的な経済発展が予想されているが、これらの国々についての共通点は、いずれも面積も人口も大きく、経済的には比較的低開発状態にあることであるが、インドについては、私はそれ以外に、英語が抵抗なく通用していることを挙げたいと思う。ただ、ITの急速な発展については、それまでも各州各地の工科大学の頂点に立つ「インド工科大学Indian Institute of Technology」（複数）の貢献が大きいと思われる。

それまで理工系大卒技術者に対する国内の雇用機会が少なく、海外への頭脳流出も多かったが、その多くが国内で無聊をかこっていたところへ、コンピューターの設定切り替えに伴ういわゆるＹ２Ｋ問題（紀元2000年度問題）を期に、外注（out-sourcing）を含んだ国内外の需要が急増したことが大きく貢献したと言われる。またこれには、インドの場合は、時差に縛られることなくリアルタイムの受注が可能であったこと、カーストを超えた人材活用が可能であったことがインドの知的労働市場の開放に有利に働いたと言われている。

〔開発と環境破壊〕

経済開発が下手をすれば、生活環境の破壊に繋がることは言を俟たないが、インドの場合もそれがかなり深刻なようである。中国同様、大気汚染も酷いが、昨秋のTIME誌の特集にもあったように、ガンジス河の水位の低下・それによる既存巨大ダム（複数）の無価値化、中上流都市カーンプールの皮革業による水質汚染等がその一例である。

また、1984年に数千人の被害者を出した米ユニオン・カーバイド社のボパール殺虫剤生産工場の爆発事件、これを契機とする外資企業誘致反対運動、ナルマダ川開発反対市民運動などは、今後とも為政者の留意すべき問題であろう。

これについて、インドからの鉄鉱石確保に関して、鉱山の開発だけでなくそれを輸出する港湾施設の建設・そこに到る道路の整備・採掘鉱石のペレット化（鉄鉱石から精製鉱を取り出し、それを小粒の石状にすること）輸入という開発輸入についても、これが輸入国の公害輸出であるという批判が出て来ていることを忘れてはならない。

〔インフラの整備〕

インドが鋭意進めて来た発電と灌漑の２大インフラ部門が、公共部門の非効率の典型となっていたのは真に皮肉なことであった。このため、補助金を出して掘り抜き井戸に電動ポンプを装備して、灌漑用水を確保するという戦略も奏功しなかった。ただ、盗電と盗水が大きな社会悪と言われる同国において、運河(canals)・貯水池(tanks)・掘り抜き井戸(tube-wells)の３大灌漑方式のうち、電動ポンプ付の掘り抜き井戸の比率が大きく伸びているのは、好ましい傾向と言えるのではなかろうか。

ここ数年、インドにおける自動車生産が脚光を浴びており、日本企業の進出も多いが、これに関してはすでに30年前から、日本の鈴木自動車が、マ―ルティとの合弁事業において万丈の気を吐いている。最近、これまでバスとかトラック部門でトップの座を占めていたタタ社が安価な乗用車をもって市場に進出して来ている。さすがタタだと感心する反面、道路等関連インフラの未整備が自動車生産の隘路となるのではないかと心配である。なおインフラ整備に関して、インド政府が高速道路網の整備・大都市の地下鉄（複数）の建設に傾注していることには敬意を表するが、同時に河川の浚渫をも含めた内陸水運ならびに沿岸海運の再発展についての尽力を期待したい。

ちなみに、インドの交通面のインフラは、６万３千キロメートル余りの総延長を持つ鉄道（世界第４位、三分の一電化済み、広軌・メートル軌条・狭軌の3種類の並存が難点であるが、車両その他すべてについて自給達成）、道路（高速道路・国道・州道・その他よりなるが、降雨季には使用に耐えられない村落間道路も多い。ただ現在では、鉄道は旅客輸送の85％、貨物輸送の60％強を担っており、年約10％の割合で増強・整備されている）。航空輸送については、11の国際級空港を含み126の空港がある。なお、沿岸輸送・内陸輸送を充実させようとの計画にも拘らず、気候条件（モンスーン等）地勢的条件（例えば、ガンジス河に関し言えば、デリー近辺から河口のカルカッタまでの高低差僅か200メートル）の障害がある。

また、インフラの整備に関して、インドには後発国であるが故のメリットもあるのではないかと思われる。例えばインターネット・携帯電話の超スピードの普及など、インドで長距離電話を掛けようとして半日以上を無駄にした経験のある私など、感慨無量である。なお、すでに数年も前に、遠隔地からのテレビ指導による簡単な手術例についてのニュースを見たが、これなど日本以上に速く普及するのではないかとさえ考えている。（了）

タタ財閥の社会貢献活動

大阪学院大学経済学部教授
三上 敦史

はじめに

タタ財閥がインド産業化のパイオニアであり、今でも最大の財閥であることは周知のとおりである。現在グループ企業は、自動車、鉄鋼、ITなど96社で、従業員は36万人を擁す。最近では、五代目総帥ラタン・タタの強力なリーダーシップの下に、車の価格の常識を覆す「夢の20万円車」を開発して世界を驚かせた。

他方では、英高級ブランドのジャガー・ローバーなどを買収して事業のフル・ライン化を目指し、また、鉄鋼ではコーラス社（英・蘭）、紅茶ではテトゥレイ社、化学ではブランナー・モンド社など、かつての宗主国イギリスの大企業を買収しつつ、グローバル戦略を加速している。タタの本社がロンドンに移るかのような勢いではある 1)。

ところで、タタ財閥がインドで広く国民の尊敬を集めるのは、このような驚くべき企業家精神に加えて、古くより他に類例を見ない社会貢献活動を展開してきたからに他ならない。つまり、早くも1930年代に、財閥家族の名を冠した慈善信託（チャリタブル・トラスト）が財閥本社の株式の大半を保有する体制をつくり、傘下企業からの巨額の配当金を医療・教育・福祉などに振り向けてきたのである。最近の不況下でも、その額は年50億円を下らない 2)。表１は、現在のタタ財閥本社の株式の約66％を慈善信託が保有していることを示す。

以下では、このような組織的なフィランソロピー活動（公益のための慈善活動）が、一体なぜ植民地下インドで創始されることになったかについて、その歴史的背景や理念などを中心に考察しよう。

1. 創始者の国益的企業活動と社会貢献

タタ財閥は、その昔イスラムに追われてイランからインドに移住したゾロアスター（拝火）教徒の後裔であり、インドの最も先進的で革新的な小集団に属す 3)。

ゾロアスター教は、古代ペルシャに起こった一神教であり、創造神アフラ・マズダを奉じ、善思、善語、善行の三つがその宗教倫理の根底を成す。ビジネスにおいてもこの倫理が基本であり、利益の社会還元をもって彼らの企業家精神は完成する。ムンバイのタタ財閥本社の玄関

表1　タタ財閥本社の株主構成（2005年）

株主	%
Ⅰ. 公的トラスト	
Sir Dorab Tata Trust（1932設立）	
Sir Ratan Tata Trust（1918設立）	
Jamsetji Tata T rust（1974設立）	
J.R.D.Tata Trust（1944設立）	
Navajbai Ratan Tata Trust（1974設立）	
M.K. Tata Trust（1958設立）　ほか	
（小計）	65.88
Ⅱ. タタ家族	3.01
Ⅲ. タタ傘下企業（相互持ち合い）	12.74
Ⅳ. Pallonji Shapoorji Mistry	18.37
（計）	100.00

（出典）R.M. Lala, The Creation of Wealth, 1981, p.192.
同訳書；黒沢一晃・小沢俊磨『富を創り、富を生かす』1990、215頁、
ビシュワ・ラズ・カンデル「インド財閥の家族経営とその特質」『アジア経営研究』第12号、24頁、など参照。

ホールにもこのモットーが掲げられている。

タタ財閥の創始者J.N.タタ（1839-1904）は、インドの名門エルフィンストン・カレッジを卒業後、父が始めた貿易事業に従事した。当初より彼がグローバルな活動を展開していたことは注目されるが、1868年（明治維新）には自身の貿易会社を創立し、翌年には実験的に紡績工場を営んだ。そして1874年に本格的な紡織会社（通称エンプレス・ミル）を設立し、最新の技術を導入しつつ、近代的な生産・労務管理を実施し、綿工業の真の革新者となった。その後３つの紡織会社をも設立した。

綿工業で成功したJ.N.タタは、近代的なホテル事業においてもパイオニアとなった。ホテル建設の直接的契機は、イギリス人による人種差別に対する反発であった。商談でホテルを利用しようとした際、インド人であることを理由に立ち入りを拒否されたのである。このようにして1902年インドホテル株式会社を設立し、当時東洋一豪華なタージマハル・ホテルを建設した。今も、イギリス皇帝が上陸時に使用したインド門に対峙しつつ、美しくそびえ立つ。また、イギリスの海運独占に対抗し、日本郵船と組んでタタライン（ボンベイ航路）を開設したことはあまりにも有名である。ちなみに、これは日本にとっては初の遠洋航路としてのボンベイ航路であり、この功績によってタタは日本政府より勲四等に叙せられた（1897年）。

次に彼は、インドを世界の工業国の一つとすべく、３つの夢の実現に向けて取り組んだ。第一に鉄鋼業を、第二に電力業を創設すること、および第三に国家の発展をリードする人材を育成することであった。

彼は、1902年に渡米して各地の製鉄工場を精力的に視察し、鉄鉱石、水、市場の観点から、現在のジャムシェドプールに立地選定をし、創設の準備を大々的に進めた。J. N. タタは、業半ばにして1904年に他界するが、それらは遺業として長男のドーラブ・タタ（1859－1932）らに

引き継がれ、1907年にタタ鉄鋼会社（Tata Iron and Steel Co., Ltd.）として設立された。日本の官営八幡製鉄所の生誕に遅れること約十年で、インドで巨大な鉄鋼会社が一民間人によって設立されたのである。電力会社も同様にして、1910年のタタ水力発電会社皮切りに、3つの会社が設立された。

ところで第二の人材育成のプロジェクトであるが、彼にとって社会貢献としての国家的なリーダーの育成は、鉄鋼業などの国家的事業に劣らず重要であった4)。弱者への食糧支援も重要であったが、インド的貧困の前では焼け石に水であった。優れた若者を支援して、国家の発展のために活用することこそが急務であった。こうした基本的な考え方に立って、彼は1892年にインド人学生に海外で広く高等教育を受けさせるための奨学金を創設した。この奨学金は、直接的には植民地支配下でインド人が高等文官職に就くことが可能となったことを契機に設けられた。同職に就くには、イギリスで学ぶ必要があり、多くの学生にとって奨学金の貸与が必須であったからである。他にも医者、弁護士、教員、技術者なども対象であり、給費生の中からはハーグ国際司法裁判所判事になるなど多くの逸材を輩出した。最下層から身を起こして大統領になったK.R. ナラヤナンもこの奨学金によって学んだ一人であった。

奨学金に続いて、1898年に彼はインド科学大学創設のために300万ルピーを申し出た。ホテルや鉄鋼業の準備に巨費を要する時に、彼の個人資産の半分を提供して、インドの工業発展を先導する理工系大学の創設を呼びかけたのである。この計画は、1911年に南インドのバンガロールの地に、インド科学大学（Indian Institute of Science）として設立された。自由化後にバンガロールが、インドのシリコンバレーとして発展したのは、そこにタタが手がけた大学があったからに他ならない。独立後に主要都市に設立されるインド工科大学の教授スタッフも、ほとんどが理工系大学の総本山としてのこの大学から供給された。

J.N.タタの志の高さと優れた先見性がうかがえよう。

2.
2代目によるフィランソロピー活動の組織化

さて、冒頭で指摘したようなタタ財閥の慈善活動は、2代目によって組織化されるが、より具体的にそれはいかなる経緯でスタートすることになったか。これまで見てきたような創始者の高い理念を継承したことが最大の要因と言ってよい。ケンブリッジのカイウス・カレッジに学んだ後、インドの大学を卒業して父の事業に参画した彼は、鉄鋼会社や大学の創設などに偉大な能力を発揮した。しかし、さらに進んで慈善信託を通じた社会貢献活動を創始するに至ったのは、次の二つの要因による。第1は、マハトマ・ガンディーの信託理論の影響であり、第2は、タタ財閥のファミリー事情である。

(1)ガンディーの信託理論の影響

周知のように、イギリスに学んで弁護

士となったガンディーは、南アフリカでの人種差別撤廃運動に取り組んだ後、1915年に熱狂的歓迎のなか帰国した。特に当時急速に台頭しつつあった新興企業家層がそのカリスマ性と倫理性に共鳴し、その後のガンディーの運動を支援した。バジャージ財閥の創始者J.バジャージは、「5番目の息子（弟子）」とするよう懇願し、その後国民会議派の財政部長を兼務し、「ガンディーアン・キャピタリスト」の異名をとった。また、ビルラ財閥の創始者G.D.ビルラも巨額の資金援助をする一方、ガンディーの「スポークスマン」として、英印会議などに随行した。ガンディーがビルラ邸で狂信者の凶弾に倒れたことは、周知のところである5)。

タタ家の場合も、例えば創始者の二男のラタン・タタが、南アフリカでのガンディーの闘争に多額の支援をし、またG.K.ゴーカレーの活動をも長期にわたって支援したことで広く知られていた。

ガンディーはユニークな「信託（トラスト）理論」を提唱し、企業家、商人、地主などの富める者達に対してその実践を強く呼びかけた。それは端的に言えば、富は神によって委託された資源を利用して得られたものであるから、浪費などは許されず、社会の福祉のために還元されねばならない、というものである6)。

ちなみに、信託の概念は紀元前のエジプトの遺言書にさかのぼるが、中世ゲルマン法を経て、主としてイギリスで（その後はインドでも）発達した。そして1907年には、イギリスでナショナル・トラスト法が制定され、信託が自然や歴史的景観の保持などの公共の利益のために利用されることになった。こうしたことがガンディーの「信託理論」の形成に大きな影響を与えたと考えられる。

以下に、ガンディーの「信託理論」を一書にまとめたM.K.Gandhi, My Theory of Trusteeship（ed. & pub.by Anand T.Hingorani), 1970. より、一部を抜粋しておこう。ガンディーの「魂」が伝わるよう、あえて英文を記し、拙訳も付した。ちなみに筆者は、ガンディーの独立闘争が勝利したのは、彼が膨大な情報を戦略的に英文で発信し、世界の支持を得たことによると考えている。

To the Rich Menでは、企業家・商人・地主などの富める者に対して、次のように呼びかけた（p.20)。

……no matter how much money we have earned, we should regard ourselves as trustees holding these moneys for the welfare of all our neighbours…. If God gives us power and wealth, He gives us the same that we may use them for the benefit of mankind and not for our selfish, carnal purpose.

[抄訳]

いかに多くの金を稼ごうとも、自分をすべての人の福祉のためにお金を預かっている受託人とみなすべきである。いやしくも神様がわれわれに富と力を与えてくださっているのは、利己的な物欲のためではなく、人類の福祉のためなのである。

ここに、ガンディーにとって、神は信託の創設者（creator）であり、企業家・商人・地主らは神から資源の管理を委託された受託者（trustee）であるから、そこで得られた富は受益者（beneficiery）に還元されなければならないのである。本書で彼は、他にも On Trusteeship, The Rich as Trustees, Non-Possession, Why Possess Property, Dignity of Poverty, Mutual Trustees, Trusteeship is Inevitable, Trusteeship Formula などと題して重ねて信託の概念を説き、いかに富める者が必要以上に富を持ち過ぎ、浪費をし、富が貧困救済のために活用されていないかを訴えた。

より具体的にガンディーは、インドの悪習の典型として豪華な「結婚の習慣」を引き合いに出し、次のように断罪した。彼は言う（p.21）。

In India, it must be held to be a crime to spend money on dinner and marriage parties and other luxuries, as long as millions of people are starving. We would not have a feast in a family if a member was about to die of starvation. If India is one family, we shoud have the same feeling as we would have in a private family.

[抄訳]

何百万人もの人々が餓死しつつある時に、豪華な食事や結婚披露宴を何日にもわたって繰り広げ、多額の金を浪費するのは罪である。家族の中で誰かが飢え死にしつつある時に祝宴など挙げないものだ。インドが一つの家族だとすれば、個人の家族の場合と同様の感情を持ってしかるべきであろう。

また、My Dream では以下のように説く（p.25）。

If only the rich people, whether titled or not , will act as trustees, we should soon be happy.

The dream I want to realize is not spoilation of the property of private owners, but to restrict its enjoyment so as to avoid all pauperism, consequent discontent and the hideously ugly contrast that exists today between the lives and surroundings of the rich and the poor.

The rich can help the poor by using their riches not for selfish pleasure, but so as to subserve the interests of the poor. If they do so, there will not be that unbridgeable gulf that today exists between the 'haves' and the 'have nots'.

[抄訳]

肩書きがあるなしに関係なく、富める者すべてが受託者として行動しさえすれば、すぐにも完全に幸せな社会が現出しよう。私が実現したい夢は私的所有財産の剥奪などではなく、貧困や不満や、富める者と貧しい者との間にある醜悪で不快なまでの格差をなくすよう、快楽を制限することなのだ。富める者は、富を自分たちの快楽のためでなく、貧しい者の利益のために使うことで、後者を助けることができる。そうすることで、「持て

る者」と「持たざる者」との間にある越え難い溝が埋められるのだ。

(2)家族的事情

創始者の二男で、社会事業家としても著名なラタン・タタは、ガンディーの強い影響下に、自分の財産を慈善信託に付して1918年に48歳で死去した。ラタン・タタ・トラストは、貧困層の住宅や病院や盲学校などの建設に対して多額の寄付をして今日に至る。

ところで、タタ家では早世した二男のみならず、長男のドーラブ・タタも子供に恵まれなかった。しかも1930年、愛する夫人は50才で先立った。また、創始者の従兄弟でパートナーのR.D.タタも1926年に死去していた。こうした状況から1887年に創立された本社Tata Sonsの持分も、近い将来分散する可能性が充分ありえた。

そこで長男のドーラブ・タタは、本社に永続的な性格を付与するために、1932年彼自身の同社の持分を含む全財産を公益信託に付し、国家的に重要な研究や救済事業および慈善目的のためのトラストを設立した(Sir Dorab Tata Trust)。上記ラタン・タタ・トラストの場合と同様、宗教はもとより国籍をも問わない点において画期的な公益信託であった。同トラストは、その後次のような国家的に重要な機関を創立した。タタ福祉大学(1936年)、タタ・メモリアル病院(1941年)、タタ基礎科学研究所(1945年、原子力・宇宙研究)、タタ劇場(1966年)などである。それらが、インドの教育・社会・文化・科学などの面で、先導的役割を果たしたことは言うまでもない。

同時に彼は、白血病で死去した妻を偲んで二つの慈善信託を設立した。Lady Tata Memorial Trust とLady Meherbai D. Tata Education Trustである。前者は白血病を中心とした研究のためのトラストであり、今でも資金のかなりの部分が世界の優れた研究に対して向けられている。後者は大学院レベルの女性研究者が海外で研究をするための基金である。

タタ財閥では、その後も多くの家族員が慈善信託を設定した。本社の持ち株の多くを、公的な慈善信託が保有する体制は、このようにして築かれたのである。ガンディーが提唱した信託理論は、タタ財閥によって具現化したのである。

3. トラストの概況

各慈善信託の成立事情とその概要についてはすでに触れた。ここでは最大のSir Dorab Tata Trust の最近の状況について補足的に述べておこう。同トラストは次の二つのタイプの資金援助をする。第一にタタが設立した国家的に重要な機関への資金助成であり、第二に各種NGOへの助成である 7)。

(1)機関援助

①Tata Institute of Social Sciences

1936年設立のタタ社会福祉大学が中心となる。

Tata Memorial Centre for Cancer Research and Treatment

1941年設立のタタ・メモリアル病

院を中心とする癌の治療・研究。

②Tata Institute of Fundamental Research

1945年に設立された基礎科学研究所。その後、政府の援助の下にインドの原子力・宇宙研究などの中核機関となる。

③Tata Agricultural and Rural Training Centre for the Blind（盲人の職業訓練）

④National Centre for the Performing Arts (NCPA)

1966年にスタートしたタタ財閥によるメセナ（文化支援）活動の中核機関

⑤Sir Dorab Tata Centre for Research in Tropical Diseases

⑥JRD Tata Ecotechnology Centre

⑦National Institute of Advanced Studies

(2)NGO支援

次の４つの部門でのNGO活動などを支援する（具体名は割愛）。

①水資源関連プロジェクトや収穫改善事業に携わるNGO

②未組織労働者の生活改善や、草の根的小事業者の育成に関わるグループ、および教育の分野で革新的なイニシアティブを発揮するグループ

③医療インフラやヘルスケア・アーユルヴェーダなど健康関連の団体

④農村開発・人権・身心障害・芸術・文化などの分野で顕著な働きをしているNGO

(3)関連トラスト

Sir Dorab Tata Trustは次の関連トラストをも管掌する（カッコ内は設立年）。

①J.N. Tata Endowment (1982)

②Lady Tata Memorial Trust (1932)

③Lady Meherbai Tata Education Trust (1932)

④J.R.D.Tata Trust (1944。学問の振興など他分野の支援)

⑤Jamsetji Tata Trust（タタの最初の企業創立100周年を記念して1974年に設立。各種イノベーションを顕彰）

⑥R.D.Tata Trust（四代目総帥の父の名を冠す。1990年設立で、福祉事業を支援）

⑦Tata Social Welfare Trust (1990)

⑧Tata Education Trust (1990)

⑨J.R.D. Tata & Thelma Tata Trust（四代目総帥と妻によって1991年設立。女性と子どもの支援）

4. 結びにかえて

タタ財閥では、創始者の強固な信念や理想を二代目以降の総帥が受け継ぎ、富の活用を組織化した大規模な社会貢献活動を展開してきた。ここでは取り上げなかったが、タタ財閥としては、この他にもTata Council for Community Initiativesを設け、各グループ企業が実施する広範な後進地域開発事業（従業員ボランティアを含む）の調整にあたらせている。また、グループとしての行動・倫理綱領（Tata Code of Conduct）をも策定し、それらを守らないグループ企業

は、「タタ」ブランドを使用させないことにもした。こうしたことがタタのブランド・イメージをさらに向上させ、良き「企業市民」として広く尊敬されるに至った。そのことは、従業員のプライドやロイヤルティやモチベーションをも高めることにつながった。このようにして同財閥はインドのベンチマーク的財閥となり、社会貢献に積極的でない財閥や企業は、人々から尊敬されないといった状況が醸成されつつある。

今やグローバル化が進展するなかで、企業活動が人類益としての意味を持つためには、利益性だけでなく、環境性、社会性（社会貢献を含む）、人間（人権）性を厳しく問われる 8)。偽装問題の噴出などで精神性や知性を問われている日本であるが、近年ＣＳＲ（企業の社会的責任）の観点より、ユニークな社会貢献活動を評価・顕彰する動きも広がりを見せている 9)。タタ財閥のケースを含む、世界のベストプラクティスに学びつつ、ワールドクラスを追究することが求められている。

（注）

1) N.Kumar (2009), p.176.
2) Morgen Witzel (2010), p.166.
3) 以下、三上敦史 (1993)、第５章「タタ財閥の形成と発展」ほか参照。
4) 以下、R.M.Lala (1981)、pp.33～36、黒沢一晃・小沢俊磨訳書 (1990)、同頁、ほか参照。
5) 三上敦史前掲書、第７章「ビルラ財閥の形成と発展」、第８章「バジャージ財閥の形成と発展」ほか参照。
6) ガンディーの「信託理論」は、石井一也 (1994)「マハトマ・ガンディーの社会経済思想」（『経済論叢』154巻１号）では「受託者制度理論」として、また内藤雅夫 (1987)『ガンディーをめぐる青年群像』三省堂、では「被信託理論」として言及されている。
7) 以下、Tata Group のウェブサイト (http://www.tata.com/)、R.M.Lala (1984)、Morgen Witzel (2010) など参照。
8) 三上敦史 (2000)「企業経営とグローバリゼーション―企業益と人類益・社会益の狭間」（松本仁助・香西茂・島岡宏編『共生の国際関係』世界思想社）。
9) 佐久間信夫他編『CSR企業総覧2008』東洋経済新報社、『有力企業の社会貢献度』朝日新聞文化財団・隔年版など。

（主要参考文献）

R.M.Lala (1981), The Creation of Wealth, Bombay.
ルッシィ・M・ララ著/黒沢一晃・小沢俊磨訳 (1990)『富を創り、富を生かす―インド・タタ財閥の発展』サイマル出版会。
三上敦史 (1993)『インド財閥経営史研究』同文舘。
小島眞 (2008)『タタ財閥』東洋経済新報社。
長崎暢子 (1996)『ガンディー――反近代の実験』岩波書店。
カンデル、B.ラズ (2009)「タタ財閥の企業集団管理」『経営教育研究』第12巻第２号。
R.M.Lala (1984), The Heartbeat of a Trust-Fifty Years of the Sir Dorabji Tata Trust.
Morgen Witzel (2010), Tata-The Evolution of a Corporate Brand, Penguin.
N.Kumar (2009), India's Global Powerhouses, Boston.
P.M.Tiwari, (2009), Pride of the Nation：Ratan Tata, New Delhi.

ヴィカース・スワループ氏 2作品の書評

関西日印文化協会会長
大阪外国語大学名誉教授
溝上　富夫

『ぼくと1ルピーの神様』
（子安亜弥訳　講談社発行）

この書評は、映画「スラムドッグ＄ミリオネア」の封切り前に書いたもので、映画の影響を一切受けていません。また現総領事が大阪に赴任される以前に書いたものです。

今評判の映画「スラムドッグ＄ミリオネア」の原作*Q and A*の日本語訳。実に面白い小説だ。一般の人にも面白いが、インド事情にある程度通じている人には、いっそう面白い。

まず構成がユニークである。スラムで育った無学の少年がクイズの難問に次から次へと正答していくのだが、そのクイズ番組ごとに章が組み立てられている。いろいろな事件に遭遇するが、それらがすべて正答を得るヒントになっている。彼が出会う善人・悪人はすべてが後でどこかに姿を現して彼に決定的な影響を与える。サスペンスなみの緊張感があって一気に読み終えることができる。

たしかに、彼の生い立ちや境遇は「蟹工船」とは比較にならない過酷なもので、「面白い」などといっては真面目な読者に叱られるかもしれない。しかし過酷ではあっても、どこかユーモアが感じられるのがこの小説の特徴ではないだろう

か。訳者もいわれるように、「本書の最大の魅力は、自分の頭と両手と両足以外何も持たないトーマス（主人公）が、知恵と機転で人生を切り開いていく姿にある」(459頁)のは全くその通りだと思う。最後に「運は自分が作り出すものだ」(455頁）という明確なメーッセージを伝えているのもよい。

著者の本職は現役の職業外交官であるが、さすがにその知識の豊富さには驚く。オーストラリアの駐在武官がスパイ活動

をしていたというのはありそうなことだし（ついでに夫人が高等弁務官と浮気していたとか）、中世ヒンディー文学から、化粧品の名前、銃やワインの知識、ボリウッド映画のこと、マフィアのこと、同性愛、狂犬病に至るまであらゆることに該博な知識をもっていないとこのような小説は書けない。

眼鏡をかけ、デジタルビデオカメラからミニディスクプレーヤーまでさまざまな小道具を身につけている日本人観光客が登場する（349－350頁）のも御愛嬌である（しかし、この日本人がチップをくれたのがきっかけで、少年は観光ガイドになって、ムガル朝の歴史に詳しくなってクイズの難問に答えられるようになるのである！）。

オーストラリア英語を少年が電話で真似たのが駐在武官逮捕のきっかけとなった(189頁)というのは実に面白い。実際、インド人には、学校教育を受けていなくとも「語学の天才」は結構いる。作者自身語学の天才かもしれない。

なかんずく私が面白いと思ったのは、司会者のプレム・クマールが最後の難問のヒントを教える場面だ。「Allahabad, Badodara,Cochi,Delhiの４箇所から招待を受けたのだが、行けるのが１箇所だけ、躊躇せずにアラーハーバードに行く。聖地サンガムに浸ってすべての罪を洗い流すんだ」（444頁）というセリフで、これで、読者にもトーマス少年にも答えが明らかに「A」であることが分かる。

アラーハーバードは作者の出身地でもある。ここに「郷土アラーハーバード」への彼の愛着のようなものが私には感じられるのだ。

それにしても、インドの現役の外交官が、いくらフィクションとはいえ、インドの恥部をよくもここまで堂々と、しかも実名で書けるものだと、インド人の「懐の深さ」に驚く。

たとえば、警察の腐敗を例に挙げて「彼ら（スラムの住民）と英文学の距離は、警察と公平さの距離と同じぐらい遠く離れている」という表現（425頁）。中国、北朝鮮、パキスタンでは想像もできないし、日本でも外交官にこれほどの表現の自由が保障されているだろうか。

かつて、「醜い日本人」という本を書いて免職になった外交官がいた。イラク戦争を非難して辞職に追い込まれた元レバノン大使もいた。政治と無関係な文化に関する論文を書く場合にも、実名を避けてペンネームで書くのが普通だ。いまさらながら、インドの「民主主義」「言論の自由」の健全さに敬意を表せざるを得ない。

しかし、「英語万能主義者」によって訳される本に出てくる固有名詞のカタカナ表記について、いつもながら訳者と出版社の編集者に苦言を呈したい。いったい、「ローマ字＝英語」と誰が決めたのか。母音の長短の表記の間違いはまだ許容範囲だが、インドの地名や人名では/r/ は明確に発音されるのは常識だ。

シク教徒の名前は「ハルミンダル」であって、「ハーミンダー」とは誰のことか分からない。そのくせクマールはクマーとせずにきちんとクマールと読んでい

るのはなぜだろう。もしかしたら、訳者は/ar/ だけを「ール」と読み、/er/や/ir/を「アー」と思っているのかもしれない。「頭」は「シル」であって、「サー」ではない。「頭にかぶりものをする儀式サー・ダークワーナー」(381頁) は「シル・ダクワーナー」である。これは女性の従順さ、つつましやかさを示す仕草である。この場合、売春婦がコンテキストだから、男性客をとるという意味である。同様に、「鼻輪をとるナスニ・ウサーナ」(同頁) は正確には「ナトニー・ウタールナー」であって、「遊女を水揚げする」という意味である。

このような文化人類学的に重要な項目に何の注もつけずに、いい加減なカタカナでごまかすのは全く不親切である。ほかにもいっぱいあって、人名の「セシジー」は「セートジー」だろう。デリー—ムンバイ間を走る急行列車は「パスキム急行」ではなく「パシュチム急行」である。

印税をとる以上、自らが知らないことについて、インド事情に詳しい人（このごろはいっぱいいる）にちょっと聞いてみるという謙虚さと誠意があってしかるべきだと思うが、それが訳者にも編集者にもないのは不思議で仕方ない。

まもなく、われらが大阪・神戸インド総領事として赴任される著者を「スワラップさん」と呼んでは失礼だ。「スワループ総領事」と言って迎えよう。

(「光の音符通信第135号」－2009年５月29日発行－より許可を得て転載)

SIX SUSPECTS (Transworld Publishers, UK, 2008)
(邦訳名『６人の容疑者』)

(1)

「万人の死は平等ではない。殺人にもカースト制がある」(13頁) という衝撃的な文で始まるこの長編推理小説は、ウッタルプラデーシュ州内務大臣の悪名高い息子の殺人事件の容疑者として浮かび上がった６人（退職後、解離性同一性障害に罹り、ときにガンディーのように振る舞う元高級官僚、政治家にレイプされた妹の仇を討とうとする女優、部族の守護のシンボルたる聖なる海の石を奪われたため、それを取り戻そうとインド本土

へ来て災難にあうアンダマン島のオンゲ族の一人、盗んだ携帯電話から巨額のブ

ラックマネーを手にしたことから幸運と不幸に遭遇する低カースト出身の貧しい青年、州首相の座を狙う野心も、実業家の息子の悪評のため実現できないウッタルプラデーシュ州の内務大臣、文通で知り合ったインドの女優と結婚しようとインドを訪れた、グーグルの創始者と同姓同名のおめでたいアメリカ人）をめぐって複雑に展開する事件を通して、真犯人を推理させるもの。

非常に多くの人物が登場し、非常に多くの事件がおこるため、容疑者と殺人事件との接点がなかなかつかめず、最後まで誰が真犯人なのか分からない。多分この人物だろうと思って読んでいたら、意外な結末に終わる。アガサ・クリスティの「オリエント急行殺人事件」では、容疑者のすべてが犯人だったが、この小説では容疑者の誰もが真犯人ではなかった！

娯楽作品として見事な作品といえる。

事件の進展とともに、インド各地（デリー、ムンバイ、コルカタ、チェンナイ、ヴァーラーナシー、アラーハーバード、ラクナウ、アーザムガル、ジャイサルメールやアンダマン島も）に案内してくれるため、インド事情を知る読者には興味が尽きない。さらに外国では、イスラーマーバード、テキサス、シドニーからアムステルダムまで登場する。

この作者は、前作でもあらゆる分野での知識の豊富さを披露したが、この作品でもその博（雑？）学ぶりを余すところなく示している。

とくにボリウッド映画ならびに映画界の事情には相当詳しく、往年の作品や歌だけでなく、シーンまで登場する（たとえば、「炎」（ショーレー）で盗賊の首領ガッバル・シンが警部のタークルに復讐するときのセリフ「俺にその手をよこせ」（といって両腕を切断する）を思いださせて、あるごろつきが、復讐に「お前の手は要求しないが、指を10本ともよこせ」（225-226頁）という場面には、本当は残酷なシーンだが、声を出して笑ってしまった。「金持ちの娘と貧乏な青年の恋がヒンディー映画の定番」（214頁）などとも書いている。他に引用される映画名は、「アンクル」「ラージュー・バン・ガヤー・ジェントルマン」「ラゲーラホー・ムンナーバーイ」「ラームとシャーム」等である。

(2)

作者は前作でも、スラムで育った無学な少年がオーストラリアのインド駐在武官の家に召使として働いているうちに、オーストラリア英語を覚え、それを真似てインドの捜査当局に電話で応じたことが武官逮捕のきっかけになったという奇抜なアイディアで小説を面白くしたように、言語に対する鋭い感覚とユーモアの持ち主である。従って駄洒落やユーモアが至るところに出てくる。

ごく一例を示そう。女優シャブナムの住み込み使用人の少年は粗野な田舎者で俳優志望であるが、それを彼女が評して「この子はカルチャー（文化）というよりアグリカルチャー（農業）向きだ」（46頁）というセリフ。ガンディーに成りきったつもりの元高級官僚が、非道徳な映

画の上映中止を申しいれた映画館主に、名前を問われ、「私は、モーハンダース・カラムチャンド・ガンディーだ」と答えると、「もう（ガンディーを扱った映画）<ムンナーバーイ>は終わりましたよ。あなたのセリフは1年古い」という館主の反応（147頁）。また、この元官僚、モーハンが元ボクサーのパンチを受けて倒れるときに叫んだのが「へー、ラーム！」（152頁）という、ガンディーが暗殺で倒れるときに発した同じ言葉であった。内務大臣が気に入りのＴＶジャーナリストを評して、「マーシャル（アラビア語で松明と言う意味）はいい仕事をしておる。まさに真実を照らすたいまつだ」(235頁）という言葉。「グル（導師）はフェザーランドとかいう所に行ってしまった」「ネーザーランド（オランダ）ですよ」（262頁）。

女優シャブナムが自分そっくりのビハール出身の田舎娘を芸能界と社交界に自分の身代わりとして登場させるために、英語や教養、身のこなし方を教える「シンデレラ計画」は、部分的にアメリカのミュージカル映画「マイ・フェアー・レディー」を彷彿させて、実に面白い。その結果はいったんは惨めに終わるが、しかし最終的には、シャブナムがその女と偽って上手く殺人罪の容疑者から逃れるという奇想天外の結末となる。

(3)

また本書には、いきなり政治家の腐敗やすさまじい権力闘争が露骨に描かれている。もちろん、フィクションではあるが、非常に迫力のある描写である。ある程度それに近いことを作者は見聞したに違いない。私は2009年９月、北インドを旅行中に寝台列車内でその部分を読んでいたのだが、退屈そうな向かいの老紳士にこの本を見せた。しばらく読んでいた後、その老紳士が吐き捨てるような口調で、"This is not a fiction. This is a fact!" と言ったのが印象的だった。

その他にも、インドの恥部と思われるようなことも堂々と書かれており、*Q & A*と同様、インド人読者の大らかさとこれほどまでに表現の自由が保障されたこの国の民主主義の健全さに感銘を受けた。前作で私が驚いたのは「スラムの住民と英文学の距離は、警察と公平さの距離と同じぐらい遠く離れている」(425頁）であり、今回の作品では、「私はインドの貧しさにハンマーで殴られたような衝撃を受けた」（282頁）とアメリカ人に言わせている言葉が印象的だった。

「インドは電話盗聴者の天国だ」（551-552頁）にも驚いた。作者は現役の職業外交官つまり、インド政府の官吏である。日本の外交官がいくらフィクションでも（しかも実名で）日本の恥部をここまで書ける自由はあるだろうか。答えは多分ノーだろう。

(4)

メデイアの批判を警告する州首相に対する内務大臣のことば、「英語教育を廃止して子供にヒンディー語だけを教えろ、と教育相に指示した」（93頁）は、メディアを通じて政治家の批判をするの

は英語を知っている層であり、ヒンディー語しか知らない一般大衆は政治家にとって非常に統御しやすいという、いわば愚民視したことばである。

もちろん、誇張であって現実は必ずしもそうではないが（ヒンディーのメディアも政府批判はする）、政治エリートのヒンディー語に対する一面の見方をあらわしていて興味のある個所である。

また別のシーンで、巨万の富を得た貧しい携帯電話泥棒が、彼女を一流ディスコに誘い出すことに成功したものの、「金持は英語だけで話すから」（188頁）といって気張って英語で話し始めるものの、あとが続かず「ヒンディーで話す方が好きだ」（189頁）とおどおどいうのも哀れな光景である。憲法上英語より上位にあるヒンディー語の地位が、実際は英語に対してどういう地位にあるかかがこれだけでもよく分かる。ヒンディー語を学ぶ者にとっては残念なことであるが、これがインドの現実でもある。

なお、上の内務大臣の言葉に対して州首相が「それから、（ヒンディーと並んで）ウルドゥー語もだ。イスラーム教徒の票を忘れるな」（93頁）と言った言葉も、ウルドゥー語がイスラーム教徒の共通のアイデンティーであるという一般人の認識を代弁している。

(5)

本書の特徴は他にもいくらでもある。たとえば、歴史上実際に起こった事件を取り上げてその犠牲者を文脈に合うように上手く登場させている。たとえば、1984年にボーパールの米化学工場で起こった毒ガス流出事故の犠牲者が広島や長崎の原爆犠牲者と同じように生き残って惨めな生活を送っている。

作者の描写の特徴として、悲惨な生活や事件の場面でも、概してどこかユーモアが感じられ、それが一種の清涼剤ともなるのだが、このシーンだけは本当に悲惨でとても笑えない。とくに弱い立場の女性の悲惨さはひしひしと胸を打つ。大物女優の妹サプナーもそれだけの理由でごろつきにレイプされ、自衛のため銃でその男を殺してしまうシーンも哀れである。チャンピー（ボーパール事故の犠牲者）がようやく結婚相手に恵まれて新しい人生を歩もうとしたばかりのときに、相手の青年は殺人事件の容疑者の一人として、警官に射殺されてしまう。

この悲劇の主人公こそ、背が低く色が黒いゆえにジャールカンド州出身のナクサライトと間違えられて警官に射殺される、実はアンダマン島の絶滅寸前の少数民族オンゲ族の一人エケティであった。オンゲ族への作者の同情がこの小説の最後の部分に強く表現されている。

事件の展開が、今日風にテレビのレポーターの現場中継（とくに裁判所前）という形で刻一刻と伝えられるのも、ストーリーに緊張感を与えるのに非常に効果的である。従来の推理小説になかった新しい手法と言ってよい。

(6)

しかし、575頁に及ぶこの長編小説を英語で読みきるのは、正直言って、私に

とって簡単なことではなかった。米語のスラングが出てくるし、中級程度の英和辞典には載っていない語彙が結構出てくる。しかし、それにも関らず面白く読めたのは、上述のごとく、内容が馴染みのあるインドのことであり、フィクションとはいえ、全く有り得ないことではないと思えるスリルに満ちた事件が次から次に起こるからである。

また、本書には、随所にヒンディー語だけでなく、ラージャスターニー語、ベンガル語やタミル語、アンダマン島のオンゲ語の語彙や文章が注釈もなく、イタリック体で出てくる。オリヤー語の諺まで出てくる。インドの言葉に多少とも知識のある者にとっては、いっそう楽しく読めるが、インド諸語とくにヒンディー語の分からない読者には、英語の読解力だけでは、この小説の面白さは理解できないのではないかと思われる。

janeman,tika,diya,prasad,roti,kofta,darshan,ishwar,lakshmanrekha,roti,saatvik,kurta,budhiya,chinal,satyagrahi,sardarji,atma,akhara,chunni,habshi,adab,tehzeeb,dharma, meherbani,khuda hafiz（綴りは原文のまま）等は、ヒンディー語やウルドゥー語を知っている者にはすぐ分かる。作者は多分インドの読者を意識して、故意にそのまま英語に訳さなかったものと思われる。

文章は英語でヒンディー語からの直訳と思われるもの（たとえば、"You eat my salt"（128頁）を日本語に直訳しても意味が通じない。これはヒンディーでは、「俺に恩義があるくせに……」という表現であることはすぐ分かる。）もある。

一方、ヒンディーではタブー表現で決して活字にできないものは、巧みに英語に逃げている。motherfucker,sisterfuckerがそれである。ともかく、こういう状況なので、近く出版されるという日本語訳が誰によってどのように翻訳されるかが楽しみである。かなり細かい注釈が求められるだろう。

今回の作品も映画化されているという話だが、楽しみの反面、あの複雑なストーリーを知ってしまった以上、２～３時間の映画ではほとんどが切り捨てられ、「スラムドッグ・ミリオネア」と同様、原作とは異なるストーリーに作りかえられるのではないか、という不安感もある。

作者はこれだけの長編小説を南アフリカでの勤務中に、週末と休暇を利用して書き上げたというから、すごいエネルギーの持ち主である。第３作にはどんな構想をもっておられるのか楽しみである。多分、日本のことが書かれるのではないかと期待しつつ。

（2009年10月記）

＜あとがき＞

この書評は英語の原作を読んで書いていたものだが、2010年９月に待望の邦訳『６人の容疑者』が前作と同じ訳者によって武田ランダムハウスジャパンから出版された。前作の邦訳は、インドの人名・地名等の固有名詞の表記法が間違っていたことで批判を浴びたため、今回はインドの専門家（映画紹介で有名な松岡環さん）の監修を受けてなされただけあって、

非常に分かりやすい正確な訳本となった。

至れり尽くせりの細かい注がついており、原語をいかすためルビをふるという工夫もなされており、原文を読んだ時点での私の不安感は完全に払拭されている。従って、インド事情を知らない人でも容易に楽しめることができる。通読した限り致命的な誤訳はない。

しかし、あれほど長い小説の翻訳ともなると、やはり100パーセント完璧な訳というのも難しかろう。たとえば、上にのべた映画「ショーレー（炎）」で、盗賊の首領ガッバルが警部に復讐するシーンのセリフは原文では“Gabbar asks Thakur to give him his hands”（225頁）であるが、その部分の邦訳は「ガッバルがタークルに手を貸すよう頼んだ……」（上巻の275頁）となっている。

さらにそれをなぞったセリフは”I will ask for your fingers. All of ten of them.”（225-226頁）だが、邦訳では「俺に指を貸してもらう。十本全部だ」（上巻の275頁）とあるが、それでは迫力がなく復讐にならない。やはり、翻訳者は映画を見ておられないようなので、イメージがつかめなかったのだろう。

あの英語は文字通り、「お前の手を俺によこせ！」が正確で、実際に次の瞬間、盗賊は警部の両手を切り落とすのである。従って、この小説でそれをなぞった上文も、「お前の指を全部俺によこせ！」でなければならない。さらに細かい指摘をするならば、やはり、ヒンディーの表現をそのまま英語に直訳したと思われる上記の“You eat my salts”（128頁）を「居候までさせてやっているくせに」（上巻の152頁）と訳しているのは、誤訳とまではいえないし、日本語としての響きもよいが、やや意訳しすぎのきらいがある。

確かに、元高級官僚のお抱えの運転手は、住み込みの運転手として元高級官僚の邸宅内に寝泊まりはしている。しかし、日本語の「居候」は同じ屋根の下の「別室」に無料で住まわせてもらっていて、その上、食事ぐらいは一緒にとるというイメージがわく。

しかし、インドの大邸宅で召使いを住まわせる場合、まず同じ屋根の下ということはなく、遠く離れたサーヴァント・クオーターという粗末な部屋に住まわせるのが普通で、食事を一緒にするということはまずあり得ない。インドの厳しい身分制度を考えると「居候」という日本語のイメージとは少々合わない気がするのだ。「俺に恩義があるくせに！」で十分と思われる。

しかし、全体として本書の訳文はすぐれていることにまちがいはない。本書はすでに27言語に翻訳出版されたといわれる。この際、「27ヶ国語」という言い方は訂正すべきである。かつての日本のように、「１国家＝１言語」という例は少ないし、インドのような多言語国家ではそれらの諸言語をいくら加えても、「１ヶ国語」にしかならないという現象が起こる。この27言語の中には複数のインドの言語があると聞いているが、なぜか今回は、ヒンディー語訳はまだ出ていないということだ。

（2010年10月記）

太陽の町から日いずる国へ

北陸ジャパン・インドクラブ会長
塩谷　マクスーダ

ヒマラヤが天界へ続く尾根ならば、カシュミールはその懐にいだかれた小さな山小屋でしょうか。州都スリナガルは「太陽の町」と呼ばれています。私の魂を育んだ麗しき故郷。そして現在、「太陽のいずる国」日本を第二の故郷と呼ばせていただいています。振り返れば、目に見えない大きな力に導かれて、「日いずる日本」へ来たように思えてなりません。それも、私に与えられた言葉では表現できない不可思議な使命、役割を感ずるのです。

その不可思議さのひとつ、最近とみに思うことですが、カシュミールが仏教の揺りかごであったということです。スリナガルは仏教の庇護者アショーカ王が創った町です。カシュミール、中央アジア、中国を経て仏教は日本に伝来しました。これに貢献したのは玄奘と並び称されるクマーラジーヴァ(鳩摩羅什)で、漢訳した彼の経典、「法華経」「阿弥陀経」「維摩経」などは、日本の仏教の礎となりました。

仏教の教える習慣と言葉が、今の私と日本をつないでいる…。このご縁に驚きを禁じえませんし、この役割を与えられたことに深い感動と感謝を覚えずにはいられません。

見えざるなにか。そこに書かれた私のストーリーには、モンゴルの国費留学生としてウランバートルで暮らし、同じモンゴル大学の日本人留学生と出会うと記されています。日本の吸引力？　留学生とは主人です。1983年に主人，塩谷茂樹と結婚、1984年、日本の地を踏みました。

新たなステージは日本海に面する小さな町。人情もありますが同時に偏見もあり、ガンジス川の流れる暑いカレーの国がインドのイメージでした。もっとインドを理解してと切望する日々のうちに、インドレストラン「ルビーナ」がオープンします。研究に専念する夫を助け子どもたちを育てるという個人的には差し迫った状況でしたが、それを乗り越える大きなロマンが「ルビーナ」にはいっぱい詰まっていました。

「アジアのみなさん手をつなごう」と呼びかけた民族衣装パーティーは、日本各地に留学する学生たちが集うNPO「ジャパンテント」誕生のきっかけとなり、石川県の夏の一大イベントに成長しました。美味しいナーンとカリーを囲んでさまざまな言語が飛び交い、国籍を問わない愉快な輪から、石川日印協会、石川国

際ラウンジ、さらに石川県国際交流婦人のつばさ、北陸ジャパン―インドクラブ、福井日印協会など画期的な団体が次々と誕生しました。食文化のみならず、「ルビーナ」にはすばらしい友人たちが結集し、金沢へ石川県へ北陸へ情報を発信する基地となり、ロマンの視座となっていったのです。

お陰で私は公民館、小中学校、高校、大学、ＰＴＡ、いろいろな団体から講演依頼が相次ぎ、「ルビーナ」に端を発した交流の輪は、外へ外へと広がっていきました。人との出会いが私の感動、そしてエネルギー源でした。

忘れられないのは、森喜朗元首相がインド政府から“The Padama Bhushana Award（蓮華褒章）”を授与されたことです。首相時代にパキスタンとカシュミールの緊張状態を懸念され、両国に足を運ばれて友好関係に尽力されました。この功績を称える最高勲章が、インド大統領から森元首相へ直接手渡されたのです。そのときの感動は、森元首相をお招きした「ルビーナ」でのパーティーまで続いていたことはいうまでもありません。

サリーパーティーは「ルビーナ」の名物です。私のサリーに魅せられてというよりも、石川県の女性たちがシルクや織物に目が肥えていたといった方が正解。サリー100着以上揃えました。

想像してみてください、キラキラした女性たちの瞳を。でも、もっとすばらしいのは彼女たちの行動力で、要望に応えて単なる観光ではないインドツアーを何度も企画しました。あるときは、さまざまな日本文化の紹介と体験を私の母校カシミール大学で行い、またあるときはインド北部のカングラに小学校建設をと動き、ついに夢を実現させてしまいました。

「ルビーナ」から日本へ発信するインド文化とインドへ発信する日本文化は、年々密度を増し、カシュミール大学の恩師エハマド教授、パンディータ教授、マットー教授、ＪＮＵのヴァルマー教授をお招きし、インド文化講座を開くに至ります。2003年に、大学進学を希望するカシュミールの女性を対象にした奨学金制度が設けられたのは、マットー教授の来日がきっかけでした。

大学婦人協会金沢支部と石川日印協会がひとつの思いを共有し、日本ではバザーやチャリティーで寄金を募り、カシュミールではすでに26人に支給されています。ある友人が、「第二、第三のあなたが出るように」と、奨学金設立の理由を話してくれました。最高の言葉でした。

北陸に咲いたスリナガルの蓮の花は太陽の光を浴び、多くの友人に支えられて根をのばすことができました。しかしスリナガルの蓮の花は、激しい銃弾を浴び続けています。平和の重みを大自然の歎きを夢の大切さを痛烈に感じるのです。

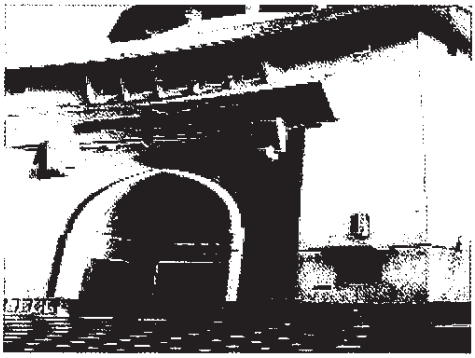
さて、私の２ページ目のストーリーは、なにが書かれているのでしょうか。それを見たくなりました。「ルビーナは卒業」、声なき声に導かれて私は大きくハンドルをきったのです。インドを離れてさらにインドを知り、日本を離れてさらに日本を知る。私の新しい使命は役割はと、パワーもクールさもフットワークも全開です。

Ayurveda：インド伝統医学

日本アーユルヴェーダ学会理事
大阪アーユルヴェーダ研究所所長
イナムラ・ヒロエ・シャルマ

Ayurvedaとはインドの伝統医学である。約3500年前に集大成され現在も西洋医学と共にインド国民の医療を担っている。インド中央政府厚生省や全国の州政府の中にAYUSHと呼ぶAyurveda、ユーナーニー、シッダ、ヨーガ、ホメオパチーなどを含む所轄部門がある。約100万人のアーユルヴェーダ医が登録済みで、インド各州にAyurveda大学や大学院、多数の官民病院診療所及び製薬会社がある。国民健康保険制度は無いが公立の医療機関では無料診療が行われ、特に低所得層に対し病院は衣食住薬を施し、福祉的役割をも果たしている。

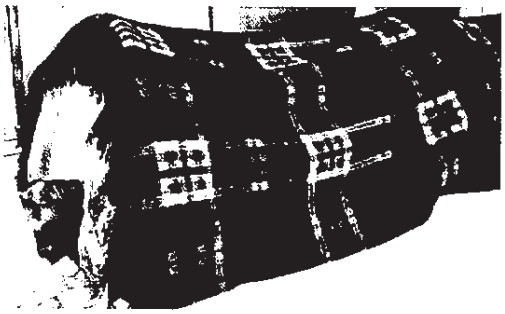
Ayurvedaの起源は四大ヴェーダのリグ.ヴェーダにまで溯り、4番目のアタルヴァ.ヴェーダに医学知識が豊富に記述され、この部分が分離し副ヴェーダとしてのAyurvedaが誕生したと見られている。



グジャラート.アーユルヴェーダ大学

チャラカ、スシュルタ、アシュターンガフリダヤの三大古典医書がその知識を現在に継承している。

Ayus（生命：Life）とVeda（科学：Science)の2語は以下の内容を包含する。病気の治療は無論であるが健者の健康維持増進を医学の目的に挙げ予防分野の知識を強調し、体力、抵抗力、自然治癒力増強をめざす点にあり、昼と夜の養生法、季節養生法などは現在に言う生活習慣の



(左)薬油マッサージ、(右)薬草蒸気による発汗法（Pinda Sveda, Svedana)

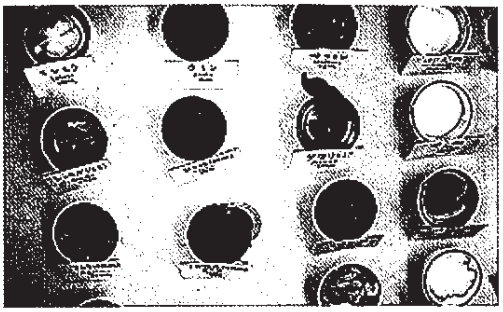
薬草スダルシャナ（解熱作用）

知識である。専門分野は内科、小児養育、精神、首から上部を扱う科（耳鼻咽喉眼口腔）、外科、解毒、強壮、強精（不妊治療）の八分科にわたる。

人間の生理現象、様々な病気の原因は３大エネルギー（ドーシャ）、即ちヴァータ（風：気：運動エネルギー）、ピッタ（火：熱：消化代謝）、カパ（水：結合：融合）の均衡と不均衡にあり、治療もまたドーシャの均衡を取り戻す諸種の食物、生活、薬物が用いられる。漢方の気血水理論と類似し起源はAyurvedaにありとする。

摂取食物の代謝により７つの身体組織（ダートゥ；体液、血液、筋肉、脂肪、骨、骨髄、精液）が造られ、便、尿、汗などの老廃物は体外に排泄される。人は３大エネルギーが均衡し、消化力が旺盛で、身体組織が正常に造られ機能し、老廃物が健康的に排泄でき、五感や精神が生き生きとし、魂までもが至福に満たされている時、これを完璧な健康状態とする。故に心身魂の医学なのである。

近年Ayurvedaフィーバーが西欧に波及している。西洋医学が抱える諸問題―副作用、合併症、医療費高騰、機械化に



鉱物薬

よるストレスのため他の医学システムに関心が向けられ、WHOが世界の伝統医学に注目を置くようになった。この傾向は特にアメリカ、ヨーロッパ、アジアの中の日本に高まりつつある。

日本では40年前日本アーユルヴェーダ学会（会員約500名）が故丸山博元阪大医学部教授らにより創設されて以来、年次総会開催、機関誌刊行、医学思想の普及、日印交流、東西医学の融合に尽力している。特記すべきは、痔瘻の腐蝕糸（Ksaara-Suutra）治療が富山の民間病院（田澤賢次富山大学名誉教授ら）で20年前から導入され治癒率95%（約1600例）を出していることである。徐々にではあるがAyurvedaが日本の医療健康システムに市民権を得つつある。

卒業式

インド古典舞踊とひとすじの光

関西日印文化協会理事
マルガユニティー主宰
モガリ　真奈美

インド古典舞踊の中で最も古いと言われている南インド（タミルナード州）発祥の古典舞踊をBharatanatyam・バラタナーティヤムといいます。その起源は資料によっては、2000年前～、4000年前～、5000年前～と様々な情報があります。

興味深いのは紀元前2500年～紀元前1800年にかけて繁栄したと言われているインダス文明のモヘンジョダロやハラッパーなどの古代都市には、ドラヴィダ系の言語を話す民族が住んでいたと推測されており、遺跡、遺物からは樹木崇拝、蛇神崇拝、女神崇拝、沐浴の習慣などが発見され青銅の踊り子像も発掘されていることです。

ドラヴィダ人はアーリア人の侵攻により南に移動し、南インドに定住していくことで、古代文明を受け継ぎ樹木や蛇にみられる生命力にあやかる信仰や、母なる大地に豊穣をもたらす自然の恩恵に感謝し、また畏敬の念を表し、家族の平和や一人一人の幸せを祈ることを現代につなぎ揺るぎない「祈り」として表してきたと思われます。その「祈り」は南インド古典舞踊の起源と言われており、その昔、神々との交流する手段であったことは最も古い舞踊であるという所以であると思われます。

しかし、紀元前1000年～800年頃アーリア人たちの信仰の教典であるヴェーダによって自然現象を神格化する多神教や祭祀が重要視されるようになり以前からの土着信仰は影を潜めるようになりまし

た。

そのころ聖バラタ・ムニによりインドにおける最古の舞踊・演劇に関する教典「ナーティヤ・シャーストラ」が書かれています。舞踊に関わる章では、舞踊で用いられる身体の細部それぞれの動きが分析されて詳細に記されています。その影響は、他のアジア諸国（タイ・ビルマ・インドネシア）に伝わる民族舞踊の原形になっています。

この「ナーティヤ・シャーストラ」に基づいて、南インドでは5歳からグル（舞踊の師匠）に厳しい指導を受けたデーヴァダーシー（神の召使い）と呼ばれる寺院直属の巫女たちにより踊られるようになりました。10世紀頃はヒンドゥー教の儀式舞踊として発達し神前や王侯貴族の宮廷で踊られ、チョーラ王朝（9～13世紀）時代にその全盛期を迎えました。しかしその頃はインドに広まったとはいえ、一部の人々しか見ることが出来なかったそうです。

そして19世紀の初め頃、タンジョール・カルテットと呼ばれる4人兄弟によって上演形式が整えられました。踊りの形式は今日でもその基本形式が踏襲されています。技法や演出には宗教舞踊の名残をとどめつつ　舞台芸術として広まることになり一般の人々にも見られるようになりました。また、それまでは踊り子は女性のみでしたが男性も踊られるようになり、今ではグル（踊りの師匠）のほとんどが男性です。

しかし、その後、英国統治時代にはいって数多くの伝統が破壊され、踊りはもちろん踊りに欠かせない音楽の演奏者も職を失い伝承が危ぶまれましたが、識者たちの協力で復興を遂げ今に至っています。

中でも、チェンナイの南にある芸術学校「Kalakshetra（カラクシェトラ）」は特に有名です。

「Rukumini Devi（ルクミニ・デヴィ）」によって1936年に設立されました。1930年代に国民の文化遺産の為に寄付金を呼び掛け忘却の闇からバラタナーティヤムの復興に尽くした最も求められたバラタナーティヤムダンサーの一人でした。そして熟練した芸術家、舞踊家たちの演技、巡業、舞踊劇の創作を通してインド各地にインド古典舞踊バラタナーティヤムを普及させました。

「Kalakushetra（カラクシェトラ）」は素晴らしい芸術の寺院と言う意味でありそれは設立者による個人、国、宗教、そして国際的な発展の力である芸術を知ってもらう為の働きでもあり真の芸術は本質的にすべてにつながることを理想とし強調していました。

古典舞踊バラタナーティヤム、音楽、絵画、工芸を訓練した生徒たちは卒業後彼ら自身の学校を立ち上げたり彼らの故郷やインド各地の大学などで教えます。

ここで学ぶバラタナーティヤムを「カラクシェトラスタイル」と呼んでいます。

ちなみに私の師匠であるK.P.Yesodha女史もここを卒業し舞踊学校の講師をする傍らダンサーとして国内外で活躍しています。

ルクミニ・デヴィの理想はカラクシェトラを通して見事に実現していくことになりました。世界中から生徒は集まりその卒業生もカラクシェトラの理想を世界に繋いでいます。インド文化財産への貢献を認められたルクミニ・デヴィはインド政府から1956年に「Padma Bhushan」を授与されました。

カラクシェトラの劇場はルクミニ・デヴィによって寺院の舞台を「Kuttambalam」のケララ形式によりデザインされています。美しい建物や舞台もまた「ナーティヤ・シャーストラ」に記述された多くの特色を持ち合わせます。

1993年インド政府により「Kalakushetra Foundation Act」は国の最も価値のある尊大なもののひとつであると宣言されました。

南インド古典舞踊・バラタナーティヤムは長い歴史の中で翻弄されながらも育まれてきた舞踊です。それは神という普遍的であり人類にとって不可欠な存在であり、計り知れないあこがれへの繋がりを担うものから、近年は高い芸術性も加わり、美しい姿勢とボディバランスを通して旋律・リズムを生命と創造の具体的表現または永遠の宇宙の祝福であると言われています。

バラタナーティヤム「Bharatanatyam」の、BhaはBhava（感情）、raはRaga（旋律）、taはThala（リズム）、Natyamは舞踊を意味しています。

では、続いてはバラタナーティヤムの踊りの神・ナタラージャについて触れたいと思います。破壊と再生の神シヴァ神は、踊りの神・ナタラージャもしくはナティーシャとも呼ばれ特に南インドではとても親しまれています。シヴァ神の起源もまたインダス文明に遡り非アーリアの要素が濃いものでした。元はルドラと呼ばれ豪雨、大雨、雷電によって破壊し災禍をもたらす恐ろしい面と同時に、雨は植物を育てる生命の源であり恩恵をもたらす二面性をもつ神であったようです

が、後にシヴァ神にその要素を表したと言われています。

また、蛇を首に巻いている点、妻パールヴァティと同一視されている点は蛇神崇拝、女神崇拝の名残のようです。バラタナーティヤムでのシヴァ神の讃歌には「シヴァ神のお身体が宇宙のすべてであるとはどういうことなのでしょう。あなたの言葉を世界中の人々が語りすべてをひとつにしています。月と星々をアクセサリーのように身につけておられるあなたへ私たちは手を合わせます。至高の神、シヴァン」とあります。

では、踊りの神ナタラージャの独特のポーズが意味することをまとめます。

心臓を中心に四方に手足を伸ばしたポーズは、卍（まんじ）の形を成し宇宙を動かす力を表しています。また私たちの身体の細胞と細胞の間にも無数の卍（まんじ）の形があると言われています。それは大宇宙の秩序のなかにある自由な旋律とリズムが生み出す踊りの神ナタラージャのエネルギーと踊り手の内なる小宇宙のエネルギーがかもし出す表現力とリズム感が響き合うことを意味し、踊り手はバラタナーティヤムの魅力と奥深さを伺い知ることになります。

ナタラージャの右手の太鼓は、すべてに広がる音とリズムにより内面にある悪を追い払うことを意味します。もう一つの右手は助けを求める者を救済することを表します。

左手の火はすべての邪悪を燃え尽くすことを表し、もう一方の伸ばした腕と足は無力な者に援助と生きる力を与えることを表します。右足の下で悪魔をつぶしている姿はすべての邪悪と悪事を働く人々を退治する者であることを表します。

ナタラージャの演目は他の演目よりもはるかに体力･集中力を必要としますが、心身への歓びも数倍楽しむことができます。

では、演目に表されるナタラージャを説明をします。猛獣の代名詞である虎の皮を腰に巻き、三つ又の矛を持つ点はなによりも強く時に恐ろしい姿を思わせますが、足首に鈴を付け手には小太鼓を持ち宇宙をステージにして楽しいリズムに乗って踊っている姿も表します。そのダンスはか弱い鹿とそれを襲う獣を仲良くさせます。また、私たちも耳を澄ましこの楽しいリズムの波動を感じたとき、心身にナタラージャの祝福が広がり至福を感じることができます。反面、静かに瞑想をして世の中の平安を祈る姿も持ち合わせます。

また、都を守る為に闘いに明け暮れつつも武器を持っている女神が夫となるべ

くシヴァ神と目と目が合ったとき武器を手放し、その都は文学、音楽、舞踊の三つの文化で繁栄し都は平和になり人々は幸せになったという神話もあります。ナタラージャの踊りは　あらゆる二面性を対立ではなく楽しいリズム(ひびきあい)で両極にあるものをセンタリングしてくれて心の安定へと導いてくれているように思います。

また、毎年２月（マーガ月）の月が欠けていく14日目の夜はMaha Shivaratry（マハー・シヴァラトリー）というシヴァ神を祭る日で、熱心な信者は絶食して眠らずにシヴァ神に祈りをささげながら夜を越します。夜中に讃歌を唄い続けるプージャには功徳があると言われています。

南インドにある多くのナタラージャを祀る寺院では舞踊のフェスティバルが夜遅くまで行なわれます。その中でも南インド・チタンバラムにある108種のポーズの浮き彫りがあることで有名なナタラージャ寺院のフェスティバルにはインド中から踊りの名手からこどもダンサー達まで集まり、熱気に溢れた３日間を繰り広げます。

この祭典に夕暮れから夕食の用意を持って家族（３世代の）が揃って続々と寺院に足を運ぶ姿があり、砂地の座席は見る見る埋め尽くされていきます。ナタラージャの踊りには先にも触れましたように、人々の苦難を排除し力を与え守ってくださることや叡智を伝える神話を楽しいリズムとともに表しています。このバラタナーティヤムの祭を通して、その文化を祖父母や父母が子や孫へと代々伝えてきました。これからも古代の祝福の光は次世代へと繋がることと思います。

インドで最古を誇る南インド古典舞踊バラタナーティヤムは踊りの神と踊り手を繋ぐタテの光から、現代ではインド中いや、世界中にヨコへの光が広がっています。それは十字架のクロスのような絶妙なバランスや美しさ強さを保ち、これからますます安定した光となって、祝福のリズムに満ちた輝かしい未来につながっていくことを願って止みません。

南インドで人気のある８つの形をしたラクシュミー女神のポスター。富、幸福、母親の力、食、こども、知恵、仕事の力、成功、の女神を表す

シタールに魅せられて

～インド音楽を通じて思うこと～

シタール演奏家
田中　峰彦

インドの弦楽器「シタール」。私とこの楽器との出会いは一枚のレコードでした。

その不思議で魅力的な音色を聴き「自分でこの音を出してみたい！」と、まずはなんとか楽器を手に入れ、試行錯誤。しかしながら一向に進歩せず、「これはインドに行って勉強するしかない！」とカルカッタ（現コルカタ）を訪れたのが1988年の冬でした。

昨今はどこに居てもインターネットで各地の情報が分かり、世界が近くなりましたが、当時はまだ大変でした。通信手段は、まずは手紙。そして電報とつながりにくい電話。停電も頻繁に起こり、今では考えられないことが日常茶飯事。結構な覚悟で音楽修行のためにインドへ向かった当時のことが懐かしく思い出されます。

インドには、映画音楽、宗教歌、祭礼の音楽、歌謡曲、各地の民謡、大道芸の音楽など、多種多様な音楽がありますが、一般にシタールで演奏するのは「北インド古典音楽」です。

北インド古典音楽は、16～17世紀ムガール朝をはじめ各地のイスラム宮廷の音楽としてインド古来の文化と融合しながら発展しました。

その旋律は、多彩な風土、情緒、季節や時間の流れと密接に関わっており、演奏者は音についての伝統的な決まりを元に即興的に音楽を紡いでいきます。

曲線的に流れる優雅で甘美なメロディと複雑で変幻自在なリズムがからみあって生まれるスリリングで魅力的なこの音楽に、私はすぐに夢中になりました。

現地で師の演奏を目の前で聴いた時には、音がまさに生き物のように迫ってきました。その立体的で優しい響きに体が包まれていく快感は、音楽が大好きだった私にとっても初めての体験でした。

レッスンは現在も口伝によって行なわれます。師の肉声を楽器で模倣することによって、その歌いまわしの全てを自分の体に覚え込ませるのです。

それを書き取ることは、ある程度理解して歌うことが出来るようになるまでは許されません。文字によるインドの記譜法はありますが、生き物のように複雑で繊細な歌いまわしの全てを書き写すことはできないからです。西洋音楽が多くの情報を譜面から得るのと異なり、インド

の譜面は忘れない為のメモのようなものなのです。これは浄瑠璃や落語など日本の伝統芸能の教授法とも共通するように思います。

独自の表現が生まれてくるのは、師から教わったことを体に叩き込んでからのことです。先人によって磨かれ築き上げられてきたものに絶対的な価値を見出し受け伝えながらも、さらに現代の要素や個性をも取り込み、アグレッシブに進歩・変容を続けるあり方には、大変魅力を感じるところであります。

古典は守り継承するだけでなく発展していかなければ現代・未来に活力をもって輝かないということを肌で実感することが出来ました。

そしてこれは古典音楽の世界だけではなく、インドの社会全体がもつパワーや逞しさ、底の深さに大きくつながっているように思います。

インドでの生活の中では、家族のあり方など日本では感じなくなった懐かしさを覚えることがありました。日本において急速に失われつつある人と人との関わり方、伝統工芸や大衆芸能のあり方等々に思いが向くところです。

新しいものに対して創造的に挑戦していくインドの人々の柔軟な感性は、日本人の価値の置き方とは何か違いを感じます。

勿論インドの社会や地域の環境もグローバル化に伴い急速に変化してきていますが、身近なものへ対するこだわり方、アイデンティティのあり方、大切なものを次世代に受け継がせようとする気持ちに粘り強さがあるように感じます。

私自身、演奏活動で日本全国の特色ある様々な土地を訪れますが、本来多彩な風土、伝統、環境をもった文化が中央集権的に画一化されていく流れを目の当たりにし、危惧を感じています。

今こそ、様々な地域の個性ある文化を見つめ、それらが活性化され、現在から未来に続くヴィジョンを模索する試みを拡げていくことが肝要に思います。

そうすることで、多彩に響きあう、刺激しあう、豊かな日本文化の将来も望めるように思います。

私自身は、自己の原点である古典音楽とともに、シタールの響きを生かした様々な音楽への取り組みを行なっており、その可能性にこれからも挑戦していこうと、興味は尽きません。

興隆するインドの変革
――― 断面から基底に迫る
～人権尊厳の世紀へ　日印文化の交流を更に豊かに～

関西日印文化協会副会長
地球市民の会日本センター理事
徳田　一彦

Ⅰ　はじめに

興隆するインドの現実と日本

BRICsの一国、人口約12億。近年のインド経済の成長は、目覚しいものがある。世界銀行が１月12日、2010年の世界経済の実質経済成長率を発表した。世界全体は3.9%。インドは9.5%〔中国：10.0%、ロシア：3.8%、日本：4.4%、米国：2.8%、ユーロ圏：1.7%〕と上方修正。2011年は8.4%に鈍化と予測するが〔注１〕、世界最大の民主主義国家インドの動向は、眼が離せない。

「インド政府のまとめた国内線の航空旅客数は、景気拡大で、2010/2009年比19%増、5202万人となった」（ムンバイの黒沼勇史特派員・N.2011.2/７）と。

英語のできるインド人には、世界で有益な仕事が待っている。旅客機の果たす役割は大きく、日本企業もインド航空界に参与していくことも大事。インド訪問時にホテルで突然停電となった。水力が主体のインドの電力供給量は厳しい局面もある。「東芝、インドで火力発電攻勢」が目に付く。

発電設備は、CO_2排出量は少ない「超臨界圧」の技術を用いると。地元の神戸製鋼が世界のシェアー50%を占める分野で「インドにタイヤ製造機械生産の拠点を立ち上げ、10月から稼動させる」と発表(K.2011.1/26)。

昨年末、井戸兵庫県知事、２月には橋下大阪府知事が訪印し話題となった。わが国のODAによりデリーのメトロも完成。川崎重工業もインド国鉄に製造技術を供与し現地工場で貨物鉄道車両を生産する方向だ。デリー・ムンバイ間とデリー・コルカタ間の鉄道輸送はインドの生命線となる。かつて、主要幹線道路・裸道を100km近い速度で警笛を鳴らし走行するバスに乗った。最初恐怖を覚えた。インフラの整備が急がれるインド。日本の環境・科学技術が期待できる分野は多々ある。

(A)　危機管理体制の確立

我国は、この半世紀、先進国への道を走りぬく中で、公害やバブルを含む負の遺産をも経験した。唯一の被爆国家で資源に乏しい日本。今後、①国の研究機関を整理統合し、“非戦＆平和創造・地球環境

保全機構”を創設する。②国連と連携をとり核兵器を含む戦争への転用をさせない監視、研究体制も強化する。③ソフトパワーを駆使し紛争解決や大震災時に世界に駆けつけ貢献できる体制も常時確立する。

企業のTOPにお願いしたい。次代を担う学生が就職難で巷に溢れている。日印、アジアのガッツな学生や30歳前後の若者も採用し磨いて欲しい。インド人学生も道理が理解できると勤勉で忍耐強く働く国民だ。

(B) 乳幼児の健康管理と人材の登用

インドの飲料水の確保と下水道整備は喫緊の課題だ。トイレ・メーカーの“TOTO”や“INAX Corporation”等は衛生面の教育も兼ね各界とタイアップしてインド各都市の下水道面でも寄与できる。ある児童は生活用の水汲みで登校できない。“ビハール州ニーマ村に関西の学生が学校を建設”した（Y.夕刊2011.2/18）と。

ユネスコでのエピソードがある。“文字が読めない母親が白い農薬をミルクと間違え乳児に与え死亡した”。インド各州政府は州の経済の発展を担う児童に学習機会を増やして欲しい。ユネスコも世界寺子屋建設を実施しているが、児童の識字率と衛生面で日印両政府の更なる支援を願いたい。

インドは、中国・ロシア・パキスタン・アフガニスタン・ネパール・バングラデシュ・ASEAN等の諸国の動向に鑑み危機管理し、同時に世界の国々に多極的外交を展開する。“Overseas-Indians”は、約3000万人。在外インド人を護り展開しているインド。国防と危機管理は日本政府最大の任務。日米条約を機軸に周辺国と敵対関係でなく、日本が率先して肌理（きめ）細かい連携を更に図る時代。グローバルな視点で健全な平和国家観を堅持する人材を求めている。

日本の企業には、有為な人材がいる。更に地球的規模の災害に備える人材の登用と国際社会に通用する人材の確保が第一、氷河期にある優秀な学生を採用し実学を教え、埋もれた70歳を超えても働けるガッツな人を登用。地方公務員や企業の退職者をボラバイト〔注2〕し、労働人口とする時代だ。国の内外の情報を見逃さないネットワーク構築ができる人材の確保が急務。“fail to Safe”を常に考える人材でもある。

(C) 日印の語学交流－家族の絆

正式にはインド共和国発足62周年（共和国記念日：1950年1月26日）の年。インド大統領が同国民にメッセージを贈った。“India hopes relations with Japan realize true potential”(JT.Jan.26.2011.写真）と題する在日インド大使館のサンジャエ・パンダ代理大使の記事が掲載された。インド大統領やマンモーハン・シン首相は、次世代を担う青年・女性層にも希望のメッセージを贈っている。

インドは、わが国と戦略的パートナーシップの関係にある民主主義国家である。この認識に立ちアジア諸国の発展と生活力の向上を図る基本戦略を更に強化する。先のアジア・太平洋戦争でアジアの国々に甚大な被害をもたらした枢軸国

The Japan Times

REPUBLIC DAY OF IN

ndia hopes relations with Japan realize true potential

であることを夢寐にも忘れてはならない。

日本の次世代を担う学生がアジアへの歴史認識も学習する時。言葉足らずの無責任な為政者を偶に見る日本。不満を持つ青年や女性層が立ち上がりチュニジアや大国・エジプトが大統領を更迭した。日本の若者は不満をデモにも転化できないし付き合い・対話下手。伝統的地域社会に亀裂が生じ無縁社会の局面を呈している個人主義の日本。でも愛する日本。引っ込み思案も返上したい。アジアの次世代と世界を語る時代だ。

日本はインターネットの普及で個人が殻に閉じこもり、我慢できない小学生や幼児が増加している。インド社会は、幾世代もの家族が同居し家族の血縁、地縁は大事な基盤だ。貧困で自立出来ない面もあるが海外に進出の家族も含めてインド人の家族思いと絆は固い。

日本社会は、核家族の中で家族の絆が薄れ、大会社は終身雇用制に終止符を打ったが、帰属意識の強い忠誠心と絆で成り立つ日本社会。伝統的雇用形態が崩れるデメリットを再考しては如何か。

毎年３月、“神戸国際交流フェア”を開催している神戸。阪神・淡路大震災時に外国人の被災状況の掌握ができず対応も遅れた。日頃から外国人と市民との交流・絆が大事と今年で15回目となる。

この４月から小学５、６年生にも英語教育が導入される時代。日本政府は、現役大学生の10%位を毎年、インドを含めて世界に留学させるとか学生の背中を押して欲しい。交流は平和への対話の窓口。更に低利の奨学金で低所得の子弟が海外留学できるシステムの導入を文部科学省・財務省に願いたい。

『インドから英語下手に悩む日本人にエールを…古屋裕子さん』（A.2009.3/23）が紹介された。筑波大学で学び、「大好きなインドで働きたくなった」とインターネットで就職活動。挫折感を克服しながらムンバイの英文校正サービス会社で働き本も出版した人だ。

日本は労働人口が更に減少。アジア、世界から外国人が来る。商取引や犯罪等も含め摩擦は増加。日本の警察官、医者も語学が出来ないと忽ち困窮する。語学教師の育成、多様な国際理解も含めて国家の大計を願いたい。

日本の英語教育に関して総領事が加古川市で、「日本人は長期に英語を学んでいるが生徒がチョッと間違えると、教師はすぐに指摘。インドでは、まず良く出来ましたと褒める。インド人はインド英語を話す。実学の日本英語を話す教育を取り入れては！」との発言は至言である。

(D)　森林を守り 児童を守ろう！

アジア開発銀行（ADB）が、２月８

日「米国最大のカルフォルニア州公務員退職年金基金（カルパース）を含む世界の12の公的年金基金と共同で地球温暖化防止に役立つアジアのインフラ事業に投資するファンドを年内に設立する」ことを発表した。(シンガポールKD：2011.2/9.K)

2011年は、「国際森林年」。人材も樹木も計画を立て多くの手間暇をかけて育てねばならない。発達段階の児童に手を抜いた国家は歪な発展をする。世界に通じる人材発掘と国連に“世界森林維持管理機構”を樹立してはどうか。100、1000年後の世界と子孫の為に何が出来るか。何をしてはいけないかが問われている。崖っぷちに立っているのだ。「京」を計算できるスーパーコンピューターも早く稼動さし最先端技術で人類に役立てて欲しい。

インド、アセアン諸国のエネルギー消費量は年々、急増。先のADBの投資対象はインドも含めた地域のエコ対策にも関わる。あと２年の期限となった京都議定書のCO_2排出量も見逃せない。日本はインドの発展の負の課題を回避できる技術力がある。

“Save the Children, Save the Globe, For the future Generations”

Ⅱ　カーストと指導者
膨張するインドの諸課題

(A)　インド女性の人権と地位の向上

インドの豪華な結婚式は有名。女性側両親が男性側にDowry（持参金）として、多額の現金、衣類、宝石や物資〔時には牛などの家畜〕を納める習慣がある。1961年にDowryの授受は国内法では違法としたが世紀を跨いで受け継がれ、伝統に縛られたインドの両親は娘可愛さから慣習となっている。花嫁側家族の負担は重圧。Dowryが少なくて、男性側家族から結婚後いじめを受けることもある。女性への虐待や差別は許されない。“Indians jilted wives rue expat* grooms”という記事が目に付いた。（JT. Dec.23.2010：筆者要約翻訳）。

花婿との結婚写真額を手にした憂鬱な顔をした花嫁だ。パンジャーブの小さな村で盛大な結婚式をあげた。結婚した彼女が彼に触れたときに夫が彼女を拒否した。一週間後、元々カナダに住んでいた夫は、ビザの書類を送ると約束してモントリオールに帰ったまま、未だ書類は届かないしインドに帰国もしない。

花嫁が120通の手紙と500回近い電話をしたが、彼は動かず、だんまりを決めている。22歳の彼女は余りの悲しさで２年前から慢性のうつ状態に。インド人の相談・解決にあたるNGOのコメントとがある。花嫁から多額の金品を手に入れると直ちに逃げ去る花婿もいると。

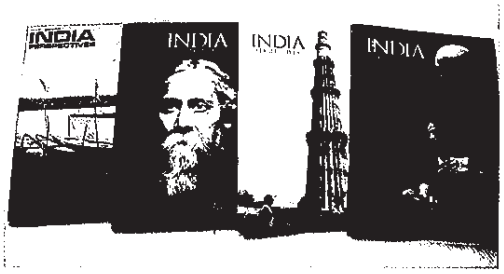
インド訪問時、たまたま現地新聞に結婚相手を募集する大々的な広告欄を見つ

India's jilted wives rue expat grooms

けた。様々な個人情報が提示されていた。このような詐欺事件は、日本でも稀に週刊誌や新聞を賑わす。相手を見抜く力が我々にも要求されている。

国連は、2011年女性のための4国連機関を統合し“UN Women”〔ジェンダー平等と女性のエンパワーメントの為の国連機関〕を発足させた。インド国内法では、女性の教育を受ける権利や就職の機会均等は保障されているが厳しい壁もある。

『INDIA PERSPECTIVE』*には、ファッション、デザイン等、各界で活躍する華やかな女性が登場している。女性の経済的基盤が安定すると、10年余の歳月の中で女性の地位の向上は大いに期待できる。政府の取り組みは担保できる範疇にある。インドの良識に期待したい。



(B)　　指導者の姿勢

多様性の中の統合、他民族国家、22の公用語。巨万の富裕層と最貧困層の共存社会。インドの秘めたる可能性は、職業カーストによる差別が並存する中で、低カーストも含めた人材を、如何に社会の指導者に育成・登用するかの英断である。新しいインドの発展は、私心を捨てた国家指導者や聖職者、巨大企業のTOPの他者への高度な奉仕の精神にかかる問題でも有る。

“絶対権力は絶対に腐敗する”との英国・アクトン卿の言葉がある。インド高官が「謙虚さ、自己変革と他者に奉仕する精神」を堅持することにより“興隆する大国インド”が“民衆繁栄の国家”になるに違いない。

(C)　　活字文化の興隆に光を！

インドは、ヒンドゥー教を中心に、イスラム教、ジャイナ教、シク教、キリスト教、仏教なども含めて、各民族の宗教が全土に共存する。

約3000年前、釈迦一族の指導者・釈尊により、カースト（バラモンを頂点とする支配体制）に光明を見出せなかった民衆が仏教に未来を託した。釈尊の獅子吼は、巨大な土着宗教・婆羅門教に画期的な変革を迫った。釈尊の思想と行動は、北伝仏教(大乗教)・南伝仏教(上座部)として他国に伝播したが仏法史観で説く正法・像法時代を経てインドから消滅した。

だが、民衆が差別と難行苦行の婆羅門教に疑問を持ち、新思想・仏教へ回帰した事実。アショカ、カニシカ王時代を経て、人間解放の波はインド亜大陸からアジアに東進した事実。釈迦仏教が、A.D.500年を境にイスラームの進撃で仏教寺院がインドで破壊される頃には、既に燃えつき仏教的精神支柱は形骸化しヒンドゥー教に併呑されていった事実から多くを学ぶことができる。

阪神・淡路大震災後、被災されたイン

ドの有識者と5年間、数百時間にわたり対話・交流したことがある。漠たるヒンドゥーは生活そのものだ。婆羅門教や現在のヒンドゥー側から見れば釈迦は、インドの神の一つにしか観ないが、釈迦を生んだインドは、仏教継承国・日本に好感を持っている。

堂々とインドで生活を維持するには、ヒンドゥー以外の宗教に属する人は、生活習慣の違う、いかにヒンドゥーとお付き合いをするか、交流するか。敵視せず粘り強く隣人として生き抜かねばならない。多様な価値観のインドは何でもありだ。各地のヒンドゥー寺院と共に数千年の柵に耐えたインド人のDNA、忍耐力には及ばない。イスラーム、キリスト、ジャイナ等もヒンドゥーとの地域的接合を大事にしている。

宗教のようで宗教的でない職業的横断線・カースト生活法が網の目のように根付いている。インド人自身も、宿命と諦めるか。活字文化の時代、教育を受けて向上の人生を切り開くか。家族の明暗の分岐点が眼前にある。

インドを代表する学術・文化機関であるインディラー・ガンディー国立芸術センター主催の研究の国際セミナー「鳩摩羅什—哲人そして預言者」が、2月3日～5日、ニューデリーで開催された。釈迦仏教の最高経典『法華経』を初めとする経典の漢語訳に貢献した偉業と最新の成果を伝えるセミナーだ。

インド文化アカデミー理事長のローケーシュ・チャンドラ博士初め、東洋学術研究所の川田洋一所長等が発表を行った(SP:2010.2/15)。釈尊の行動は世界宗教として、燦然たる平和思想・哲学のジャンルに大きな足跡を留めた。

仏教を俯瞰すれば釈迦教団の弟子たちにより結集された経典は、鳩摩羅什*ら幾多の名翻訳によりシルクロード〔海・陸〕の交易回路で波及、仏法東遷の終着点は日本・奈良。2010年は奈良遷都1300年祭にあたり世界遺産の保護等に取り組む㈳日本ユネスコ協会連盟はシルクロードの終点・奈良で全国ユネスコ運動大会を開催した。

日本政府は2010年を「国民読書年」と定めたが、鳩摩羅什らの功績が、その後の翻訳の歴史に光を放った如く、日印両政府は活字文化に力を入れて欲しい。釈迦の経典や、その存在が光る最古の文学と言われるヴェーダー文献はインド文化の象徴であり、今日的意義は多大である。

Ⅲ ガンディー思想の復権！

インドは13世紀からムスリムの支配下に。その後、大英帝国のインド進攻。インド亜大陸に遍在するインド藩王国は東インド会社、インド提督の巧みな交渉により産業革命を遂げた大英帝国の植民地政策に迎合した。インドの民衆は大英帝国とバラモンを頂点とするカーストの漆黒の闇に、息を潜めた。

1月30日は、独立の父・ガンディーがヒンドゥー教徒・ゴッドセーの凶弾に倒れた日。この日『ガンディー』*（B.Rナンダ著、森本達雄名城大学名誉教授翻訳＝当協会顧問）の大著が発刊された。世界

この数分後、銃弾に倒れる（「東京富士美術館」図録より転載）

13カ国語に翻訳されている名著の初和訳である。実に5年の歳月をかけたガンディー本の集大成（第三文明社刊）である。

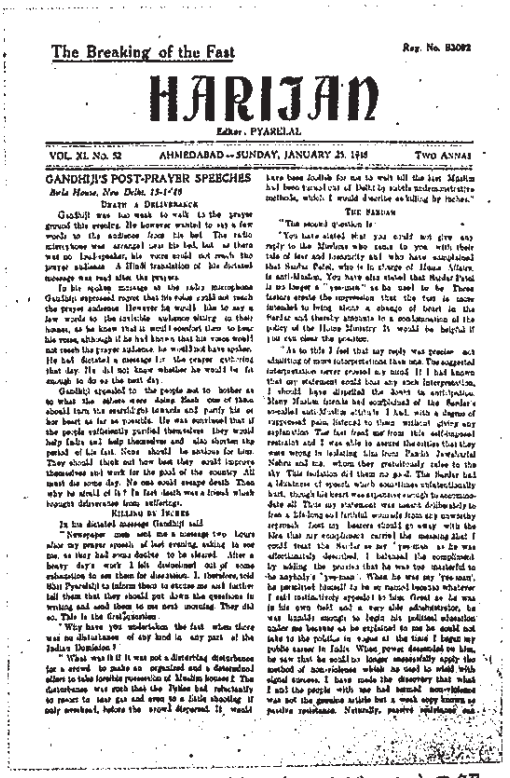
漆黒のインドの民衆に光を当てたガンジーの思想と行動は、ハリジャン（神の子）を守り塩の行進*、非暴力運動に見られるように植民地支配下のインド民衆の内面を喚起した快挙である。民衆を教育し心に光を点したガンディーは、ネルーと共にインド独立への一大変革を成し遂げた。（表紙：山田）無辜のインド民衆の眠りを覚醒、「人権と希望の光」を放ったガンディーの思想と行動は、今もインドの底流に確かに流れている。

経済発展が進み、生活が豊かになればなるほど、"ガンジーの「知足の精神」"〔注3〕を学ぶ時期である。飽食と自己中心的欲望渦巻く現代社会への警鐘と受け止められるか否かが、今後のインドの民衆にも求められている。節度を重んじる社会、太った豚となるか痩せたソクラテスとなるか。私達にも問われている。

ガンディーの言を体するナンダ博士*のエピローグでの言葉は「ほんとうの敵は、われわれ自身の恐怖心や、欲望や、自己本位である。われわれは他人（ひと）を変えようとするように、自分自身を変革しなければならい」と。隗より始めよ。先ず自分なのだと猛省もする。

Ⅳ 人間復興の潮流

戦後、インドに新しい仏教の萌芽が出た。日本山妙法寺・藤井日達氏の流れも



The Breaking of the Fast

Reg. No. B3092

HARIJAN

Editor : PYARELAL

VOL. XI. No. 52 AHMEDABAD — SUNDAY, JANUARY 25, 1948 TWO ANNAS

GANDHIJI'S POST-PRAYER SPEECHES

Birla House, New Delhi, 15-1-'48

DEATH A DELIVERANCE

Gandhiji was too weak to walk to the prayer ground this evening. He however wanted to say a few words to the audience from his bed. The radio microphone was arranged near his bed, but as there was no loud-speaker, his voice could not reach the prayer audience. A Hindi translation of his dictated message was read after the prayers.

In his spoken message at the radio microphone Gandhiji expressed regret that his voice could not reach the prayer audience. Reverse he would like to say a few words to the invisible audience sitting in their homes, so he knew that it would comfort them to hear his voice, although if he had known that his voice would not reach the prayer audience he would not have spoken. He had dictated a message for the prayer gathering that day. He did not know whether he would be fit enough to do so the next day.

Gandhiji appealed to the people not to bother as to what the others were doing. Each one of them should turn the searchlight towards self, purify his or her heart as far as possible. He was convinced that if the people sufficiently purified themselves they would help India and help themselves and also shorten the period of his fast. None should be anxious for him. They should think out how best they could improve themselves and work for the good of the country. All must die some day. No one could escape death. Then why be afraid of it? In fact death was a friend which brought deliverance from suffering.

KILLING BY INCHES

In his dictated message Gandhiji said:

"Newspaper men sent me a message two hours after my prayer speech of last evening, asking to see me, as they had some doubts to be cleared. After a hearty day's work I felt disinclined out of some exhaustion to see them for discussion. I, therefore, told Shri Pyarelalji to inform them to excuse me and further tell them that they should put down the questions in writing and send them to me next morning. They did so. This is the first question:

"Why have you undertaken the fast when there was no disturbance of any kind in any part of the Indian Dominion?

"Was it so if it was not a disturbing disturbance for a crowd to make an organized and a determined effort to take forcible possession of Muslim houses? The disturbance was such that the Police had reluctantly to resort to tear gas and even to a little shooting if only somehow, before the crowd dispersed. It would have been foolish for me to wait till the last Muslim had been turned out of Delhi by such undemocratic methods, which I would describe as killing by inches."

THE PERSIAN

"The second question is:

"You have stated that you could not give any reply to the Muslims who came to you with their tale of fear and insecurity and who have complained that Sardar Patel, who is in charge of Home Affairs, is anti-Muslim. You have also stated that Sardar Patel is no longer a 'yes-man' as he used to be. These factors create the impression that the two is more intended to bring about a change of heart in the Sardar and thereby amounts to a condemnation of the policy of the Home Ministry. It would be helpful if you can clear the position."

"As to this I feel that my reply was precise and admitting of more interpretations than one. The suggested interpretation never crossed my mind. If I had known that my statement could bear any such interpretation, I should have dissipated the doubt by anti-pedes. Many Muslim friends had confidential of the Sardar's so-called anti-Muslim attitude. I had, with a degree of suppressed pain, forbidden to them without giving any explanation. The fast freed me from this self-imposed restraint and I was able to assure the entire that they were wrong in isolating him from Pandit Jawaharlal Nehru and me, whom they gratefully refer to the sky. This isolation did them no good. The Sardar had a bluntness of speech which sometimes unintentionally hurt, though his heart was expansive enough to accommodate all. This my statement was meant deliberately to free a lifelong and faithful comrade from any unworthy reproach. Lest my hearers should go away with the idea that my compliment carried the meaning that I could treat the Sardar as my 'yes-man' as he was affectionately described, I balanced the compliment by adding the premise that he was too masterful to be anybody's 'yes-man'. When he was my 'yes-man', he persisted himself to be so carried beyond whatever I said instinctively appealed to him. Great as he was in his own field and a very able administrator, he was humble enough to begin his political education under me because as he explained to me he could not take to the politics in vogue at the time I began my public career in India. When power descended on him, he saw that he could no longer successfully apply the method of non-violence which as used to wield with signal success. I have made the discovery that what I and the people with me had termed non-violence was not the genuine article but a weak copy known as passive resistance. Naturally, passive resistance can

ガンディーは不可触民（ハリジャン）の解放に情熱を傾けた（「東京富士美術館『アショカ・ガンジー・ネルー図録』より転載）

あるが、代表的な二つの運動体を取り上げる。

(A)　新仏教徒運動

第二次世界大戦後、アンベドカール氏（インド憲法起草者/ネルー首相の法務大臣）が釈迦の平等思想の影響を受けヒンドゥー教の差別に苦しむ“Out CASTE”を村ごと集団で改宗、新仏教運動（Neo Buddhist Movement ）を起こしたことである。1951年から1961年に架けて、インドの統計を観ても、仏教徒の数が倍近くなっている。

①アーリャ・ナーガルジュナ・シュウレイ・ササイ（佐々井秀嶺）氏の仏教回帰運動。「44年ぶりに故郷の地を踏んだインドの荒法師」〔A.2009.6/20〕として紹介された。大正大学の一島正真教授が『ナーガ族と宗教』の講演で「BC1500年前頃、アーリア族がインドを征服した際、アーリア民族に徹底抗戦したナーガ族の歴史を紐解いた。

カーストを最初に否定したのは、お釈迦様」、「その後、繁栄したナーガ族を味方に付け仏教は広まった」と示した。この末裔であるアンベードカル博士が1956年に不可触民やナーガー族と共に仏教に集団改宗。佐々井氏はその後継者だと、報じた。(CGN.2010.1/28.要約)

②佐々井氏の運動を支援する団体は、大日如来南天鉄塔記念協会で、2009年2月14日発会。中インドのナーグプル近郊のマルセル遺跡とシンプル遺跡〔仏教・ヒンドゥー教が過去に栄えた〕調査や維持運営を援助することを目的とする真言宗バージョン。佐々井氏はヒンドゥー教徒を一村丸抱えで幾つかの村々で改宗させた人物。同氏が「マルセル遺跡を真言密教に縁がある"南天鉄塔"と考えている」と報じている。〔CGN.2009.2/28.〕

③運動の拠点マハーラーシュトラ州（ナーグプルやムンバイを含む）やチャッティースガル州等を訪問の関西学院大学の野田正彰教授の報告（CGN.2010.3/13）がある。「結婚式、家の新築、小中学の表彰式、あらゆる集まりに佐々井氏の言葉を求めてやってくる。アンベードカルの立像の建つ町の入り口広場に、テントを張り、白服、青いサリーのお婆さんたちが整列、五色の仏教旗をひらめかせ、佐々井氏、僧を先頭に、私達はヒンズー教徒の多い市場を一巡するデモを行った。〔中略〕私の禅定とは戦いの禅定である。学べ、団結せよ、闘争の３つのマントラを唱えれば、希望が湧いてくるではないかと語りかけていた」と佐々井氏の日々の激務を報告している。

④佐々井氏の運動と労苦は克目すべき実績である。只、この一連の新仏教への改宗の人数を、中外日報が1.2億人と報じていることだ。

また、野田教授も「今日、インドの仏教徒は、１億5000万人とも言われている。〔中略〕近年の改宗の動きに危機感をもったヒンズー民族主義者たちは、改宗禁止を提起し、マハーラシュトラ州（指定カーストの多い州）を囲むように、マディヤ・プラデーシュ、チャッティースガル、アーンドラ・プラデーシュなど８州が、既に改宗禁止の法律を可決した。〔中

略〕政教分離を厳しく表明した憲法を無視する各州の動きが起こっている」と報告しているが、インド政府が発表するインド仏教の総人口比率は、総人口の0.8%以内である事から観て、この数字だと10%を超えることになり数字の信憑性が問われる。ただ、あえて言えば、差別化された指定カースト・低カースト層からの新仏教への流れに導いたことは激闘の成果と言えまいか。

(B)　　インドＳＧＩ運動

本年は、『日蓮仏法の未来記』を現実化した仏法西遷―インド広布にかけた池田大作SGI*会長の足跡から50年の佳節。インドの識者等の平和・文化・教育交流面から代表的事例を紹介する。

①アジア初のノーベル文学賞受賞者・タゴールの冠をつけたタゴール国際大学が2006年5月29日、池田博士に名誉文学博士号を授与。"Sujit K.Basu副総長"は"Rabindranath Tagore believed that the purpose of education is to help develop the potential inherent in every individual." "Dr.Sujit Basu also asserted that Soka University,the school founded by Dr. Daisaku Ikeda,is a contemporary version of Tagore's dream."（GSGI.Jan. 2010）の言葉を贈った。

同博士は、世界的歴史学者・アーノルド・トインビー氏と対談。クーデンホーフ・カレルギー博士との対談集も紡がれている。また、国際平和非暴力センター*と有力新聞社・ラジャタスタン・パトリカ（ヒンディー語紙）がSGI会長に「特別顕彰」を贈った。（Jan.20.2008:ニューデリー、ジャイプル.SP：2008.12/9）。国連デーにはインド国連協会*が人類の連帯への貢献を讃え、SGI会長に第一号の『平和・国際理解賞』を授与。（2010.10/24.ニューデリーのアショカ・ホテルSP:2010.10/24）。また"MOTILAL BANARSIDASS PUBLISHERS"（インド思想・サンスクリット語書籍の名門出版社：ニューデリー.1903年創立）がSGI会長に初の"THE FIRST MLBD INDOLOGY AWARD（MLB=インド哲学賞）"を授与し、インド国営テレビのニュースや有力紙「ザ・ヒンドゥー」など新聞4紙がこの模様を報道した。（SP.2011.1/25）

②"自然との対話写真展"を鑑賞した弁護士Ms.Tripti Tandonの手記"The Mentor-Disciple Relationship :The Starting Point for Action"（師弟：行動の出発点）を紹介する。

"In March 2003,I attended my first meeting of Bharat Soka Gakkai and began practicing Nichiren Buddhism, a philosophy that teaches the sanctity of life and promises happiness for humankind. Six months later, I had my first encounter with Daisaku Ikeda, president of Soka Gakkai International, through his photography exhibition, A Dialogue with Nature, held in New Delhi./ Alongside, Mr. Ikeda's caption read, 'Every seed, no matter how small, has the potential to bloom. So it is with people.'Experiencing a professional law at that time, the image filled me with renewed confidence.

From then on, I started to understand Mr. Ikeda's philosophy, and my life opened up toward the path of self-improvement, victory and growth." 高学歴で非政府機関の敏腕弁護士の仕事は多忙。HIV感染者、同性愛者、麻薬利用者等社会的弱者の側に立ち種々の活動に取り組み、彼女は法的に阻害された基底層の人々に光をあて2010年に2つ訴訟を勝ち取った(『SGI Quarterly』Apr.2010/daisanbunmei Jan.2011)と。人間主義の行動が社会に光を放った事例である。

「芳烈なタゴール精神の香り」〔注4〕の中で、クリッシュナ・クリパラーニ博士*が「ただ、私の宗教は『人間のための宗教』だと、タゴールは言っておりました」と。また、クラーク・ストランド氏*も「仏教の基本的な考え方は人間主義の観点が大事、人間の幸福のためにある」(注5)と論及したが、ヒンドゥー、イスラーム、キリスト教を繋ぐ人間文化融合の「架け橋」に仏教(BSG)がなりうるかも知れない。

V 人間は、権威の束縛、欲望の虜から自己変革が可能か

①国際協力銀行が2010年度に製造業企業を対象に実施した海外投資アンケートによると、今後、約10年間で有望な事業の展開先では、インドが中国を抜いて首位に浮上。今後約3年間の投資先は、中国が首位を守るが、急速な経済成長に伴う人件費上昇への危機感が強まる」(K.2011.1/5)と。インドへの期待は、益々、膨らむ。

1月26日、インド国旗が、インド総領事公邸に翻った。国旗掲揚の後、総領事が大統領メッセージを朗読。多様な問題点を抱え、大躍進するインドの指針が示された。力強い大統領のメッセージの思いが、誇り高きインド人の心に届いたに違いない。

この日の夕刻、"第62回インド共和国記念レセプション"が兵庫県公館において開催された。冒頭、同総領事は、「建国の父・ガンディーへの熱き思いに触れながら、本日のレセプションは、ガンディー主義に則りアルコール類はお出ししませんが…」と爽やかに切り出した。

関西在住のインド人の長年の尽力を讃え、発展する世界最大の民主主義国家インドの現況を数字を挙げ「インドと日本の友好的戦略的パートナーシップ」の現実に言及した。

井戸敏三兵庫県知事が来賓代表で演題に立った。昨年12月、調印も含めて訪印。直近インドの話が提起された。筆者は、このセレモニーに開会時間より大分、早めに会場に到着した。総領事は各部署で行われている総領事館員、余興を演じるシタールの演奏者、歌手やインド料理の経営者にきめ細かな確認と指示をしていた。「民主主義とは注意を払うことである」との宗教社会学者のR・Nベラー氏*の言葉が総領事の行動から想起された(注6)。売れっ子の作家であるが、微塵もそんな素振りは見せない外交官だ。

②ジェトロ・ニューデリー事務所の大殻宏氏が答えた。「12億の総人口構成の中で、25歳以下が55%、30歳以下が60%

で若者の国だ。〔中略〕長期的に、労働者と購買層が増え続けることを意味する。〔中略〕家電製品を購入する中産階級は、毎年2000万人以上が増え、この数はマレーシアの人口に匹敵する」(F.S2011.2.12)と。

この若者と女性の地位向上こそが、インド発展のカギとなる。シン首相も中国・温家宝首相との面談の折も、この話題を提起している。国民から信望の厚いシン首相のように最下層からTOPの座に躍り出た政治家が現実にいる。「頑張れば、誰にでも好機あり」との“Bottom Up System”は素晴らしい。

低カーストにも選挙、被選挙権があり政権が交代し民意が活かされる体制が樹立されている。だが、経済発展の中で、この世に生を受けた子どもが出自にとらわれず、差別されず活き活きと生を終えるような社会的地域的システム構築がインド社会には、更に要請されている。

次は5千年を跨ぐ課題、「職業カースト」の差別意識の斬新的変革が、どのように進捗するかである。学問を志す最下層の学生に特別枠で大学に入学できるシステムも現代インドの英知が生んだ証だ。だが、その根底に顔つき、体形、宗教の違い等々で、子供達が他の子どもを排除し差別する意識の変革である。一挙には行かないが、教育的取り組みが大事である。

ユネスコも差異による差別を指弾する。一人一人の人間には、個性があり全てに違いがある。その違いをありのまま、認める寛容の精神が前提に無くてはならない。“子どもの権利条約”が制定されているが、排除と差別の論理から人間の尊厳を守る時代が到来している。ユネスコは識字教育の改善に取り組む。かってインドで見た瞋恚の眼差しは、やるせない諦めの中で生きる幼い子供達であった。未来を担う子供達に、悲惨な人権無視の世紀に回帰させない人間の勇気と良識が要請されている。

食料も輸出国から輸入国に転換した〔『選択』２月号〕。総人口15億に制限する政府の動向も大事である。“成長インド高官腐敗”の見出しが目に入る。「携帯電波取引疑惑でＲ通信相が辞任。高層マンション分譲に伴い親族に便宜を図った州の首相が辞任」(A.2010.11/19)。日本にも同様の事件があるからインドを責めはしない。現実の満足に感謝をできない人間の性がある。

クロアチア・ドゥブロブニクの言葉に“OBLITI PRIVATORV PVBLICACVRATE”(私事を忘れ、公の仕事に奉仕せよ）がある。権力の腐敗を廃絶する為に裕福な商人から選ばれた総督（国のTOP）を選んだ。インド国家に即、適用できないが、ドゥブロブニク国家指導者の団結と英知が生んだ統治方式だ（ＮＨＫ世界遺産)。私事を排して、大英帝国に非暴力を唱え、塩の行進を起こしたガンディーは、自己管理ができた世界に誇る稀有の指導者と言えまいか。

③“Incredible India”を掲げ『India Mela（インド祭）2010』が、昨年11月13日と14日、神戸メリケンパークで開催された。2007年９月４日、“The Festival of India”がポピュラーミュージック界のトップ歌手、

“Ms.Penaz Masani” を招聘（神戸文化ホール.主催：インド大使館、総領事館等）以来のイベントだった。メーラーは、通常は東京開催。総領事の強い熱意に関西在住のインド人や日本人が応えた。

井戸敏三兵庫県知事、矢田立郎神戸市長が来賓祝辞を述べ、5万人余の来場者は舞台での催しに拍手し、多様なインド料理に舌つづみを打った。“インディア・メーラー”は2011年も開催される。

インディア・メーラーの会場にて

さて本国インドは日本の国土の約9倍、人口は約9倍の多民族国家。なんでも有りの国だ。早急は変革は求めないが、インド興隆の中で、識字率も向上し政府も最底辺に光を照射している。温かい言葉のオブラートも要求される。

ガンディーは非暴力闘争の中で、西欧的なるものとバラモンの権威に言及した。大英帝国からの独立後、外圧が無くなり政教分離後も残存したカーストに心痛めた。釈尊は「権力・聖職者に潜む魔性＝他人を自在に動かしゆく魔性」が我らが人間生命の中に存在すると説いた。ガンディーがバラモンと為政者に、ロシアの文豪・トルストイは、ロシア正教会の聖職者、ガリレオは冷徹なローマ・カトリック教会の聖職者の仮面を看破した。「民衆は聖職者や政治的指導者に逆らえないのだ。ひれ伏すのだ」との傲慢を見抜いた。

現代インドはこのような前車の轍を踏むことは無い。偉大なアソカ大王の法勅に多くの教訓を学ぶことが出来る。カリンガ戦争の悲惨な地獄を見た大王は仏教に帰依し各地で法（Dharma）による政治を施した。チャンドラ・グプタ以来、インド最大の統一国家の誕生であった。インダス文明に源流をもつインド民衆・女性・青年の英邁な行動が、新しき時代を拓くに違いない。

インド綿花の最大の集積地であった神戸はインドはじめ多様な文化を受け入れた進取の地である。神戸は最先端の高度医療産業都市構想（約31億円）を推進している。雄県・兵庫には㈶地球環境戦略研究機関APNセンター、世界的な㈶高輝度科学研究センター（Spring 8）や、（公財）ひょうご21世紀研究機構もある。日印が官民団結し更なる立地条件を整えば、神戸・兵庫・関西の地は教育・科学・医療面で世界に貢献する発信基地となり、人間文化の揺籃の大地、平和の要塞となるに違いない。

（2011.3.1記す）

＜団体・語彙・人物・注記＞

☆新聞社名表記：活字文化の重要性から新聞各紙から多々引用。紙面の関係で「朝日,毎日,読売,日経,産経,神戸,聖教新聞,時事通信社,共同通信社,中外日報,THE JAPAN TIMES.fuji産経ビジネス,グラフSGI.第三文明社」等は、「A,M,Y,N,S,K,SP,JJ,KD,CGN,JT,fSB,GSGI.DB」と簡略。

〔注1〕世界銀行〔昨年6月の予測：3.1～3.3%〕(M .N.K2011.1/13夕刊)

〔注2〕「新語：ボランティア+アルバイト」

〔注3〕:『ガンディー知足の精神』(人間と歴史社.名城大学名誉教授･森本達雄著.)(老子「知足者富」、身のほどを弁え貪らない)。(SP .2008.5/20)

〔注4〕:『心に残る人々』(角川書店.池田大作著.1981.11/18.192頁.195頁)

〔注5〕スラーク・ストランド：(世界的宗教ジャナリスト/第三文明社.SGI&the Birth of Modern Religion:今井真理子訳)

〔注6〕R.N.ベラー：『善い社会（The Good Society)』(みすず書房.中村圭志訳)

☆UNIFEM〔国連女性開発基金〕、OSAGI〔国連ジェンダー問題特別顧問事務所〕、DAW〔国連女性の地位向上部〕、INSTRAW〔国際女性調査訓練研修所〕(2011.1/1発足)

☆クリシュナ・クリパラーニ氏：英国留学.弁護士。ガンジーの反英運動に参加、投獄。1954年、インド国立文学院の創設者の一人。タゴール研究家。上議員議員であった。

☆SGI:Soka Gakkai International世界192カ国、1200万人に及ぶ在家集団。「SGIホームページ参照」

☆国際平和非暴力センター：インド北部ラジャスタン州、非暴力による平和教育と文化振興を目的として1983年設立.

☆インド国連協会：1946年創立されたNGO

☆塩の行進：ガンジーによって提唱された反大英帝国運動。植民地支配下のインドで塩を採取/販売等の行為が禁止されていた。

☆『ガンディーインド独立への道』:(第三文明社.B.R.Nanda著.森本達雄訳.2011.1/31.725頁引用)

☆「ヒンディー、ヒンドゥー、ガンディー、イスラーム」と表記した。引用した文献がヒンヅー、ガンジー、イスラムと表記の時は、著者の表記を記載。

☆北伝仏教〔大乗経〕、南伝仏教〔上座部・小乗経〕は大と小の表記を長年使用。近年になり小の表記が差別との考え方もあり上座部と併記。

☆大東亜戦争、太平洋戦争と過去の表記は記述されていた。近年の研究に基づき、「アジア・太平洋戦争」と表記。世界大戦に及ぶ時は大戦と。

☆B.Rナンダ氏（B.R.NANDA)：ネール記念館元館長、近現代インド史研究の世界的権威者。1958年の原著『ガンジー』は英国、米国等の英語圏で版を重ね、仏語、スペイン語など13ヶ国語に翻訳され、インド『ガンディー・マルグ』『イギリス・タイムス』等の主要新聞が書評掲載。

☆N・ラダクリシュナン：インド国立ガンジー記念館前館長。ケララ州生.マハトマ・ガンジー非暴力開発センター記念館館長。『人道の世紀へ--ガンジーとインドの哲学を語る』(第三文明社.池田VSラダクリシュナン対談集)

☆釈迦：偉大なる仏を指す時は釈尊。一族、教団を指すときは釈迦と表記。

☆*鳩摩羅什：Kumaraji,AD344～409年、中国後秦代の卓越した役僧。

☆『アショカ・ガンジー・ネルー展』(東京富士美術館編集.1994.10/19/p.90 p.106 写真を転載)

☆THE JAPAN TIMESの見出し、expat*と表記されているがexpand。

<参考資料>
『インド思想史』〔東京大学出版会.早島鏡正、高崎直道、原実、前田専学共著 2009.2/27〕
『新版・国際関係』(世界思想社.家正治.2000.1/30)
『カーストと平等性―インド社会の歴史人類学』(東京大学出版会.田辺明生著.2010.2/22)
『ガンディーとタゴール』(第三文明社レグルス文庫.森本達雄著.1995.6/26)
『激動するインド世界』(国立民族学博物館・毎日新聞2009.3/19)
『日蓮大聖人御書辞典』(聖教新聞社.池田大作監修.創価学会教学部編.1976.11/18)
『中外日報』(京都市2006.1.1 ～ 2011.3.1)〔文中：CGNと略す〕
『聖教新聞』(東京都2006.1.1 ～ 2011.3.1)〔文中：SPと略す〕
『THE JAPAN TIMES』(東京都2010.1.1 ～ 2011.2.16)〔JTと略す〕
『グラフSGI』(聖教新聞社2009.1.1 ～ 2011.2.1)〔文中G・SGIと略す〕
『第三文明』(月刊紙：DBと略す。2010.1. ～ 2011.3.引用2010/12/1号)
『ヒンドゥー教』(みずず出版.NiradC.Chaundhuri著.森本達雄訳.1996.5/16)
『ヒンドゥー・ナショナリズムの台頭―軋むインド』(NTT出版.2000.2/27)
『インド現代史―独立50年を検証する』(中公新書.賀来弓月著.1998.7/25)
『池田平和哲学―対立を超える人間力』(朝日出版社.佐伯伸孝著.2010.1/2)
『ガンジー・キング・イケダ』(第三文明社N.Radhakrishna著.栗原淑江訳.2011.3/16)
『SGIと世界宗教の誕生』(第三文明社Clark Strand著.今井眞理子訳.2011.1/26)
『池田大作世界との対話 平和と共生の道』(第三文明社・東洋哲学研究所編2010.11/30)
『現代に生きる法華経』(第三文明社レグルス文庫.菅野博史著.2009.8/1)
『日本仏教の再生を求めて』(展望社.広瀬広居著.2005.5/18)
『日蓮仏教の思想的展開』(東京大学出版会.松岡幹夫著.2005.6/15)
『法華経の成立と思想』(大東出版社.勝呂信静著.1996.7/30)
『東洋学術研究・インドの精神と現代』(東洋哲学研究所. '05.VOL 44/No1)
『キリストとイスラム教』(新潮選書.ひろさちや.1945.4/30)
『池田大作師弟の精神の勝利』(鳳書院.N・ラダクリッシュナン著.栗原淑恵江訳.2000.3/16)
『21世紀への対話(上・下)』(文芸春秋.池田大作・アーノルド・トインビー著.1975)
『インド宗教の坩堝』(勉誠出版.武藤友治著.2005.3/1)
『インド仏教思想史』(大蔵出版.S.ラーダクリシュナン著・三枝充悳／羽矢辰夫訳.2001.7/30)
『インド仏教変異論―なぜ仏教は多様化したかー』(大蔵出版.佐々木閑著)
『中村元選集〔決定版〕〔春秋社全38巻中。8 9 10 11 12 19 20 21 29 31 32巻〕
『仏教とジャイナ教』(平楽時書店.長崎法潤博士古希記念集刊行会編)
『インド・複合文化の構造』(法蔵館.長野泰彦・井狩弥介編)
『インド哲学史』(平楽寺書店.金倉圓照著.1997.4/10)
『アショーカ王』(平楽寺書店.塚本敬祥著.1973.2/1)
『アショーカ王伝』(法蔵館.定方晟著)
『The Living BUDDHA』(New York・WEATHERHILL・Tokyo Publishers of Fine Books on Asia&thePacific. Daisaku Ikeda translated by Burton Watson 1976)
『BEFORE IT IS TOO LATE』(Kodansha :Aurelio Peccei &Daisaku Ikeda)
『INDIA』(Ministry of External Affairs,New Delhi VOL24 NO.1,2,3,4/2010)
『平成23年当初予算の概要』(神戸市『2015ビジョンの実現』2011.2/8)

キングダム・オブ・ドリーム

エアインディア西日本地区
旅客営業部部長

高橋　至

先日、インドから１通の電子メールが届いた。「インドに君の友人がいたのを覚えているかな？」という控え目な書き出しは、僕が記憶している彼に間違いなかった。最後に彼に会ったのは、７年前か、あるいはもっと以前かも知れない。

当時、ムンバイには「インドホテル公社」が運営するホテルが２つあった。彼はそのひとつのロビーマネージャーだったが、僕が仕事で何度か滞在するうちに、親しく話をするようになった。ロビーマネージャーと言っても、暮らしは決して裕福に見えなかった。僕は何度か彼の自宅に招待してもらったが、そこはムンバイの騒々しい下町にある古いアパートだった。

建物の外に取り付けられた階段を上って、確か３階だったか、ワンルームマンションほどの広さの部屋に家族４人で暮らしていた。家具らしいものはあまりなく、夜には全員が石張りの床に寝ると言っていた。シャワーしかないバスルームと、洗面所兼用の流し台があるキッチン。テレビはないし、電話も近所の親戚と共用、もちろんパソコンも車もない。

ある日、苺を買ってきたと言って、苺を薄くスライスして出してくれたことがあった。インドでは苺は高価である。日本では苺を丸かぶりするなどとはとても言えず、少し申し訳ない気持ちで食べた苺のひと切れは、やはり酸っぱかった。それでも、家族４人で仲良く暮らしている姿を見て、決して物質的な豊かさだけが幸せではないのだと、僕自身も幸せな気持ちになったものだった。

その頃からインドでの産業の自由化はさらに加速した。「インドホテル公社」も例外ではなく、ムンバイの２つのホテルはそれぞれ売却された。彼の勤めるホテルは、巨大企業「サハラ・グループ」に買収されたが、ホテルの円筒形の建物の上を巨大ドームで覆うという大工事のため、その後何年も休業を余儀なくされた。

彼は工事の直前までホテルで働いていたが、その後、新しいホテルでの仕事が約束されているのか、それともどこかで別の仕事を見つけることが出来たのか、何も分からないままだった。せめてメールアドレスでも分かればと思ったが、彼の自宅にはパソコンがなかったのを思い出した。僕自身もムンバイに行く機会が

なく、誰かがムンバイの話をするたびに、彼はどうしているだろうか、家族は元気だろうかと心配しているうちに何年も過ぎてしまった。

その彼が、どこからか僕のメールアドレスを探し出したのだろう、電子メールを送ってきたのである。その電子メールには、彼が後にホテルを退職し、インドへの投資を誘致するコンサルティング会社に転職したと書いてあった。そのコンサルティング会社はアメリカにも進出しているそうである。彼はその会社でマネージャーの地位を得て、下町を抜け出し、大きな家に転居した。現在、娘はアメリカの大学に留学中、息子はムンバイのカレッジでＩＴを専攻しているとも書いてあった。

驚いた。勤務先が売却されたからといって、彼の生活を心配することは何もなかったのである。経済成長を続けるインドでは、転職先はいくらでもある。投資コンサルティングという、時流に乗った会社に入れば、待遇はかなり良くなるのではないか。経済の沈滞する日本で僕が同じような生活を続けている間に、彼は大きく出世してしまった。心配してもらうべきは、むしろ僕の方だったのかも知れない。

デリーに駐在する知人にこの話をしたところ、このようなサクセス・ストーリーは今のインドでは当たり前のことらしい。親は教育ローンを組んで子供を留学させる。海外で教育を受ければ、帰国後は有利な条件で就職できるので、教育ローンはすぐに返済できる。借金しても間違いなく返せるので、経済活動がますます活発になるという具合である。インドはもう昔のインドではない。

１月中旬に僕はデリーを訪れたが、あらためてインドの発展を見ることとなった。16年前に初めてインドを訪れた時はさすがにカルチャーショックを受けたが、今回はそれとは違った意味での、第２のカルチャーショックであった。

デリー空港の新第３ターミナルは大きくて近代的だし、市内を縦横に走るメトロの利便性は非常に高い。センスの良いレストランでは、小綺麗に盛りつけられたインド料理を食べることが出来る。歴史遺産と伝統を保ちながら近代的に変化していくデリーは、これからますます魅力的になるだろう。

グルガオンに「キングダム・オブ・ドリーム」という劇場がオープンし、「ザングーラ」というミュージカルの公演が始まった。ミュージカルの筋書きは単純である。悪い大臣に殺害されたマハラジャ夫妻には生まれて間もない息子がいたが、彼は侍従に助け出され、下町で成長し、成人した後に親の仇を討ち、マハラジャになるというものである。ごく普通の筋書きだが、演出が面白い。

有名なボリウット映画の音楽が次々に大音響のサラウンドシステムで流れる中、何列にも並んだダンサーが踊る。大がかりな舞台装置の後ろではコンピューターグラフィックスが流れていく。登場人物を空中に浮かせて輪をくぐらせるというイリュージョンもあれば、天井から

ワイヤーで吊されたダンサーが劇場の空間を飛び回る。

インドでこんなものが見られるとは思っていなかった。ボリウッドのダンスはインドのさまざまな伝統舞踊の動きを基本に生み出されたものであるが、このミュージカルはその伝統を失ってはいない。ブロードウェイのミュージカルを単に輸入するのではなく、インド独自の文化に欧米のテクノロジーを組み合わせている。そのような意味で、このミュージカルは全く新しいジャンルのように思えた。

劇場「キングダム・オブ・ドリーム」の外観

僕が感じている現在のインドの魅力は、たぶんそこにあるのではないかと思う。先進国の技術や文化を単純に取り入れるのではなく、インドの伝統や文化、生活様式と器用に組み合わせてしまうところである。16世紀、ムガル帝国の皇帝フマユーンがペルシャの文化を持ち帰り、その没後、インドとペルシャの意匠が融合したフマユーン廟という美しい建造物が生み出されたが、その伝統は現在に通じているように思える。

ちなみにミュージカル「ザングーラ」はヒンディー語での上演であるが、日本語を含む6カ国語の翻訳をイアホンで聞けるシステムを近々導入するそうである。

また、劇場「キングダム・オブ・ドリーム」の隣には、巨大なフードコートがある。ラジャスタン、グジャラート、タミルナドゥ、ケララなど、各地の建築をモチーフにした屋台で、各地の料理を食べることが出来る。ヴァダやイドゥリー、モモなど、デリーではなかなかお目にかかれない料理もあるので、機会があればぜひ訪れてみて欲しい。

デリーのメトロで面白いものを見つけた。車両の隅に電源コンセントが2つあるのだ。そこには「ノートパソコンや携帯電話用」と書いてある。世界中どこを探しても、こんなものがある地下鉄は他にないはずだ。ノートパソコンや携帯電話の普及が進んでいるという背景があるのだろうが、それを厚かましくも車内で使用したり充電したり出来るようにしてしまうあたりが、インドの独自性ではないだろうか。

これから先、インドがどのように発展していくのか、ますます楽しみだ。まさにキングダム・オブ・ドリーム（夢の王国）だ。

インド総領事館での12年間を振り返って

前・インド総領事館通訳
南波　亘子

大阪船場にあるインド総領事館に1998年5月初めに通訳として勤務し始め、2010年3月末に退職いたしました。その間、アショク・クマール、ヨーゲシュワル・ヴァルマー、R.O.ワーラン、オーム・プラカーシュ、ヴィカース・スワループ氏のそれぞれ個性の異なる5代の総領事にお仕えすることになり、いつの間にか12年余の長い年月が経っていました。実に、この総領事館でインドの方々と直接接しながら一緒に仕事ができたということは、またとない素晴らしい貴重な経験でした。

まず、総領事館全般の業務やスタッフ構成についてご紹介し、私が“通訳”というタイトルで携わった仕事を通して折々に感じたことや、私の観たインド人と日本人の違いに触れ、勤務期間中の重要イベント、それから、最後に近年のインド経済の急速な発展と日本経済の停滞で、日本でのインドの存在感が最近急速に増してきたこと、その影響などを順に述べたいと思います。

日本ではインド総領事館があるのは大阪だけです。その役割は管轄範囲である西日本（沖縄を除く三重県以西）での日印関係の発展ですが、具体的には

①在日インド人などインド国籍保持者の保護、パスポート業務、ビザの発行（領事部）
②経済交流の促進（商務担当）
③文化交流・観光・講演活動（広報担当）

に分けられます。

スタッフは正規館員が10名。トップの総領事はインド外務省高官で、日本国内では大使に次ぐ地位にあります。平均在任期間は3年で、既に大使経験者の場合もありますが、多くは大阪で総領事として勤務の後、各国の大使に転出されます。領事または副領事2名は同じくインド外務省外交官で前記の3分野を分担し、他に、経理担当の特別技術職員、総領事秘書がいます。

その下にローカルスタッフ5名が配置されていて、私が勤めた通訳は、総領事のサポート以外に全体をカバーします。“通訳”は、当初は気楽なポストと考えていましたが、実際は大違いでした。

通訳、翻訳での日常業務のサポート、インド首相･大臣を含む本国からの賓客、代表団の受入れ、日本側の府県/市等との連絡/折衝、インド独立記念日やインド共和国記念事業、日印国交樹立記念や文化協定締結記念事業などの国家的イベントの計画・実施、商務・観光・メディア対応など広報業務、果ては、入国管理局、警察、刑務所などと接触するなど非常に広範囲の仕事に関わることになりました。

総領事館へ通い始めた当初に驚いたことの一つですが、総領事館内で会話や討論の際、英語が飛び交っているなあと思っていると、いつの間にかヒンディー語に変わり、しばらくするとまた英語に変わっているという状況が頻繁におこります。ときにはヒンディー語の代わりにパンジャーブ語であったり、ベンガル語であったり、どんどん変わっていきます。目を丸くしてあっけにとられていたものでした。

数マイル移動すると異なる言語が使われる国に住んでいるインド人の言語能力については定評がありますが、とにかくインド人は議論が好き、おしゃべりです。総領事館内はいうに及ばず代表団来日の際など、会議中は専らインド側の声ばかり聞こえてくるように思えるぐらいですし、移動の車中で議論が始まっては大きな声で喧々諤々、“終えるところ知らず”です。逆に、インド人にとっては、電車の中などで多数の日本人がメールばかり打っていると、不思議そうに例の独特のやり方で首を左右にふるのです。日本人は何故しゃべらないのか、これは異常だと！

インド人と日本人は、非常に対照的な国民性をもっています。“郷に入れば、郷に従え”という諺がありますが、インド人ではこれは多くの場合、無視。特に来日してまだ日が浅い方々の場合、かなり自己主張が強いように思われます。このような行動様式の差は、日本滞在の間に徐々に日本の社会のやり方に慣れてこられるのですが、３年毎に交代なので、ああ、お互いに慣れあえてやり易くなったなと思った頃には帰国され、また新しい方々と初めからやり直しになります。

また、業務の内容も、総領事や構成スタッフによって、入れ替わりのたびごとにかなり変わってきます。

時間の観念に関しては、例えば代表団に随行の際､往々にして予定がずれ込み、計画を調整するのに困りました。インド人随行者は上司に時間ですよと促すことはあまりしませんので、日印の間で悩んだものでした。

それから、仕事の進め方ですが、日本人のようにかなり前から計画的に細部まで詰めてしまうのとは逆に、ぎりぎりになってから動き出し、一体全体間に合うのかなと思っていると、その頃から急にパワーがでてきてちゃんと見事に成し遂げるのです。すごいパワーです！

昨秋、２日間に５万2000人の来場者を得たインディア・メーラー［インド祭］2010の場合も例外ではありませんでした。これは、まさに、インド人の実力、

偉大な特性かもしれません。もっとも、日本人の関係者、関係団体は、最後までハラハラ、血圧が上がりっぱなしになります。

それではインド人との仕事は大変でしょうと言われそうです。ある程度は確かに。しかし、おしゃべりで実際は温かいのがそのうちによく分かります。すぐに遊びにおいでと招いて下さり、インドの手料理を御馳走して下さいます。インド国内でもそうだそうですが、インド人はあまり外食をしません。お昼もいつもカレー風味の愛妻弁当です。どんなのを食べているのかと覗きにいくと、食べろ、食べろと分けてくれます。

インド人は確かに自己主張が強いのですが、言い合ってもすぐに仲直りです。後に残りません。また、融通性があります。日本人は一般に原則に忠実すぎ、融通が利かないといわれます。

また、印象深かったのはリーダーである代々の総領事の方々です。種々の任務以外に各地各所で数多くの講演をこなされ、インドについての知識を広められる立派な“広報官”でもあります。毎年何万人という応募者がある上級公務員試験で一番優秀な人達20人位がまず外務省のキャリア外交官として配属され、次いで国防省、それから財務省の順にまわされます。ですから、総領事は実にエリート中のエリートです!!

また、日本とは異なり理科系出身の外交官も結構多数おられ、実際私が仕えた5人の総領事のうち4人までが理科系で大学の先生が2人もいられたのには驚きました。(インドでは受験科目の選択幅が広いのです。) 他の領事などに分かってもらえない場合、総領事であれば即座に事情を理解して下さり、的確な指示をいただいて解決できることがよくあり非常に有難い存在です。

さて、ここでいくつか私の在職中の重要な出来事について触れますと、私が勤め始めて間もない1998年5月の初め、日本人として非常に悲しいことに、インドは核実験をたてつづけに2回実施しました。その結果インド総領事館周辺でも抗議デモが盛んにおこり、総領事館も警官や警備員が常時警備についていてものものしい雰囲気があたりに漂っていました。夥しい数の抗議文が届き、抗議の面会要求なども多数ありました。

平和運動家は乱暴なことはしないはずとは思いながらも少々怯えたものです。抗議文などはその頃はすべて日本語で届きましたが、驚いたことに、総領事館には当時パソコンはたった一台しかなく、これらの翻訳はすべて手書きでしなければなりませんでした!! 日本ではもう既にPCが普及していた頃です。

また、インド元首相バジパイ氏の来阪(2001.12)の際も厳しい警備体制がとられましたが、首相はホテルニューオータニに宿泊され、このホテルとインド総領事館にインド側コントロールルームが設けられました。日本国内は日本警察警備部門が責任を持ちますが、インドからも首相府特別警察の長を含む先遣隊も調査のため来日、私も通訳として同行しまし

た。さらに東京のインド大使館やインドの外務省等から受入委員長や支援隊、警備官、救急医など計40名余のインド人が来阪、パソコンや通信機器などが運び込まれ、コントロールルームとしての総領事館も満杯となりました。

関西のインド人コミュニティや日本人賓客を迎えてのレセプションがホテルニューオータニで開かれ、その際、溝上先生の指導で大阪外国語大学の学生のヒンディー語劇が演じられ、首相は大変お喜びになりました。

ある時、バジパイ首相が突然に大阪城へ行きたいと言われ、少々お供したことがあります。近くでお目にかかると微笑んで下さり、お写真の印象とは異なってお優しい方に見受けられました。彼は詩人でもいらしたのでした。その後、お見送りの際、関空への車列の端に加えていただいたのも良い経験でした。

マンモーハン・シン首相は、関西へ来られることはありませんでしたが、私の任期中に３回来日（2006、'08、'09）。東京では２回とも日印定期首脳会議（ＳＰＡ、ＥＰＡ関連）のため、札幌ではＧ８のオブザーバーとしての来日でしたが、この３回ともにプラカーシュ総領事について、他のインド人の同僚とともにサポート隊の一員として大使の指揮のもとで手伝いました。（総領事はNo.２）

最後に、全員で写真を撮りますが、この時、近づいてこられたシン首相のお顔を真近で拝むことができ、目が合いました!!　それ以来、私はシン首相のファンです!!

2007年は日印交流年で、関西でも様々な催しが実施されました。京都ではシン首相の令嬢の講演を含む日印文化講演会が開催され、他に、インド文化関係評議会ISSRの派遣グループによるシュヘナイ演奏、マニプリ舞踊、カタカリ舞踊劇の公演、サントウール演奏（インド人間国宝シャルマ氏）、ロックのラグ・ディクスト・プロジェクト公演、ペナーズ・マサニ･コンサートなど６つの公演や、ITPO主催のインドのファッションショーなども開催されました。当時の総領事、オーム・プラカーシュ氏は、一時外務省の外郭団体ISSRのNo.2でいらしたので万事好都合で、関西では、公演回数は多くはありませんでしたが、古典ばかりではなく、インドの現代音楽、ロックやポップスも紹介されました。

勿論、このような公演やイベントはこの交流年だけではなく、限られた回数でしたが、毎年、独立記念日、共和国記念日の際などに、ワーラン総領事他各総領事のもとでも開催されましたし、共和国50周年、日印国交樹立50周年（ヴァルマ総領事）の際にも展覧会など文化事業が開催されました。しかし、これらの場合、出演者をインドから招致するのは困難で、催しは日本人アーティストで行われました。

今でも、インドはまだ遠くて貧しい国だと想像する人達は多いのですが、この12年間に日印の関係、インドの相対的な地位は大きく変わりました。インドはメディアでも頻繁に取り上げられるようになり、その存在は急速に大きくなりまし

た。実に、これが私が一番嬉しかったことです!!

日印は経済面でも緊密度を深め、日本もインドなしではやっていけないと言われはじめています。総領事館でも、インドビジネスの照会が急激に増え、ビジネスビザの発行も急伸しています。

それ以外にも、インドの地位の上昇に伴って、インドへの一般的な関心も高まり、変わってきたなあと私共が実感し、総領事館の一員としてつくづく有り難く思うことがあります。

インド総領事の着任、離任の際、首長や経済団体の長への表敬訪問を依頼しますが、兵庫県、神戸市は別として、なかなか番が回ってこないで数か月も待つことがありましたが、今では即座に調整していただけるようになりました。

また、以前に大変苦労したことの一つに、上記の記念事業やインド文化紹介の催しなどでの人集めがあります。総領事館だけではなく、各府県／市、各商工会議所や関西日印文化協会などの親善団体でも、インドセミナーなどを開催していただく時、集客で大変ご苦労いただいたのでしたが、今ではインド関係イベントや講演会は、まさに、“売れっ子“!!以前の人集めの苦労は嘘のよう。この3、4年の変化は、全く隔世の感があります。

もう一つ重要な兆しは、インドのイベントの際に、多数のインド人自身が積極的に参加し始めたことです。先述のインディア・メーラーの成功も、まさに日印双方の協力の上に成就された大きな成果でした。このインド祭りは、ヴィカース・スワループ現総領事の強力な指導力なしでは実現しなかったものでしたが、彼は、オスカー賞を8つも獲得した映画、“僕と1ルピーの神様”の原作者で、来日前からメディアでも大変な人気で、2足の草鞋をはきながらも、お仕事ぶりも見事に精力的にこなされ、アイデアも一杯、次から次へと様々なプログラムを実現していかれます。勿論、彼の講演は引っ張りだこで、素晴らしい“広告塔”でもあります。

インドはとてつもなく多様な国です。そのような国を統治するとは、何と困難を伴うものでしょうか。それにもかかわらず、今これ程までにコントロールができているとは、何と大したことでしょうか。今やインドには、日本もあやかりたいほどの活力、自信、未来への大きな希望があり、インドの若人達は自信と強い使命感ももっています!!

この仕事を通して、インド人の友人ができて嬉しく思いますと同時に、様々な日印両国の方々から学ぶところ多く、今後両国の相互理解がさらに深まるよう微力ながらもお手伝いができればと願っております。

ヒンディー語詩２編

ミラ・レストラン店主
パルミンダル・ソーディー

広島の平和公園で

子供がボールを追って　走っている
少女が詩の本を読んでいる
犬が冷たい大地と暖かい日光の間に
眠りこんだ
緑の草がいっそう　緑色になった
広島の平和公園が
人生が私に触れて　過ぎ去る

仏陀の国からやってきた
一人の詩人の友が
私の国、日本へ
20万人の人々の
記念碑の前に　立っている。
恥入り　言葉を失った

ちょうどその時
傍らを　楽しく遊びながら通り過ぎる
学校の生徒たちの一団が
緑の草が　一層緑色になる
広島の平和公園に
人生が私に触れて　通り過ぎた

一人の老人が
平和の鐘を鳴らす
誰がために　祈っているのか
私は驚いて　カメラを向ける

半世紀が遠く見える
火が大きく舞い上がる

鉄　石　道　家　花
それに子供の唇
すべてが溶けてなくなる
一瞬にして
権力と政治が
古くて新しい口実を作る
アインシュタインも　驚くことだろう

ちょうどその時
平和の鐘が鳴る
傍らに座る鳩が
とび立ち戻って来る
祈る老人の下に
インドから来た詩人の友

緑の草が一層　緑色になる
仏陀は再び微笑む

広島の平和公園に
人生が私に　再び触れて
通り過ぎて行く

戦争と平和

木が夢を見た
突然すべての葉が散ってしまったという夢

鳥が夢を見た
空の周りに
境界ができているという夢

本が夢を見た
あらゆる語彙が溶けてしまったという夢

怖くなって目を覚ます
木も鳥も本も
このようなもの　戦争の日々というものは

川が夢を見た
月がその膝元に来て座ったという夢

地球が夢を見た
草木の緑がはるか遠くまで
拡がったという夢

少年が夢を見た
少女が七色の虹を着たという夢

酔いしれて目覚めた
川と地球と少年が
このようなもの
平和に満ちた日々というものは

家が夢を見た
激しく音をたてて
自分の体が燃えるという夢

道が夢を見た
その上を走る　行く先のない旅人が
怯えるという夢

少女が夢を見た
少年の顔が
もうもうと立ちこめる黒い煙の中に
消えて行くという夢

怖くなって目を覚ます
家　道　少女

このようなもの
戦争の日々というものは

風が夢を見た
数知れぬ花の香りが
その中に溶け込むという夢

町が夢を見た
老人が再び森から
大きな知識と偉大な平和を伴って
戻ってくるという夢

子供たちが夢を見た
遊びまわる路地に
色と空が　風船と凧で埋まったという夢

平和に酔いしれて　目覚めようとしている
風　町　子供

このようなもの
平和に満ちた日々というものは

（翻訳　溝上富夫）

私の日印交流実践、この一年

大阪大学国際公共政策研究科
博士前期課程２年
大木　香奈

以下に記すのは、私が大学院進学後に経験した、一学生のものとは思えない、逆に言えば学生という特権があるからこそ実現した一連の日印交流実践である。

日印交流のきっかけ

2010年５月28日、「インドの至宝 Pt.シヴクマール・シャルマー＆ラーフル・シャルマー（父と息子）サントゥール・デュエットコンサート2010」が関西日印文化協会の後援により開かれた。私はこのサントゥールの世界的演奏家によるコンサートの開催に運営スタッフの一員として関わっていた。

ところが、最終打ち合わせを行った25日になってシン駐日インド大使夫妻の来場が突然決まり、急遽、私にスピーチ役が回ってくることとなった。今となって考えれば、それが全ての始まりであった。

コンサート当日。スピーチの原稿をひたすら音読しつつリハーサルに励む。大使夫妻の案内役も兼任していたため、何度もルート等の確認を行う。コンサートホールの入口に立つと、周囲の緊張した雰囲気を感じ、当然のことだが「本当にすごい方をお迎えするのだ」と更に緊張が高まる。もうずっと鼓動が早いままだ。

そして遂にシン大使夫妻の車が到着すると、緊張は最高潮に達した。ヒンディー語で「ようこそ」と言うと、大使夫妻が微笑んで下さり安堵した。名刺を渡しながら軽く自己紹介し、不安を抱えつつ必死に案内する。大使夫妻は丁寧に応対して下さり、私が話す拙いヒンディー語も優しく訂正して下さった。

無事案内は終わったが、大阪大学の学生を代表するスピーチが最後に待っている。これを成功させることが私の最重要任務だ。コンサート中もずっと緊張したままで、遂にその時がやってきた。

「日印交流実践の担い手として前進して参ります。インド万歳！」

最後の万歳の元気良さに大使夫妻も思わずお顔が綻んだようで、会場も拍手喝采に包まれた。花束を贈呈し、夫妻を裏口に案内する。スピーチを褒めて下さり嬉しかった。迎えのハイヤーが遅れたこともあり、少しお話する時間ができた。

「素敵なサリーですね」くらいしか言えなかったが、名刺を渡して下さり「新潟で個展をするから来てね」と言われ、反射的に「必ず！」とヒンディー語で答

えていた。帰り際にはハグまでして下さり、余りの感動に眼が潤んだ。

初の東京訪問

シン大使のご配慮で大使館にて一等書記官のパラミタ・トリパティ氏と交流することができた。トリパティ氏は同じ女性で30代のキャリアーとして働いておられることもあり、すぐに憧れの存在となった。将来を考えた時に仕事と家庭の両立に悩む私たちに対し、力強く励まして下さり感動を覚えたが、何よりも私たちを勇気づけたのが彼女の存在そのものであった。

仕事も精力的にこなす一方で、素敵な旦那様と可愛いお子様が２人おり、幸福な家庭も築いておられる。その彼女が言うからこそ、「諦めなければ絶対に大丈夫」との言葉がより強い力を持つのだ。その日から彼女は私にとってのメンターとなった。

その後、榎泰邦元駐印大使と懇談し、御著書である『インドの時代―インドが分かれば世界が分かる』に関して直接質問する機会に恵まれた。内容自体も素晴らしかったが、私たちの稚拙な質問に対しても的確に答えて下さり、非常に濃密な懇談ができて嬉しかった。

翌日は日印協会の鹿子木健吉元常務理事、原佑二現常務理事と懇談し、日印協会の歴史とともに日印関係について学ぶことができ、非常に勉強になった。

インド共和国独立記念式典とアフターブ・セット元大使

８月15日の独立記念式典での一件も忘れられない。私たち大阪大学の有志学生達がインド人学校の児童らとともに、インド国歌を多くの観衆の前で歌う機会に恵まれたのだ。事前に国歌を猛練習し、前夜も睡眠学習と称し国歌のＣＤをかけながら寝たこともあり、満足いくパフォーマンスが行えた。

国旗掲揚後、大使夫妻がインド人の児童と私たちの方へいらした時のことである。夫人は私のちょうど斜め向かいにおられ、“Madam!”と声をかけるとパッと振り返り、「来てたのね！」と再会を喜びハグして下さった。更に“come!”と私をぐっと前に引き寄せ、夫人の隣で写真を撮らせて下さったのである。

また、スピーチ後に懇談の機会があり、他の方からの「母親のようですね」との言葉に夫人は頷いて下さったので、「私はあなたの娘です」とヒンディー語で言うと強くハグして下さった。本当にただただ幸せで、お別れした後も自分に移った夫人の残り香が漂う度、温かい気持ちになった。その後メールを送ると、長文の返信を頂き、一生の宝物となった。夫人との交流はその後もずっと続いていくことになる。

また、アフターブ・セット元駐日インド大使とも懇談することができた。セット大使は元慶應ボーイということもあり、大変流暢な日本語で私たちの質問に答えて下さった。

その後、日印協会の鹿子木健吉元常務理事、原佑二現常務理事と２回目の懇談をし、日印協会の歴史とともに日印関係について前回の続編として更に学ぶことができ、更なる勉強になった。

新潟訪問

9月11日、新潟県南魚沼市池田記念美術館においてシン大使夫人の絵画展のオープニングセレモニーが開かれた。初めて夫人とお会いした時の「必ず行きます！」との約束が、この日遂に果たされたのである。数々の著名人の挨拶の後、学生である私にも特別に挨拶の時間を設けて頂き、ヒンディー語で挨拶を行った。

スピーチをする前までは非常に緊張したが、いざ大使夫妻の前に立つと、その温かい眼差しに心が休まり、幸せな気持ちで挨拶を行うことができた。セレモニーでは多くの方々と交流することができ、鳩山美幸夫人とは大使夫人とともにお話させて頂いたうえに、一緒に写真も撮って頂いた。

翌日、南魚沼市に訪問していたIndia International School in Japan（以下、IISJ）の先生方と国際問題についてお話することができ、次回東京の学校にも訪問させて頂く約束をすることができた。そして、何より夫人の講演会が印象的で、常に笑顔を忘れない夫人の人生哲学に触れることができ、非常に感銘を受けた。ただ外面的に美しいだけでなく、心も清らかな夫人は私の憧れの存在である。

日帰りの東京訪問

9月16日、IISJを訪問し、児童らと交流し「夢を持つということ」というタイトルでスピーチを行った。その他、児童らとともにインド国歌を歌ったり、授業風景を見せてもらったり、図書館を見学したりと、校内をくまなく見学することができ貴重な体験となった。

特に印象に残ったのはコンピュータールームで、小学校低学年と思われる児童らがキーボードの練習をしていた。また、先生によると小学生からインターネットの恐ろしさをきちんと指導していると言う。情報社会がますます進む中で、メディアリテラシーの重要性を低学年から指導している点にインドの強さを見る思いがした。

その後、パンダ主席公使の歓迎会にも参加し、日印関係における著名な人々と知り合うことができた。パンダ主席公使のスピーチは、ユーモアを交えながらも1回の講義分くらいの中身の濃いもので、学生として大変勉強になり、また大いに刺激を受けた。

武藤友治氏講演会

10月2日、芦屋市民センターで開催された武藤友治元ムンバイ総領事の講演会に参加した。武藤氏は私が卒業した旧大阪外国語大学（以下、外大）の大先輩であり、退職後も1篇の翻訳書に8冊もの著書を出された、80歳の今日でも矍鑠として研究に励まれている方である。外大生の誇りでもあるその方に御講演頂ける機会に恵まれたことは大変光栄だった。

インドを内部まで深く知る方ならではの深みのある講演会で、懇談の時間も設けて下さり、書店販売前の最新作『巨象インドの憂鬱—赤の回廊と宗教テロル』に御署名まで頂けた。最後に、武藤先生と外大生一同とで撮った写真は何よりの

記念である。

大使公邸での還暦祝い

10月8日に大使公邸にてシン大使の還暦祝いが開かれた。本当に限られた人しか参加できない特別な会で、本来学生が呼ばれるようなものではないが、大使夫妻のご厚意で招待して頂くことができた。

私はその喜びを表現しようと、大使夫妻に贈り物を渡すことにした。お金をかけても意味がないと思い、出身地の徳島県で有名な藍染めの造花作りに挑戦した。更にそれを藍染めされた竹の花瓶に活けた形で完成させ、帰省し一日中使っての作業にはなったが、大使夫妻にも喜んで頂くことができ嬉しかった。

初めて訪れた大使公邸は豪華絢爛で、インドと関係している著名な方が沢山いらしており、見たこともない華やかさだった。大使夫妻が迎えて下さり、夫人に「日本人形みたい」と振り袖姿を褒めて頂いた。森喜朗元首相もお見かけし、学生の私たちにも気さくに話しかけて頂いたうえ、一緒に写真も撮らせて頂いた。

そして、遂に元駐印日本大使で現在日印協会理事長である平林博先生にお会いすることができたのである。厚かましいお願いと思いながらも「大阪大学にもぜひいらして下さい」と言うと「いいよ」と即答して下さり、驚きと感動で心が震えた。そして、この出会いこそが、一連の活動の集大成ともいえる後の大学院での講演会につながることとなる。

私は大使へ誕生祝いのメッセージをヒンディー語で準備していた。しかし、何度も練習していたはずなのに、いざ大使の前に立つとその日に限って言葉が出ず、自分の不甲斐なさに泣きそうになった。

その後、豪華な食事も余り喉を通らず、沈んだ気持ちで過ごしていると、大使のご友人であるVB ルパニ氏に「大使へのバースデーソングを一緒に歌ってくれないか」と声をかけられた。ルパニ氏とともに全員の前に立ちバースデーソングを歌った後、周りの方の御配慮で突然大使への祝辞を述べる機会に恵まれたのだ。

先ほど言えなかった分、今度はマイクを通じてはっきりとヒンディー語で言うことができた。「大使のご恩に報いるために、日印交流促進に一生懸命取り組みます」との私の言葉に、大使が深く4回も頷いているのを目の当たりにし、「日本とインドの架け橋となる人材になろう」と強く決意した。

この時から私の日印交流活動は、単なる個人の希望ではなく、大使との約束に変わったのである。また、祝辞後は夫人がハグして下さり、大使からも「ヒンディー語を学ぶ日印交流のための重要な人材である」と皆様に対して紹介して頂くことができ、私にとって原点ともいうべき日となった。

インディア・メーラー

11月13・14日、関西初のインド祭りである「インディア・メーラー」が神戸メリケンパークにて開催された。私たち大阪大学ヒンディー語・ウルドゥー語専攻学生有志は、持ち前の語学力を活かし、ボランティアスタッフとして参加した。関西で初の試みということもあり、当初は色々と不安もあったが、当日は想像をはるかに超えた大盛況で、大いに盛り上がった。

私たちの最大の見せ場は14日のオリジナルソング披露である。これは、インディア・メーラー開催を記念し作成されたテーマソングの日本語の歌詞を、更に英語、ヒンディー語にも翻訳し、来場者全てが歌えるように特別に作られた曲である。私たちはインドの民族衣装を身につけ、日本語、英語、ヒンディー語で披露し、会場から拍手を頂くことができた。

最後のスワループ総領事からの挨拶でも「映画にエンドロールがあるように、このイベントの影の功労者を紹介したい」「学生ボランティアスタッフとして支えてくれた大阪大学学生の皆さん、君たちがいなければ決してできなかった」と最大級の褒め言葉で紹介して頂き、学生一同大感動のフィナーレとなった。

インディア・メーラー自体2日間で延べ5万人以上の来場者が訪れ、最後はスワループ総領事が原作者である「スラムドック・ミリオネア」の主題歌“Jay Ho”に合わせて皆で踊りながら拍手喝采の中で幕を閉じた。

シン大使夫妻の見送り

2011年1月2日は私にとって一生忘れることのできない日――シン大使の離任の日だ。シン大使夫妻は私が日印交流活動をするきっかけであり理由でもある、生涯に渡り最も大切な存在である。そのため、日本を離れる最後の日は必ず見送ると決めていた。シン大使夫妻も当初はそれを認めてくれており、その日を心待ちにしていた。

しかし、離任間際になって「荷物が多く、十分挨拶もできないし、日本は新年で大切な時だから」との断りの電話を秘書の方より頂いた。それでも諦められず、シン大使のご友人の方に頼んでみたりもしたが、結局大使の返事はノーのままだった。「ご迷惑かもしれないが、会えなければ一生後悔する。もう一か八かで行くしかない」と、新年1月1日に実家の徳島から発車する夜行バスに乗車し東京に向かった。

朝の7時半に大使公邸の前に着き、職員の方に大使夫妻が出ていらっしゃる9時半まで家の前で待つよう言われた。ところが、ちょうど扉の一部がガラス張りになっていたのでそこから中を覗き込むと、一瞬人影が映った。驚き、そのまま見ていると、ふっとシン大使夫人が現れたのだ。

扉越しに夫人と目が会い、私が飛び跳ねて喜ぶと、「もう、来ちゃったのね」と呆れながらも温かい表情で、外に出てきて下さった。徳島から必死に訪ねに来て、遂に夫人と会えたのだと一瞬涙がこぼれそうになったが「泣かないで。私は死なないのよ」との夫人の言葉にぐっと

涙を抑え、何度も何度も強く抱きついた。

インドや日本で再び会う約束をし、ヒンディー語で書いた手紙を渡した。夫人と別れた後、大使ともお会いすることができた。大使は一瞬事態が掴めずきょとんとしていたが、「君か！」と喜んで下さり、大使公邸での最後の写真を一緒に撮ることができた。その写真を見るたびに「ドウモ、ホントウニアリガトウ」という大使の別れ際の言葉を思い出す。

平林博日印協会理事長講演会

2011年２月３日、私が所属する大阪大学国際公共政策研究科にて元駐印・駐仏大使である平林博日印協会理事長の講演会を開催することができた。これは先述の10月８日の大使公邸での出会いが発端である。また、全面的に支援して下さった私の大学院の星野俊也教授は、平林理事長が在アメリカ合衆国公使時代に同じく大使館に勤務していたという偶然も重なり、大学院進学後の一連全てがこの講演会のための準備であったかのように思えるほどである。この講演会は、これまでとは性質が全く異なり、私が完全に１人でイニシアティブをとり企画を成功させるという、１年間の活動の集大成のようなものだった。

平林理事長自らこちらに連絡を下さって以降、私が学生代表として直接コンタクトをとり調整を行った。準備期間が短く、何より講演会を主催すること自体が初めてだったので関係者の方々には種々迷惑をかけたことと思う。しかし、当日は試験期間中にもかかわらず予想をはるかに超えた大盛況で、予定されていた会場も急遽変更し、130名以上の人たちが集まった。

平林理事長にもお忙しい中多くの時間を割いていただき、ランチタイムでの懇談、１時間半の本講演に加えて質疑応答の時間を１時間以上延長したが、会場を移してからも質疑応答は終わらず、名残惜しい終了となった。しかし、また来て頂けるとの約束ができたので、各自が聞けなかった質問は次回に託したいと思う。

その後、お見送りで新大阪駅まで御一緒させて頂き、私が拙いアレンジを詫びると「丁寧にして下さって良かった」とお褒めの言葉を頂いた上に、発車間際まで新幹線のドアの前にずっと立ったまま私たちと話続けて下さり、ただただその心遣いに感動と感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。初めての経験ではあったが、平林理事長も含め、教授や学生等、多くの人々の協力のおかげで無事大成功に終わり、集大成の名にふさわしく私自身も最も成長できた経験となった。

さいごに

「絶えず力を新たにして新しい道を求める事、これこそが、いつの世にも進歩の秘訣だ。」とは詩人タゴールの言葉である。全ての出来事は一見独立しているようで、実は密接に絡み合い、そのどれが欠けても最後の講演会には至らなかった。全ての積み重ねが私にこれほどの進歩をもたらしてくれたのである。今はまだ一学生だが、これらの経験で得た力を糧に、日印交流実践の担い手として邁進してまいりたい。

独立後の主な出来事

年	月　日	主な出来事
1947	8月15日	インド連邦成立。
	10月2日	インド軍、カシミール地方で軍事作戦を開始。
1948	1月30日	マハートマ・ガンディー暗殺。
	2月5日	第一次印パ戦争勃発。
	9月17日	ハイデラバード（ニザーム）藩王国を併合。
1949	1月1日	カシミールで停戦成立。インド準備銀行、中央銀行として新発足。
	9月1日	ドラヴィダ進歩連盟結成。
	11月25日	インド憲法採択。
1950	1月26日	インド憲法制定、インド共和国として完全独立。
1951	1月16日	ウッタル・プラデーシュ州政府、土地改革法制定。
	4月1日	第一次5カ年計画開始。
	10月25日	第1回総選挙実施、インド国民会議派大勝。
1952	6月5日	日印平和条約、東京にて調印。
	8月27日	同条約ニューデリーにて発効。
1953	2月16日	ネルー、「第三世界」結集を提唱。
	10月1日	初の言語州アーンドラ・プラデーシュ州発足。
1954	4月29日	ネルー・周恩来会談で平和五原則が表明される。
	10月19日	北京でネルー・毛沢東会談開催。
	11月1日	フランス領ポンディシェリー・マーヘーを併合。
1955	1月21日	インド国民会議派第60回アヴァディ大会開催（～23日）。
	4月24日	バンドン開催のアジア・アフリカ会議で平和十原則が表明される。
1956	11月1日	言語別州再編成法施行。
1957	2月24日	総選挙実施（～3月15日）、ケーララ州で共産党政権誕生。
1959	7月31日	ケーララ州に大統領統治を導入。
1960	2月12日	ニューデリーでネルー・フルシチョフ会談開催。
	9月19日	インド・パキスタン間でインダス川水利条約締結。
1961	12月20日	ポルトガル領ゴア・ダマン・ディウを併合。
1962	10月20日	中印国境紛争勃発（～11月21日）。
1963	4月27日	公用語法可決。
1964	5月27日	ネルー没。
	8月19日	ムンバイで世界ヒンドゥー協会（VHD）結成。
	9月11日	インド・ソ連間で軍事協定調印。
1965	1月26日	公用語法施行。マドラス（現チェンナイ）を中心に各地で反ヒンディー語暴動を惹起。
	9月6日	第二次インド・パキスタン戦争勃発（～22日）。
1966	1月10日	タシケント宣言。
	1月24日	インディラ・ガンディー首班内閣発足。
	8月30日	ビハール州で大洪水発生。
	3月2日	ナクサライトの武装闘争開始。
1967	3月2日	マドラス州（現タミルナードゥ州）にドラヴィダ進歩連盟政権誕生。

年	月　日	主な出来事
1968	1月8日	改正インド公用語法制定。
1969	7月19日	主要銀行国有化。
	11月12日	インド国民会議派、インディラ派と長老派に分裂。
1971	8月9日	インド・ソ連平和友好協力条約締結。
	12月3日	第三次インド・パキスタン戦争勃発（～17日）
1972	3月19日	インド・バングラデシュ友好平和協力条約締結。
	7月2日	インド・パキスタン首脳会談でシムラー協定締結。
1974	5月18日	初の地下核実験に成功。
	6月5日	ビハール州でJ.P.ナーラーヤン大統領率いる大衆デモ。
1975	5月16日	シッキム王国、インドに吸収・併合（シッキム州成立）。
	6月26日	インディラ・ガンディー首相、非常事態を宣言。
1976	1月24日	石油会社を国有化。
1977	1月18日	インディラ・ガンディー首相、総選挙実施を発表。
	3月16日	インド総選挙実施で人民党（ジャナター・パーティー）圧勝、デサーイー首班内閣発足。
1980	1月3日	インド総選挙実施（～6日）、インディラ・ガンディー首班内閣発足。
	4月6日	インド人民党（ＢＪＰ）結成。
	12月31日	後進諸階級委員会が報告書（マンダル報告）をインド政府に提出。
1982	10月2日	国営自動車会社マールティ・ウドヨーグ社、鈴木自動車と小型乗用車製造協定を締結。
1983	2月2日	アッサム州で民族暴動発生。
1984	6月5日	インド政府軍、アムリトサルのシク教寺院を制圧。
	10月31日	インディラ・ガンディー首相暗殺。
	11月1日	ニューデリーを中心に反シク教徒暴動発生。
	12月3日	ボーパールの化学工場で毒ガス流出事故発生、死傷者多数。
1985	5月24日	テロリスト・破壊活動（防止）法成立。
	10月2日	改正ダウリー禁止法発効。
	12月8日	南アジア地域協力連合（ＳＡＡＲＣ）発足。
1987	4月16日	ラジーヴ・ガンディー首相を巻き込むボフォールズ疑獄発覚。
	7月29日	インド・スリランカ和平合意協定締結、インド平和維持軍のスリランカ派遣決定。
1988	2月25日	短距離地対地戦術ミサイル「プリトヴィ」発射実験成功。
	10月11	ジャナター・ダル結成。
1989	5月22日	中距離地対地弾道ミサイル「アグニ」発射実験成功。
	11月9日	ラジーヴ・ガンディー首相、アヨーディヤーのラーマ寺院建立定礎式容認を表明。
	12月6日	インド総選挙（11月22日～26日）で勝利したV.P.シング首班国民戦線内閣発足。
1990	3月10日	ビハール州にジャナター・ダルL.P.ヤーダヴ首班内閣発足。
	8月2日	インドの経済危機が深刻化。
	8月7日	V.P.シング首相、マンダル報告中の勧告実施を発表。
	10月30日	アヨ月ディヤーでラーマ寺院建立定礎式が強行される。
1991	5月21日	ラジ月ヴ・ガンディー元首相暗殺。

年	月　日	主な出来事
1991	6月21日	インド総選挙（5月20日～6月15日）の結果、インド国民会議派ナラシンハ・ラーオ首班内閣発足。
	7月24日	経済自由化・新産業政策発表。
1992	5月14日	「タミル・イーラム開放の虎」を非合法化。
	12月6日	アヨーディヤーのバーブルのモスク破壊、各地でヒンドゥー・ムスリム間暴動が起こる。
1993	12月4日	ウッタル・プラデーシュ州に社会党（ＳＰ）、大衆社会党（ＢＳＰ）連立政権誕生。
1995	12月	インド、東南アジア諸国連合（ＡＳＥＡＮ）の全面的対話相手国となる。
1996	5月16日	インド人民党、A.B.ヴァージペイ首班内閣発足。
	6月1日	ジャナター・ダルのD.ガウダを首班とする統一戦線内閣発足。
	6月19日	包括的核実験禁止条約（ＣＴＢＴ）拒否。
	7月23日	アジア地域フォーラム会議（ＡＲＦ）に参加。
1998	3月19日	インド総選挙（2月16日～28日）の結果、インド人民党A.B.ヴァージペイ首班連立内閣発足。
	5月11日	地下核実験成功。
	5月14日	国際連合安全保障理事会、インドの核実験非難を採決。
1999	5月9日	カシミール地方で、インド・パキスタン間の大規模局地戦が勃発。
	10月11日	インド総選挙（9月4日～10月3日）の結果、インド人民党、A.B.ヴァージペイ首班国民民主連合内閣発足。
2000	3月20日	クリントン米大統領インド訪問（～3月24日）。
	8月21日	森総理インド訪問（～8月24日）。
2001	1月26日	グジャラート州で大地震発生。
	10月11日	V.S.ナイポール、ノーベル文学賞受賞。
	12月7日	ヴァージペイ首相来日（～12月11日）。
	12月13日	イスラーム過激派グループがインド国会議事堂を襲撃。
2002	2月27日	グジャラート州のゴードラーで列車焼き討ち事件発生、各地でヒンドゥー・ムスリム間暴動が起こる。
	4月29日	ニューデリーのタージパレス・ホテルで「日印国交樹立50周年記念式典」が開催される（ヴェンカタラーマン元大統領、グジュラル元首相、中山太郎元外相等が出席）。
2003	3月24日	ヴァージペイ首相、クアラルンプールで開催された第13回非同盟運動（ＮＡＭ）首脳会議に出席。
	5月27日	ヴァージペイ首相、独・露・仏3国訪問。
	6月22日	ヴァージペイ首相、中国訪問。
2004	1月4日	印パ首脳会談がイスラマバードで開催される（～1月6日）。
	1月15日	印パ間で鉄道再開。
	5月22日	インド総選挙（4月20日～5月10日）の結果、インド国民会議派マンモーハン・シンを首班とする統一進歩同盟（ＵＰＡ）内閣発足。
	10月13日	マハーラーシュトラ州議会議員選挙で国民会議派・ＮＣＰ連合勝利。
	11月29日	ビエンチャンで開催されたＡＳＥＡＮ首脳会議で日印首脳会談が開かれる。

年	月　日	主な出来事
2004	12月26日	スマトラ沖大地震によって発生した大津波がアンダマン・ニコバル諸島及びタミルナドゥ州の海岸に大きな被害をもたらす（死者9,682名、行方不明5,914名）。
2005	3月7日	ビハール州議会選挙で過半数を確保できるグループがなくなったため、同州が、大統領の直轄地となる。
	3月16日	森前首相、ニューデリーにてマンモーハン・シン首相と会談。
	4月9日	温家宝中国首相訪印（～12日）。
	4月17日	ムシャラフ・パキスタン大統領、クリケット観戦のため、ニューデリー訪問。
	4月28日	小泉首相訪印（～30日）、インド側との共同声明の中で、8項目に同意。
	7月5日	テロリスト、アヨーディヤーを襲撃。
	7月17日	マンモーハン・シン首相訪米、ブッシュ大統領と印米首脳会談。
	7月26日	ムンバイ大洪水で1059人が犠牲となる。
	8月24日	第1回「日印ICTフォーラム」がニューデリーで開催され、麻生総務大臣が出席。
	10月8日	カシュミールでM7.6の強い地震発生。
	10月29日	デリーの3ヶ所で、連続爆破事件が発生し、死者61人を出す。
	10月31日	R.K.ナラヤナン前大統領逝去。
	11月22日	ビハール州のやり直し選挙でジャナタ・ダル（統一派）勝利。
	11月27日	日本経団連、奥田碩会長を団長とする20人の代表団をインドに派遣（～12月2日）。
	12月23日	アムリッツァル・ラホール間直通バス運行開始。
2006	1月3日	麻生外務大臣訪印（～4日）。
	1月17日	印パ両国の外務次官がニューデリーで会談（～18日）、印パ関係包括的対話を第三段階に向けて進めることで合意。
	1月18日	チダンバラム財務省訪日、二階経済産業相と会談。
	1月29日	マンモーハン・シン内閣大型改造。
	2月17日	タール砂漠を越えてインドとパキスタンを結ぶ鉄道が41年ぶりに再開。
	3月1日	ブッシュ米大統領訪印（～3日）、原子力技術協力で合意。
	3月7日	ヴァーラーナシーでテロ、2ヶ所で爆発、12人が死亡。
	3月23日	ソニア・ガンディー国民会議派総裁下院議員を辞職。
	5月3日	弟に銃で撃たれていたプラモード・マハージャンBJP幹事長死亡。
	5月11日	4月から5月にかけて行われた西ベンガル、タミルナードゥ、ケーララ、アッサム、ポンディチェリー5州の州議会選挙結果が開票され、左派陣営大勝という結果がでる。
	6月14日	カマルナート・インド商工相来日（～15日）。
	6月23日	日本の農林水産省はインド産マンゴーの生果実について輸入を解禁する。
	7月6日	インドと中国、44年ぶりに標高4,310mのナトゥラ峠越えのシルクロード交易再開。
	7月11日	ムンバイで鉄道連続爆破テロで死者186人、負傷者772人を出す。

年	月　日	主な出来事
2006	7月17日	サンクト・ペテルブルクで開催されたG８サミットで、小泉首相とマンモーハン首相が会談する。
	7月25日	北側国土交通相訪印（28日）。
	10月25日	プラナブ・ムケルジー国防大臣が新外務大臣に就任。
	11月１日	バンガロールの名称をベンガルールに改称。
	12月13日	マンモーハン・シン首相日本を公賓として公式訪問（～16日）。14日に日印交流年合同開会式を東京のフォーシーズンズホテルで行う。
2007	１月25日	プーチン・ロシア大統領訪印（～26日）、マンモーハン・シン首相と会談。
	２月13日	日印交流年「2007年インドにおける日本年」のオープニング式典がニューデリーの日本大使館公邸で開会式開催。
	２月	パンジャーブ州、ウッタラカーンド州、マニプール州３州で。州議会選挙が行われ、このうち、マニプール州を除く２州で国民会議派敗退。
	２月18日	ニューデリー発パキスタンのワガ行き急行列車「サムジョウター・エクスプレス」がテロの襲撃を受け、67人が死亡、50人が負傷。
	３月22日	ムケルジー外務大臣、日本を訪問、麻生外務大臣との間で、第１回日印外相間戦略的対話を実施。
	４月29日	冬柴国土交通相、ニューデリーを訪問（～５月２日）。
	５月29日	ラジャスタン州でOBCに属する農民が最下層級への編入をもとめて暴動。
	６月７日	マンモーハン・シン首相ドイツのハイリゲンダムで行われた主要国の首脳会議に出席（～８日）。
	７月２日	ニューデリーで、甘利経済産業大臣とアルワリヤ・インド計画委員会副委員長の間で、第２回日印エネルギー対話の実施。
	７月25日	プラティバー・パティール氏、初の女性大統領として第12代大統領に就任。
	８月10日	ハミード・アンサーリー氏が副大統領に選出。
	８月21日	安倍首相は公賓としてインドを訪問（～23日）、シン首相との首脳会談後、「戦略的グローバル・パートナーシップ」に基づき、両政府は多元的取り組みに合意しロードマップを共同声明に盛り込み、発表するとともに、環境とエネルギーに関する別個の共同声明に署名。第１回日印学長懇談会も開催される。23日には、安倍首相はコルカタを訪問。
	８月23日	我妻和男麗澤大学名誉教授の長年の献身的努力によりコルカタに完成した「印日文化会館」の落成式が行われ、安倍普三首相、ブッドデブ・ボッタチャルジョ西ベンガル州首相が参列し、我妻名誉教授に２回目のタゴール賞が贈られる。
	10月９日	９月にジャナタ・ダル（政教分離派）とインド人民党（BJP）の連合政権が崩壊していたカルナータカ州が大統領統治の下に置かれる。
	12月23日	グジャラート州議会の選挙でインド人民党が勝利。

年	月　日	主な出来事
2008	1月1日	バンガロールに日本領事館（出張駐在官事務所）開設。
	1月3日	額賀財務相インドを訪問、マンモーハン・シン首相と会談、デリー・ムンバイ間産業大動脈構想を支援する姿勢を明らかにする。
	3月16日	ベンガルールの国際新空港として、ラージーブ・ガンディー国際空港が開港。
	5月21日	ANA、インド最大の民間航空会社ジェットエアヴェイズと、コードシェアとマイレージ提携をする。
	7月9日	福田首相は洞爺湖サミット関連会合に出席するために来日したマンモーハン・シン首相と首脳会談を行う。
	7月22日	マンモーハン・シンUPA（統一進歩連合）政権に対する信任投票の末、シン内閣信任される。
	7月25日	ベンガルールでの9ヶ所で爆弾が爆発して2人が死亡し、7人が重傷。
	8月3日	高村外務大臣訪印（～5日）、ムケルジー外務大臣と第2回外相間戦略対話を行う。
	8月26日	オリッサ州政府はカンダマール地区においてヒンドゥー教徒によるキリスト教徒に対する襲撃により発展した騒乱に対して戒厳令を発する。
	8月28日	マンモーハン・シン首相はビハール州に発生した大洪水（200万以上の人々が家を追われる）を国家の大災害と宣言。
	8月31日	ジャンム・カシュミール州政府とアマルナート巡礼闘争委員会との間で和平交渉が成立し、アマルナート土地問題が一応の解決を見る。
	9月13日	ニューデリーのマーケットで5つの爆弾が同時刻に連続して爆発し、少なくとも20人の死者と80人の負傷者を出す。
	9月14日	カルナータカ州の4地区で12のキリスト教礼拝堂が暴徒の攻撃を受ける。
	9月29日	マハーラーシュトラ州のマレガオンで爆破テロが起こり、ヒンドゥー過激派もテロリズムに走っていることが明らかになる。
	10月3日	ラタン・タタはナノ自動車生産工場を西ベンガル州のシングールから撤退すると決意をする。
	10月8日	ブッシュ大統領は印米民生用核取引を実施するための法律に署名。
	10月21日	マンモーハン・シン首相来日（～23日）。麻生首相と日印首脳会談を行い、「日印戦略的グローバル・パートナーシップの前進に関する共同声明」及び「日本とインドとの間の安全保障協力に関する共同声明」に署名。
	11月26日	ムンバイ10ヶ所でほぼ同時刻に無差別テロ攻撃が行われ、183人死亡し、372人が負傷。テロリスト10人のうち9人が射殺され、1人が逮捕される。
2009	1月6日	マンモーハン・シン首相は2008年11月のムンバイ襲撃に、パキスタンの国家主体が関与していると初めて言及して非難する。
	1月10日	グジャラート印日協会はアーメダーバード市内で「日本祝祭」を開く（～13日）。この間、日本から竹中元経済財政相を含む22名の使節団が訪問。

年	月　日	主な出来事
2009	1月12日	シブ・ソーレン・ジャールカンド州首相は州首相を辞任し、19日同州は大統領直轄下におかれる。
	1月24日	カルナータカ州マンガロールでヒンドゥー右翼ウィングの活動家達が大衆ハブを「インド文化や伝統に反する」猥褻な行為をしているとの理由で襲い、若い女性に暴行を加える。
	2月7日	潘基文国連事務総長がインドを訪問。
	2月9日	第6回日印安保対話がニューデリーで開催され、双方の外務省・防衛省関係者が出席した。
	2月22日	映画「スラムドッグ・ミリオネア」がアカデミー賞で最優秀作品賞など8部門受賞する。
	2月26日	タタ自動車は世界最安値（10万ルピー）の乗用車「ナノ」を3月から販売をすると発表。
	3月27日	日印両国政府は2008年度後期分の円借款として、デリー高速輸送システム建設計画を含む4案件、総額1,370億2,800万円の供与に関する書類を交換。
	4月2日	マルチ・スズキ社は、2008年度の販売台数（国内販売台数と輸出台数の合計）が約79万台となり、過去最高を記録したと発表。
	4月6日	アッサム州で爆弾テロ、6人が死亡、30人以上の負傷者が出る。
	4月20日	インド宇宙研究機関(ISRO)は、地表観測衛星の打ち上げに成功したと発表。
	4月30日	薮内外務次官が訪印、メノン外務次官との間で外務次官対話を実施。
	5月7日	海上自衛隊の遠洋練習艦隊3隻がゴアを親善訪問。
	5月16日	4月16日から投票が行われていたインド連邦下院議員選挙の開票が行われ、コングレス党が予想を上回る206議席を得て第1党の座を維持。最大野党のBJPは退潮、左翼政党は大敗。
	5月22日	マンモーハン・シン首相が大統領官邸で宣誓式を行い、翌日新内閣が発足。
	6月3日	下院議長に女性としては初めてミーラ・クマール議員が就任。
	6月10日	ホンダが小型車「ジャズ（日本名:フィット）をインドで発売開始。
	6月15日	西ベンガル州ラルガル地区でマオイスト（別名：ナクサライト）が共産党幹部の自宅や警察署等を襲撃。
	6月16日	ロシア・エカテリンブルグで開催された第1回BRICs首脳会合にシン首相が出席。
	6月30日	1992年12月に発生したバーブリー・マスジッド破壊事件を調査したリベルハン調査委員会が、17年間にわたる調査結果の報告書をシン首相に提出。
	7月3日	クリシュナ外相が訪日し、中曽根外相との間で第3回外相間戦略対話を実施。
	7月14日	フランス独立記念日の主賓としてシン首相が訪仏。これに際し、約400名のインド軍兵士が凱旋門前をパレードする。
	7月17日	クリントン米国務長官訪印。
	7月26日	インド初の国産原子力潜水艦「アリハント」の進水式が行われる。
	8月3日	インドで最初の新型インフルエンザによる死亡事例発生。
	8月25日	鳩山首相、G20ピッツバーグ・サミットの機会にシン首相と会談。

年	月　日	主な出来事
2009	9月3日	ロシア訪問中のパティール大統領はメドヴェージェ大統領と会談。
	9月22日	インド、中国、ブラジル、メキシコ、南アフリカの5ヶ国は第64回外相会議を開催。
	10月3日	シン首相、コングレス党集会に出席するため、アルナーチャル・プラデーシュ州を訪問。(中国は強い不満を表明)
	10月19日	小沢環境相が訪印、ラメーシュ環境森林大臣と会談。
	10月24日	鳩山首相はタイでのASEAN関連首脳会議の機会にシン首相と会談。
	10月27日	堂道駐印大使とクリシュナ財務省経済局長は、貨物専用鉄道建設計画（西回廊）第1フェーズのエンジニアリング・サービス借款にかかる交換公文に署名。
	11月4日	パール判事子息のポロシャント・パール氏が死亡（83歳）。
	11月9日	訪日中のアントニー国防大臣が北澤防衛相と会談し、会談後共同プレス発表。
	11月24日	訪米中のシン首相がオバマ大統領との間で米印首脳会談を実施。
	12月27日	鳩山首相訪印（～29日）、シン首相との首脳会談後「日印戦略的グローバル・パートナーショップの新たな段階」と題する共同声明を発表。
2010	1月2日	インド外務省は、メルボルンのインド人留学生殺傷事件を強く非難するクリシュナ外相の声明を発表。
	1月6日	原口総務相とインド電気通信規制庁のシャルマー委員長がニューデリーで会談し、電気通信分野の政策の協力に関する合意文書の署名。
	1月17日	ジョティ・ボシュ元西ベンガル州首相死去（享年95歳）。
	2月15日	西ベンガル州ミドナプル県において展開中の治安部隊に対し極左武装勢力マオイストによる大規模な襲撃があり、20名以上の警察官が殺害され、武器、弾薬等が奪われる。
	2月22日	アドヴァーニーBJP両院議員団長が野党連合・国民民主連盟（NDA）の議長代行に選出される。
	2月24日	クリシュナ外相は、パキスタンの部族地域で発生したシク教徒の斬首事件を強く非難する声明を国会で出す。
	3月9日	国会及び州議会の議席の3分の1を女性に割り当てる憲法修正案（女性留保案）が上院で可決される。
	3月12日	プーチン露首相訪印。
	3月29日	堂道駐印大使とシール財務省経済局長は、総額2,156億1,100万円を限度とする円借款に関する書簡の交換を実施。
	4月11日	訪米中のシン首相がオバマ米大統領と印米首脳会談を実施。
	4月13日	シン首相はワシントンで実施された核セキュリティー・サミットに出席。
	4月16日	ブラジリアで第2回BRICs首脳会合が開催され、共同コミュニケを出す。
	4月30日	北澤防衛相がデリーでアントニー国防大臣と会談。直嶋経済産業相はアルワリア計画委員会副委員長との間で日印エネルギー対話を行うと共に、シャルマー商工大臣と会談。
	5月6日	ムンバイ特別法廷は、ムンバイ・テロ事件実行犯で唯一逮捕されたカサブ容疑者に対し死刑の判決を言い渡す。

年	月　日	主な出来事
2010	5月17日	国防省は、中距離弾道ミサイル「アグニⅡ」の試射に成功した旨発表。
	5月21日	インド外務省は、韓国の哨戒艇「天安」の沈没事案に関し、沈没事案を非難する声明を出す。
	5月26日	パティール大統領は、5月31日まで胡錦涛国家主席の招請により、国賓として中国を訪問。
	5月28日	西ベンガル州西ミドナプル県ジャルグラム地区において、特急列車が脱線し、少なくとも65名以上が死亡。マオイストによる犯行が疑われる。
	6月3日	タタ・モーターズがグジャラート州に「ナノ」を生産する新たな工場を完成させ、生産を開始。 訪米中のクリシュナ外相が、ワシントンでクリントン国務長官との間で第1回印米戦略的対話を実施。
	6月23日	タミルナードゥ州コインバトールで世界タミル語会議が開催される。
	6月28日	東京で第1回日印原子力協定締結交渉が開催される（～29日）。
	7月3日	デリーのインディラ・ガンディー国際空港ターミナル3の開港式典が、シン首相らが出席して実施される。
	7月6日	デリーで佐々江外務審議官、中江防衛事務次官、ラーオ印外務次官、クマール国防長官との間で、第1回日印次官級「2＋2」対話が、また佐々江外務審議官及びラーオ外務次官の間で日印外務次官級政務協議が実施される。
	7月12日	インド宇宙研究機関（ISRO）は、インドの地球観測衛星「カルトサット2B」と4基の小型衛星を載せたPSLVロケットC15の打ち上げに成功した旨発表。
	7月14日	シン首相により、ナクサライト浸透地域の州首相等を集めたナクサライト対策会議がデリーで開始され、統一治安部隊の創設などが決定される。
	8月5日	ラダック地方で豪雨により大規模な洪水と土砂崩れが発生し、レー及びその周辺で150名以上が死亡し、200名以上が行方不明となる。
	8月21日	岡田外務大臣が訪印（～22日）、クリシュナ外相との間で第4回日印外相間戦略的対話を実施した他、シン首相を表敬。
	8月26日	ナーランダに国際大学を設立する構想である「ナーランダ大学法案」を下院が採決。
	8月27日	インド政府がデリーで在外公館長会議を開催し、119人の大使及び高等弁務官が出席。
	9月3日	ソニア・ガンディー・コングレス党総裁が再任される。
	9月10日	ヤムナ川の水位が危機水位に達したことを受け、デリー州政府は低地域に居住する市民に対して至急緊急避難するよう警告を発する。
	9月20日	インドの与野党の国会議員から構成される印日議員フォーラム一行が訪日（～25日）。民主党国会議員との意見交換を実施。
	9月30日	アラーハーバード高等裁判所は、アヨーディヤーのバーブリー・モスクの土地所有権について、土地を3分割し、3分の1をヒンドゥー教徒、3分の1をイスラム教徒、3分の1を「ニルモーヒー・アカーラー（ヒンドゥー教団）」にそれぞれ割り当てるとの判決を出す。

年	月　日	主な出来事
2010	10月８日	第２回日印原子力協定締結交渉がデリーで開催される（～９日）。
	10月19日	第４回日印経済戦略会議が東京で開催される。
	10月24日	シン首相が訪日（～26日）、「次なる10年に向けた日印戦略的グローバル・パートナーシップ」と題する共同声明を発表し、「日印包括的経済連携協定締結に関する両首脳間共同声明」に署名する。
	11月10日	アショーク・チャバン・マハーラーシュトラ州首相は、汚職容疑のため辞表を出す。
	11月24日	ビハール州議会選挙の開票が行われ、ジャナタ・ダル統一派（JDU）とインド人民党（BJP）の与党連合が全議席の５分の４を越す議席数を獲得する歴史的圧勝に終わり、26日から第２次ニティーシュ・クマール州政権が誕生。
	12月３日	インド外務報道官は、北朝鮮による延坪島砲撃に関し、「この遺憾な出来事によって人命が失われたことに心を痛めている。（中略）インドは韓国が地域の平和と安定を保つために示している成熟さ・・・・・」と自制を評価する旨発言。
	12月４日	インド都市開発省と日本の国土交通省及びジェトロに共催で、日印都市交通セミナーがデリーで開催される。
	12月15日	中国の温家宝首相が訪印（～17日）、シン首相との間で首脳会談を実施。
	12月17日	コルカタ市及びハウラ県にあるコルカタ大学下のカレッジで学生組織同士（CPI-Mと草の根会議派傘下にある）が衝突し、少なくとも10名が負傷する。

＊この年表は、1947～2004は、辛島昇編『南アジア史』（山川出版社2004）より抜粋し、編集部が追加したもの。2005～2010は、公益財団法人日印協会の機関誌『月刊インド』の「インドニュース」から抜粋、一部、固有名詞の表記や文章の書き換えをしたものです。抜粋・転載の許可をくださった公益財団法人日印協会のご好意に感謝します。

インドの歴代大統領

代	大統領	就任日	退任日
1	ラージェーンドラ・プラサード Rajendra Prasad	1950年1月26日	1962年5月13日
2	サルヴパッリー・ラーダークリシュナン Sarvepalli Radhakrishnan	1962年5月13日	1967年5月13日
3	ザーキル・フセイン Zakir Hussein	1967年5月13日	1969年5月3日
	ヴァラーハギリ・ヴェーンカタ・ギリ（代理） Varahagiri Venkata Giri	1969年5月3日	1969年7月20日
	ムハンマド・ヒダーヤトゥッラー（代理） Mohammad Hidayatullah	1969年7月20日	1969年8月24日
4	ヴァラーハギリ・ヴェーンカタ・ギリ Varahagiri Venkata Giri	1969年8月24日	1974年8月24日
5	ファフルッディーン・アリー・アフマド Fakhruddin Ali Ahmed	1974年8月24日	1977年2月11日
	バサッパ・ダーナッパ・ジャッティ（代理） Basappa Danappa Jatti	1977年2月11日	1977年7月25日
6	ニーラム・サンジーヴァ・レッディ Neelam Sanjiva Reddy	1977年7月25日	1982年7月25日
7	ギャーニー・ジャイル・シン Giani Zail Singh	1982年7月25日	1987年7月25日
8	ラーマスワーミ・ヴェーンカタラーマン Ramaswamy Venkataraman	1987年7月25日	1992年7月25日
9	シャンカルダヤール・シャルマー Shankar Dayal Sharma	1992年7月25日	1997年7月25日
10	コチェリル・ラーマン・ナラヤナン Kocheril Raman Narayanan	1997年7月25日	2002年7月25日
11	アブドゥル・カラーム Abdul Kalam	2002年6月1日	2007年7月25日
12	プラティバー・パーティル Pratibha Devisingh Patil	2007年7月25日	現　職

（Wikipediaより）

インドの歴代首相

	首相名	就任日	退任日	所属政党
1	ジャワハルラール・ネルー	1947年８月15日	1964年５月27日	インド国民会議
2	グルザーリーラール・ナンダー	1964年５月27日	1964年６月9日	インド国民会議
3	ラール・バハードゥル・シャーストリー	1964年６月9日	1966年１月11日	インド国民会議
4	グルザーリーラール・ナンダー	1966年１月11日	1966年１月24日	インド国民会議
5	インディラ・ガンディー	1966年1月24日	1977年５月24日	インド国民会議
6	モラルジー・デーサーイー	1977年５月24日	1979年７月28日	ジャナタ党
7	チョードリー・チャラン・シン	1979年７月28日	1980年１月14日	ジャナタ党
8	インディラ・ガンディー	1980年１月14日	1984年10月31日	インド国民会議
9	ラジーヴ・ガンディー	1984年10月31日	1989年12月２日	インド国民会議
10	ヴィシュワナート・プラタープ・シン	1989年12月２日	1990年11月10日	ジャナタ・ダル
11	チャンドラ・シェーカル	1990年11月10日	1991年６月21日	ジャナタ・ダル
12	ナラシンハ・ラーオ	1991年６月21日	1996年５月16日	インド国民会議
13	アタル・ビハーリー・ヴァージペーイー	1996年５月16日	1996年６月１日	インド人民党
14	デーヴェー・ガウダ	1996年６月１日	1997年４月21日	ジャナタ・ダル
15	インドラ・クマール・グジュラール	1997年４月21日	1998年５月19日	ジャナタ・ダル
16	アタル・ビハーリー・ヴァージペーイー	1998年５月19日	2004年５月22日	インド人民党
17	マンモハン・シン	2004年５月22日	現　職	インド国民会議

（Wikipediaより）

関西日印文化協会　役員名簿

顧　　問	黒澤　一晃	神戸松蔭女子学院大学名誉教授（元学長）
	相馬　達雄	弁護士事務所所長・弁護士
	森本　達雄	名城大学名誉教授
	頼富　本宏	種智院大学名誉教授（元学長）
	P. S. Chadha	インドクラブ名誉会長
	Mukesh Punjabi	在日本印度商業会議所名誉会頭
	A. D. Daswaney	インディアン・ソーシャル・ソサエティ名誉会長
会　　長	溝上　富夫	大阪外国語大学名誉教授
副 会 長	永田　二朗	元兵庫県国際交流協会専務理事
	徳田　一彦	神戸ユネスコ協会副会長・理事
理　　事	土佐　舜成	(財)国際仏教興隆協会理事
	山田　芳信	NPO法人　神戸デザイン協会
	三住　重雄	サードステーションジャパン代表
	藤原　真奈美	マルガユニティー主宰
監　　事	佐藤　典久	神戸北野天満神社宮司
	中崎　和代	北野国際センター所長

公的機関　役員・所在地等

在日インド大使館

〒102-0074　東京都千代田区九段南２丁目２－11

電話03－3262—2391　FAX03－3262－2301

大使　Alok Prasad閣下　秘書／通訳　中村修子氏　土屋徳子氏

在大阪・神戸インド総領事館

〒541-0056　大阪市中央区久太郎町１丁目９－26　船場ＩＳビル10階

電話06－6261－7299　FAX06－6261－7021

E-mail: cgindia @ gol.com

総領事　Vikas Swarup閣下

領事　Pieyush Gupta,　副領事　R.C.Goyal, 会計 Basant K.Sahuの各氏、総領事秘書 Pritam K.Chawla 氏。

日本人職員　通訳・武笠千春氏、商務担当・貝原晶男氏、査証担当・土屋泰子氏、他。

在日本印度商業会議所

〒541-0061大阪市中央区備後町１丁目４－10　マックステル・ハウス601号

電話06－6261－1741／２　FAX06－6264－1605

E-mall: iccd@Vega.Ocn.ne.jp　Home Page: htttp://www.iccjonline.com

名誉会頭　Mukesh　Punjabi 氏

名誉副会頭　K.P.Qam氏、名誉秘書　R.N.Chakrabarty 氏他各役員。

関西日印文化協会　会則　平成15年11月26日

（名称および事務所）
第１条　本会は『関西日印文化協会』と称し、事務所を神戸市内に置く。

（目的）
第２条　本会は、日印両国の文化、経済等の交流を図り、相互理解と友好親善に寄与する事を目的とする。

（事業）
第３条　前条の目的を達成するために、次の事業を行う。
（１）講演会、音楽会、舞踊会、セミナー等の開催。
（２）会報、出版物の発行。
（３）その他、本会の目的達成に必要な事業。

（会員）
第４条　本会の主旨に賛同し入会を希望する個人・団体は会員２名以上の推薦と理事会の承認により、本会の会員になることができる。

（役員）
第５条　本会に次の役員を置く。
会長　　１名
副会長　２名
理事　　５名以上
監事　　２名
２、理事、監事は総会において選出する。
３、会長、副会長は、理事の互選により選任する。

（役員の任期）
第６条　１、役員の任期は２年とし、再任を妨げない。
２、補欠により就任した役員の任期は前任者の残存期間とする。

（役員の担当業務）
第７条　１、会長は本会を代表し会務を統括する。
２、副会長は、会長を補佐し、会長に事故ある時は、その職務を代行する。
３、理事は、理事会を構成し、事業を執行する。
４、監事は、事業の執行状況並びに会計の監査をする。

（顧問）
第８条　会長は、理事会の推薦により、顧問を委嘱することができる。

（会議）

第９条　１、会議は総会および理事会とする

２、総会及び理事会は、会長が招集し、会議の議長は会長が行なう。

（総会）

第10条　１、総会は定時総会と臨時総会とする。

２、定時総会は、毎年１回、５月に開催し、予算・決算、その他重要事項を審議する。

３、臨時総会は、会長が必要と認めた場合、又は、理事の２分の１以上から請求があった場合に開催しなければならない。

４、総会の議事は、出席者の過半数で決し、可否同数の場合は、議長の決するところによる。

（理事会）

第11条　理事会は次の事項を審議する。

（１）総会に提出する議案。

（２）総会の議決した事項の執行。

（３）その他総会の議決を要しない会務の執行。

理事会の開催及び議事は、第10条第３項及び第４項の規定を準用する。

（会費）

第12条　１、本会の会費は、個人会員・年額5000円、団体会員・年額１万円、賛助会員・年額３万円とする。

２、本会の財源は会費のほか寄付金、事業収入、その他の収入をもって充てる。

（会計年度）

第13条　本会の会計年度は、毎年４月１日から翌年３月31日までとする。

（事務局）

第14条　１、本会に事務局長及び書記を置き、会務を処理する。

２、事務局長は、理事の中から選任する。

（退会）

第15条　会員が次の各号の１に該当するときは、理事会の決議により退会を認めることができる。

（１）退会の意思を表明した場合。

（２）会費を１年以上滞納したとき。

（３）本会の目的趣旨に反し、又は著しく信用を傷つける行為のあったとき。

（細則）

第16条　この会の運営についての細則は、理事会の議を経て定める。

現代人に贈る〝偉大なる魂（マハートマ）〟からのメッセージ――。

ガンディー

インド独立への道

B.R.ナンダ 著
森本達雄 訳

A5判上製
定価7,350円(税込)

英語圏で39版を重ねる古典的名著を初邦訳。
「偉大なる人物の精神の発展の、完全な、しかも読んで面白い素描である」
――アメリカ『ニューヨーク・タイムズ』紙評

「本書は、ガンディーの生涯の驚嘆すべき記述であり、
ここに比類なく、魅力的な人物の人間像が語りつくされている」――アトリー英国首相の言葉より

好評既刊

※表示の価格はすべて税込です

『ガンディーの生涯』(上・下)　K・クリパラーニ著／森本達雄訳　定価各840円

『タゴール著作集』(全11巻＋別巻)　編集委員：山室静／野間宏／森本達雄／我妻和男
第1巻～第11巻＝定価6,825円・別巻＝定価8,665円

第三文明社　〒160-0022 東京都新宿区新宿1-23-5　TEL.03(5269)7145　FAX.03(5269)7146

大阪駅前ビル地下街で　一番古いインド料理店　SINCE 1998

インド料理の激戦区として知られるこの場所で、15年以上にも渡り数多くのお客様に愛され続けてきた店、それがインドレストラン・ミラです。この海法の激しい場所で長年営業を続けてこれたのは、それなりの理由があります。ミラのインド料理は、世界中のホテルや高級レストランで活躍してきた一流のインド人コックが腕をふるう本格的な北インド料理です。本物のインドの味にきっと満足していただけるでしょう。

何杯でもOK!

生ビール一杯 100円!　ディナーのみ

ランチセット: ¥800～
ディナーセット: ¥2,000～

営業時間 (無休)
ランチ　11:30～15:00 (L.O.14:30)
ディナー　17:30～22:00 (L.O.21:30)

Meera　インドレストラン ミラ

〒530-0001 大阪市北区梅田1 大阪駅前第1ビルB2
Tel: 06-6348-0134　www.meera.jp

一度汚れた水をキレイにするのは大変なことです。だったら最初から汚さなければいい。

自然を汚さない健康商品

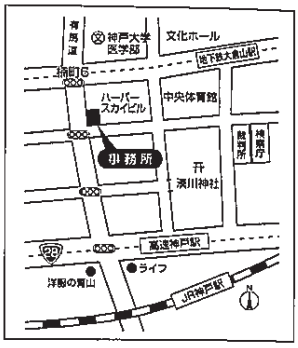
ナチハマのエポクリン加工商品は、ゴムの微粒子を布やブラシに吸着させ乾燥させたものです。ゴムの吸油性と摩擦力を利用して、洗剤や石けんを使わずに汚れや油膜を落とします。原料はゴムなので安全、自然環境にやさしい商品です。

株式会社 ナチハマ
兵庫県加古郡稲美町加古1676-10 TEL 0794-92-6078
http://www.nachihama.co.jp/

そよ風 法律事務所

〒650-0017 神戸市中央区楠町 6 丁目 2-6
ハーバースカイビル 401 号
TEL(078)341 - 6487 FAX(078)341 - 0760

所長 弁護士 池上 徹



VK FAR EAST EXPORTERS (JAPAN) LTD

Office : Sanomiya Venture Bldg., 8th Floor, Roon No. 811,
1-23, Hamabe-dori 4-Chome, Chuo-ku, Kobe, Kobe 651-0083
Office Tel. : (078)222-6731(Direct) (078)222-4351/2
P.O. Box : Port P.O.Box 171, Kobe 651-0191
Fax : (078)222-5125
Mobile Phone : 090-8986-9626 Mr. Vishnu Motowani 090-1446-1250 Mr. Kishore Motowani
Business Line : Export of Electronics, Sundries & Textiles

Motowani V.	-Director	Res.tel	(078)882-7529
Motowani K.	-Director	〃	(078)882-7241

CJL CONQUEST(JAPAN)LTD.

コンクウエスト ジャパン リミテッド有限会社

NEO HEIGHTS SANNOMIYA, 403, 1-33 HAMABE-DORI, 3-CHOME, CHUO-KU, KOBE, JAPAN.
TEL : 078-272-1521 FAX : 078-272-1522 E-MAIL : conquest@rio.odn.ne.jp.

Established 1987

EXPORTERS OF SECONDARY METALS / USED EARTH MOVING & USED HOSPITAL EQUIPMENTS

IMPORT AGENTS FOR REPUTED KNITTED AND WOVEN GARMENT MANUFACUTERERS

Specializing in Trade and Liaison work with India since Inception

Associate offices in Mumbai and New Delhi

We have all-over India team of 47 people specializing in Sales/Purchase/Inspections and Logistic arrangements

Oh!SunTV

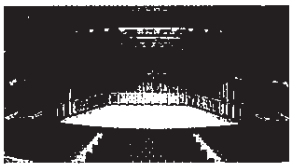
株式会社 サンテレビジョン

〒650-8536 神戸市中央区港島中町6-9-1

http://www.sun-tv.co.jp

おっ!サンテレビ

兵庫県立芸術文化センター



兵庫県立芸術文化センターは、コンサートをはじめ、オペラ、バレエも上演できる KOBELCO 大ホール、演劇やミュージカルを中心とした阪急 中ホール、室内楽に適した神戸女学院 小ホールの3つのホールを備えています。バラエティー豊かな自主公演を行い、世界各地で開かれたオーディションで選ばれた若手演奏家たちで構成する専属の管弦楽団など、舞台芸術の創造と交流の拠点となる新しいタイプのパブリックシアターです。

便利なアクセス!!(阪急電車特急乗車の場合)
大阪・梅田からも神戸・三宮からも15分

◎ 阪急 西宮北口駅 南改札口スグ(連絡デッキで直結)
◎ JR西宮駅より徒歩15分(阪急バス7分)
※ご来場は、電車・バスなどの公共交通機関をご利用ください。

〒663-8204 兵庫県西宮市高松町2-22
TEL. 0798-68-0223

先行予約会員募集中!
詳しくは http://www.gcenter-hyogo.jp

■ ポートピアホール 1,702席スクール形式 610席
（6カ国語同時通訳設備、コンサートホール対応）
■ 高速LAN全館完備
■ 客室745室
■ 宴会場36室
■ レストラン、バーなど13店
■ 室内・屋外プール、テニスコート、ジム、サウナ
■ ショッピングアーケード
■ 駐車場450台収容

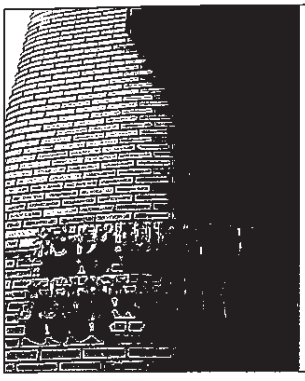
PORTOPIA HOTEL 〒650-0046 神戸市中央区港島中町6丁目10番地1
ご予約・お問い合わせ Tel.(078)302-1111
ホームページアドレス http://www.portopia.co.jp

神戸文化ホール 貸ホール

大ホール（2,043席）
中ホール（ 904席）

資料請求・お問い合わせ
神戸文化ホール事業課 TEL 078－351－3535
http://www.kobe-bunka.jp/hall/

colors VIACOM18
SONY ENTERTAINMENT TELEVISION ASIA
ZEE TV
StarPlus
Tv bole to...
HUM TV TUM
Bringing Smiles Across Miles
Web:www.humtumtv.com
Email:support@humtumtv.com
Tel:06-6261-4288
Mob:090-3829-8422



Kinokuniya:Always at the Forefront of "Knowledge"

Domestic Stores : Kansai Area

梅田本店 [Umeda Main Store] | 06-6372-5821

大津店 [Otsu Store] / MOVIX京都店 [Movix Kyoto Store] / グランドビル店 [Grand Building Store] / 阪急32番街店 [Hankyu Sanjunibangai Store] / 本町店 [Honmachi Store] / 京橋店 [Kyobashi Store] / 高槻店 [Takatsuki Store] / 堺北花田店 [Sakai Kita-Hanada Store] / 泉北店[Senboku Store] / 神戸店 [Kobe Store] / 西神店[Seishin Store] / 加古川店 [Kakogawa Store] / 川西店[Kawanishi Store]

紀伊國屋書店
http://www.kinokuniya.co.jp

こどもに自信と喜びを！

株式会社　教栄社

TOTAL・EDUCATION

（学習塾・教材販売）

代表取締役　中塚全紀

〒671-1227 兵庫県姫路市網干区和久441-7 TEL079-273-1725 FAX079-273-4678

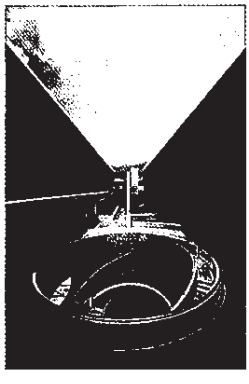
兵庫県立美術館

HYOGO PREFECTURAL MUSEUM OF ART

兵庫県立美術館－「芸術の館」－は、阪神・淡路大震災からの「復興のシンボル」として、2002(平成14)年神戸東部新都心（ＨＡＴ神戸）に開館しました。世界的に著名な建築家・安藤忠雄氏によって設計された建物は、延床面積・約27,500㎡という西日本最大級の規模で、芸術作品としてもみどころがいっぱいです。

館内では、兵庫ゆかりの小磯良平、金山平三の作品など8,000点を超える収蔵品から選りすぐって展示する「コレクション展」や、国内外の名品を紹介する「特別展」をはじめ、コンサート、映画などさまざまな芸術文化イベントも開催しています。

また、美術情報センター、レストラン、カフェなどの施設も備えています。ぜひ、魅力満載の県立美術館におこしください。



〒651-0073　兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1［HAT神戸内］

TEL 078-262-0901(代表)　FAX 078-262-0903　http://www.artm.pref.hyogo.jp

アイホレプラティシュターナム
AIHORE PratiSThaanam
大阪アーユルヴェーダ研究所

所長：イナムラ．ヒロエ．シャルマ
(M.D. Ayu. 日本アーユルヴェーダ学会理事)
Patron: Prof. H.S. Sharma(Ph.D. Ayu.)
(Ex.Dean Gujarat Ayurveda University India)

＊日本におけるアーユルヴェーダ教育史の中で研修、教育、研究の最初の研究所である＊
（アーユルヴェーダ、ヴェーダ、サンスクリット、ヒンディー、グジャラティー、占星術）
[First Institute for teaching and research in the history of AYURVEDeducation in Japan.]
Established on DHANVANTARI JAYANTI day of 1987

＊〒532-0011 大阪市淀川区西中島４丁目 7-12-501 TEL:0081-(0)6-6305-0102
＊ Nishinakajima 4 Chome 7-12-501, Yodogawa-ku, OSAKA City, JAPAN
① e-mail:ih6h-inmr@asahi-net.or.jp ② e-mail:aihore@yahoo.com ① http://www.e-ayurveda.com ② http://shop.ispot.jp/

代表取締役 芝 池 正 治

株式会社 LAN（ラン） 建築事務所
１級建築士事務所

〒532-0002 大阪市淀川区東三国４丁目10番２号 ＥＧ新御堂301号
TEL（０６）６３９８－０２１５(代) FAX（０６）６３９８－０２１６
分 室 〒532-0004 大阪市淀川区西宮原3丁目2番1号 第2日研マンション414号
TEL（０６）６３９８－５１１０(代) FAX（０６）６３９８－５１１８
E-mail：lan-ao@mars.plala.or.jp

“新しい電気環境と新鮮な空調環境を”
クリーンルーム・空調設備 恒温恒湿・環境試験設備

株式会社 昇電社

神戸営業所 〒658-0003 神戸市東灘区本山北町５－２－２
TEL078-451-9619 FAX078-452-4478
本 社 〒158-0083 東京都世田谷区奥沢７-16-７
TEL03-3704-0511 FAX03-3702-8647

JANKI (JAPAN) LTD.

Office : Maya Bldg. No. 2, 4th Floor 2-5, Minami-Honmachi 1-chome, Chuo-ku, Osaka 541-0054
Office Tel. : (06)6264-3050/1
P.O. Box : Higashi 664, Osaka 540-8697
Fax : (06)6264-4440
Mobile Phone : 090-1131-0675 (B.K. Goenka) 090-1904-4177 (V.K. Goenka)
E-mail : jankijpn@gol.com Home Page : http://www2.gol.com/users/jankijpn
Business Line : Exporter of Textiles, Machines, Compressors and Parts, Generators, Earth Moving Equipments, Electronic Goods, Photographic & X-Ray Goods, Medical Items, Health Care Equipments and Sundry Goods

B.K. Goenka. -Managing Director Res.tel. (078)242-2082
V.K. Goenka -Director 〃 (078)242-2082

南インド古典舞踊グループ

マルガ ダンス ユニティー

marga dance unity

http://manami-f.com

主宰　モガリ　真奈美

神々への祈り、感謝、神話をリズミカルな
ステップ、目・首・指（ムドラー）などの
繊細な動きで表現する。祝福の踊り。

◎レッスンクラス（新大阪、宝塚、神戸にて）
一般クラス、エクササイズクラス、ジュニアクラス
レッスン生募集中。
◎各種イベント出演、講師などの依頼承ります。

E-mail marga-m@nifty.com　TEL. 09085354130

ISL Imperial Solutions

isl@imperialsolutions.jp

IN-TOYO BLDG., ROOM#903
3-2-5 HACHIMANDOURI
CHUO-KU, KOBE CITY
T:(078) 291-5360/71
F:(078) 291-5374/78

WWW.IMPERIALSOLUTIONS.JP

インド共和国発足60周年記念特集号　広告賛助協賛一覧

広　告

神戸地下街株式会社

エアインディア

神戸国際観光コンベンション協会

JUPITER INTERNATIONAL CORPORATION

株式会社　第三文明社

インドレストラン　ミラ

ナチハマ

そよ風法律事務所

VK FAR EAST EXPORTERS(JAPAN)LTD.

CONQUEST(JAPAN)LTD.

株式会社　サンテレビジョン

兵庫県立芸術文化センター

株式会社　神戸ポートピアホテル

財団法人　神戸市民文化振興財団

HUM TUM TV

株式会社　紀伊國屋書店梅田本店

株式会社　教栄社

兵庫県立美術館

大阪アーユルヴェーダ研究所

株式会社　ラン建築事務所

株式会社　昇電社

JANKI (JAPAN) LTD.

マルガ ダンス ユニティー

IMPERIAL SOLUTIONS LTD.

（順不同）

賛　助

黒澤　一晃

頼富　本宏

溝上　富夫

永田　二朗

徳田　一彦

山田　芳信

土佐　舜成

三住　重雄

モガリ　真奈美

佐藤　典久

中崎　和代

三上　敦史

浅野　正運

笹倉　明徳

芦田賀津美

加門　得勇

芝　　長

辻　　恵子

南波　亘子

特別賛助

株式会社　兵庫ジャーナル社

（順不同）

編集後記

■アカデミー賞８部門で賞をとった「スラムドッグ・ミリオネア」の原作者が我が大阪・神戸の新インド総領事として赴任すると聞いたとき、興奮した。今までこれほど世界的に有名な外交官でかつ文人が日本に勤務された前例は多分あるまい。しかもご出身が、ネルー一家を始め、アミターブ・バッチャンというスーパースター等の著名人を多く輩出しているアラーハーバードと聞き、最初の留学先が同じアラーハーバードであった筆者には一層親しみを覚えた。初対面以後、ほとんど毎月１、２回はお会いしている。その旺盛な仕事ぶりと博識、それに小説通りのユーモアにも、深い感銘を受けている。今のことなら何でもご存じなので、総領事のご存じない昔のインドの話を聞かせて彼を驚かせるのが私の楽しみとなっている。（溝上富夫）

■21世紀は中国、インドの世紀といわれるが、特にインドの政治、社会、経済に関する新聞記事が少ない。その中で最近大きく報じられたのは、日本とインドがＥＰＡ（経済連携協定）に署名し、10年以内に品目数ベースで86％の関税を撤廃するというニュースで、各紙２段抜きで報じたのは、日印の新たな関係の前進だろう。もう一つ興味のあるニュースはインド２都市で在外兵庫県人会が発足するという２月17日付け神戸新聞の記事である。昨年末インドを訪問した井戸兵庫県知事が、現地日本人駐在員との交流会を開いた時兵庫ゆかりの方々が多かったので兵庫県人会の立ち上げを提案したところ、多くの賛同を得てデリー、ムンバイに県人会が作られることとなった。違った意味で日印友好のよいニュースであった。なお、本号には「歴代インド大統領・首相」のリストを掲載しました。参考になれば幸甚です。（永田二朗）

■2008年の㈳神戸青年会議所の理事長に日本でも珍しいインド人のキラン・Ｓ・セティ氏が選ばれ、その業績に対し市民から高い評価を受けたが、2010年にも続いて神戸生まれ北野町育ちのインド人、ムケシ・バルワニ氏が理事長に就任し、卓越した指導力で国際都市・神戸の魅力発信に努め地域活性化に貢献した。（山田芳信）

■今回初めて「日印文化」の編集等に関わらせていただき当協会の役割と会長はじめ諸先輩方の真摯な取り組みに多くを学ばさせていただきました。これからも、微力ではありますがインド古典舞踊を通して文化交流に尽力したいと思います。(モガリ真奈美)

■企業・団体の皆様から広告賛助を賜りました。心から厚く厚く御礼を申し上げます。東日本大地震が発生し甚大な被災となっています。ご逝去された皆様の御冥福を謹んでお祈り申し上げますと共に、被災者の皆様のご無事を心からお祈り申し上げます。末尾になりましたが、最後まで編集のご協力をいただいた兵庫ジャーナル社、竹本由美様、佐々木圭様に心から厚く御礼を申し上げます。（徳田一彦）

※本出版物は、公益財団法人兵庫県国際交流協会より、平成23年度国際交流事業助成金（兵国協第1号）の交付を受けたものであることを記し、ここに感謝の意を表明いたします。

日印文化
インド共和国発足60周年記念特集号

発行日　2011(平成23)年５月３日
編集発行人　溝上富夫
発行所　関西日印文化協会　〒650-0002 神戸市中央区北野町３丁目12 電話078-221-2139
北野国際センター内
制作協力　株式会社　兵庫ジャーナル社　電話078-331-7560

[Kansainichiin©2011.all rights reserved]

＊本誌に掲載致します論文・エッセー等は、寄稿者のご見解・ご意見であり、当協会の見解を反映するものではありませんので、念のため申し添えます。

レトロとモダンが出会う街　神戸

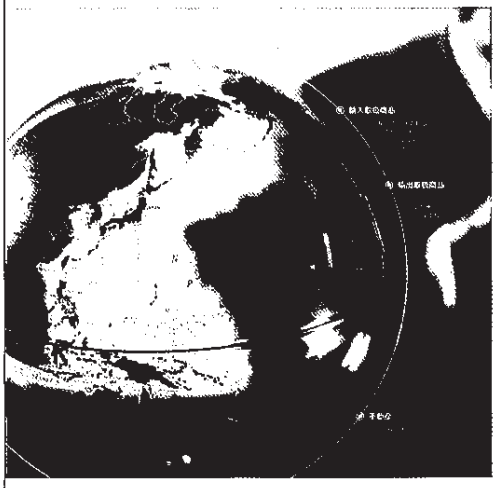
緑なす六甲山と世界に開かれた神戸港。
異国情緒漂うノスタルジックな街並みと、日本最古の名湯…。
多彩な魅力が煌めく神戸を満喫するなら、「神戸公式観光サイト Feel KOBE」を
チェックしてからお出かけください！

神戸公式観光サイト Feel KOBE⇒http://feel-kobe.jp/

Feel KOBE観光推進協議会
事務局：財団法人神戸国際観光コンベンション[illegible]
Kobe Convention & Visitors Association

A Gateway to Doing Business with Japan

フィールドは世界へ広がる



私たちは1959年の設立以来、
様々な分野でお客さまにご満足いただけるよう
専門商社として、グローバルに事業を展開してきました。
より広いフィールドへ、
より確かな信頼と優れたサービス実現のために、
世界へ向かって、未来へ向かって、
さらなる努力を続けてまいります。

JUPITER INTERNATIONAL CORPORATION
神戸市中央区生田町2-2-25　ガーデンハウス1F
TEL:078-222-3880　Fax:078-222-3885　E-mail Info@jupiter-int.co.jp　URL http://www.jupiter-int.co.jp

多彩な文化と歴史の国、インドへ

インドへの直行便はエアインディアだけ。充実した国内線ネットワークでインド国内60都市を結びます。
ボーイング777−300ERをはじめとする最新機材で、インドへはますます快適に。

एअर इंडिया
AIR INDIA

〒541-0052 大阪市中央区安土町2丁目3−13　大阪国際ビル3階　TEL 06-6264-1781（予約）TEL06-6264-5923（営業）